

# 西日本の瓦塔集成

人文社会科学研究科 地域文化論専攻

1 1 5 M 2 0 7 丸山優香

# 目次

序	1
第1章 瓦塔とその先行研究	
第1節 瓦塔とは	2
第2節 先行研究	4
第2章 西日本の古代瓦塔の様相	
第1節 近畿地方	8
第2節 山陰地方	21
第3節 山陽地方	24
第4節 四国地方	44
第5節 九州地方	45
第3章 西日本の瓦塔の分析	
第1節 平行丸瓦型について	57
第2節 放射状丸瓦型について	63
第3節 中世以降の瓦塔について	65
結語	70
西日本の瓦塔一覧表	71
参考文献	73
挿図出典	75

# 序

近年、各地域で瓦塔の集成がなされており、瓦塔が多く出土する関東地方や東海地方、北陸地方では、その屋蓋部や初層軸部の組物の形態による編年が作成されている。しかし、瓦塔の詳細な研究は地域を限定したものが多く、広い範囲にわたって集成・分析されたものは少ない。特に西日本では、瓦塔の出土数が東日本に比べて圧倒的に少ないこと、出土する瓦塔が個性的なため類型化が困難であることから、研究対象を比較的瓦塔の出土が集中する地域に限定する傾向にあった。地域ごとに分析し、その地域色を見出すことも重要であるが、広い範囲で捉えなければその系譜を探ることはできない。本論では、第2章で西日本（三重県を含む近畿地方以西）出土の瓦塔を集成し、第3章で各地域の瓦塔の屋蓋部・軸部の形態を分析し、西日本全体の瓦塔の系譜を探ることを目的とする。

なお、日本の地方区分は表1に従う。東北地方、関東地方、中部地方を東日本とし、近畿地方、中国地方、四国地方、九州地方を西日本とする。北海道、沖縄県に関しては、瓦塔の出土が確認されていないため、今回は考察の対象外として表には含まない。

表1 日本の地方区分

東日本	東北地方		青森県	秋田県	岩手県
			宮城県	山形県	福島県
	関東地方		茨城県	栃木県	群馬県
			埼玉県	東京都	千葉県 神奈川県
	中部地方	甲信越地方	山梨県	長野県	新潟県
		北陸地方	福井県	富山県	石川県
		東海地方	静岡県	岐阜県	愛知県
	近畿地方		三重県	滋賀県	奈良県
			京都府	大阪府	和歌山県 兵庫県
西日本	中国地方	山陰地方	鳥取県	島根県	
		山陽地方	岡山県	広島県	山口県
	四国地方		香川県	愛媛県	徳島県 高知県
	九州地方	北九州地方	福岡県	佐賀県	長崎県
			大分県	熊本県	
		南九州地方	宮崎県	鹿児島県	

# 第1章 瓦塔とその先行研究

## 第1節 瓦塔とは

瓦塔とは、1.5m～2.0m ほどの土師質・須恵質の土製小仏塔で、その多くは五重塔である。まれに七重塔、三重塔の例もあるが、完形で出土することは少なく、全形が明らかでないものがほとんどである。単層のものや、屋蓋部の構造が入母屋造りの場合などは、瓦塔ではなく瓦堂と称される。瓦塔は、奈良・平安時代に隆盛し、その後鎌倉・室町時代まで続く例も確認されている。基本的には、須恵器や瓦とともに須恵器窯で焼成されるため、窯跡やその灰原のほか、供給先である寺院跡や集落跡でも出土する。東北地方から九州地方までの各地で出土例があるが、大規模な窯跡群が存在する地域からの出土がほとんどである。

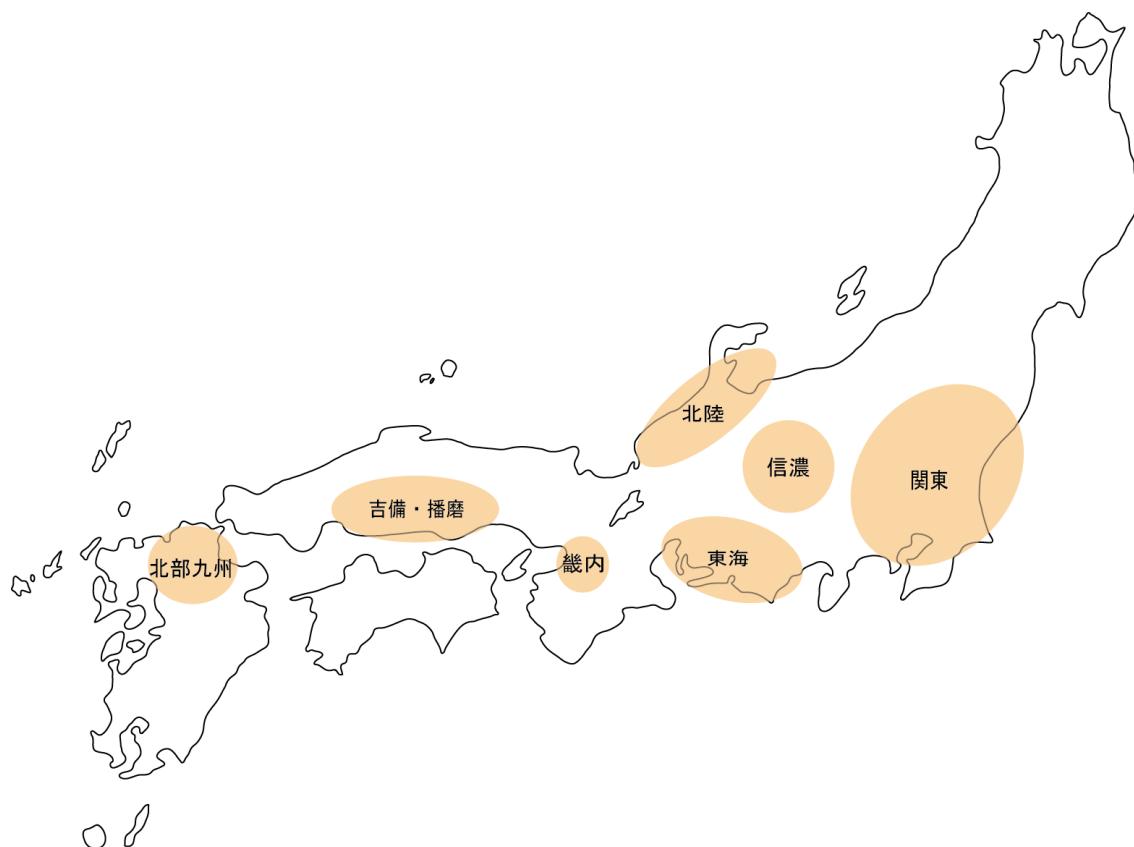


図1 瓦塔の分布状況

瓦塔は仏塔としての性格を有しており、村落内寺院や在地仏教信仰といった地方での仏教文化の普及を探る手掛かりになる。また、このような集落遺跡に付随するような小規模な仏教施設だけではなく、七堂伽藍を有する寺院跡や、官衙遺跡からの出土例も認められる。瓦塔は、必ず中空になるように成形されているが、これについて松本修自氏は、「形態」「尺度」「空間」「機能」といった建築の基礎となる主要な要素を備えていると述べており、瓦塔を「小建築」と認識している（松本 1983）。瓦塔内部の空間には、線刻仏画や埴仏を奉安していた例もあり、厨子としての性格もうかがえる。

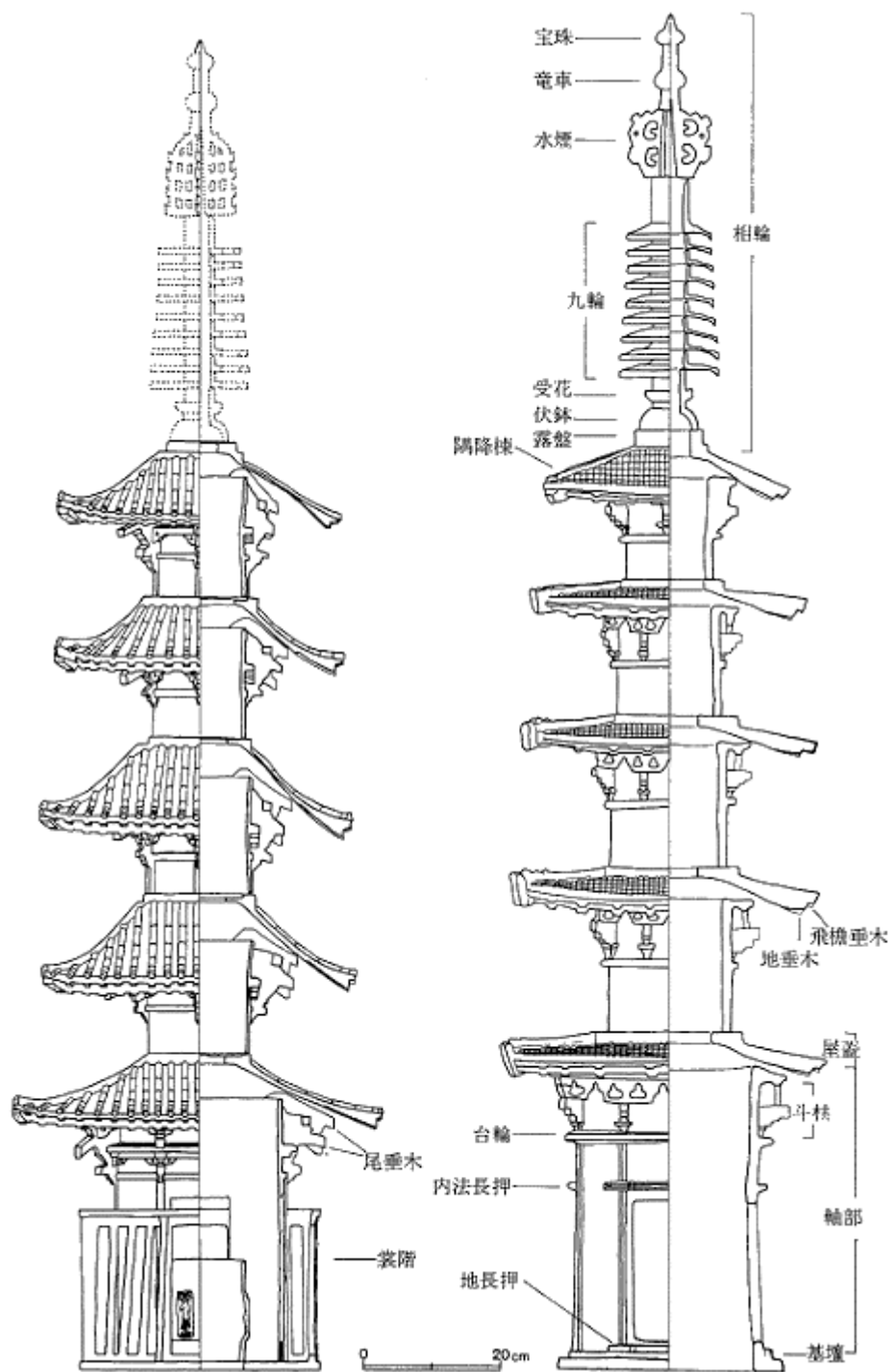


図2 瓦塔の各部名称（左：静岡県宇志北大里遺跡出土の瓦塔、右：東京都宅部山遺跡出土の瓦塔）

## 第2節 先行研究

瓦塔が注目され始めたのは、谷川磐雄氏が自身の論考で「土製多重塔」としていくつかの瓦塔を紹介してからである（谷川 1927）。その後、柴田常恵氏が「瓦塔」という名称を用いるようになり<sup>(1)</sup>、木造高層塔婆の代わりとして瓦塔を安置していたとする「塔婆代用説」を提示した（柴田 1931）。1950年代になると、資料の増加にともなって瓦塔への関心が高まる。しかし、瓦塔が出土するのは関東地方が圧倒的に多く、研究の対象とされるのもやはり関東地方が中心であった。1950年代から60年代にかけて、精力的に瓦塔の研究をしていた石村喜英氏は、瓦塔の設立目的として以下の5説に整理している（石村 1971）。

- (1) 衆縁勧募説 寺院建立の予定地に建てて、浄財勧募に資したものとする。
- (2) 造塔信仰説 信仰の対象として、堂内に安置されたものとする。
- (3) 塔婆代用説 木造高層塔婆の代用として造立されたものと見做す。
- (4) 想定墳墓説 墳墓の表飾として造立されたか、また墓碑のごとく屋外に建てられたものと見做す。
- (5) 墳墓標識説 墓塔または供養塔として、墓辺または墓上に建てられたものとする。

石村氏は（4）を発展させた（5）の説を支持しているようであるが、これには異論も多い。（1）（2）（3）の説で瓦塔の存在を認識するのが妥当であろう。また、石村氏はこれらの説を提言するにあたり、窯跡から瓦塔が出土した例を考察の対象外としているが、窯跡から出土した場合、その窯の操業時期から瓦塔の製作時期を導き出すことができる。実際に須恵器窯跡から瓦塔が出土する例はかなり多く、近年では、出土した窯跡の性格を知る手掛かりとして注目されている。

1980年代になると、出土遺物や遺構の保存に関する技術が進んだこともあって、各地域で瓦塔の集成が行われるようになった。松本修自氏は、瓦塔の斗拱部の表現に注目し、建築史の視点で分析を進め、それらの変遷から瓦塔の斗拱部の編年を行った（松本 1983）。また、高崎光司氏は松本氏の研究をさらに進め、地域性に着目した製作技法による編年を提示した（高崎 1989）。石田成年氏は、大阪府域の瓦塔を集成し、東日本と西日本では瓦塔の屋蓋部の表現に差異があることを指摘した（石田 1997）。本論文では、石田氏の分類に倣い、東日本で多く出土する半截竹管状の工具を用いて丸瓦のみを表現した屋蓋部を石田 A タイプ、西日本で多く出土する棒状粘土を貼り付けて丸瓦を表現した屋蓋部を石田 B タイプと呼称する。



図3 石田Aタイプと石田Bタイプの屋蓋部例

池田敏宏氏は、関東地方出土の瓦塔を中心に分析し、屋蓋部と垂木の表現手法を表2、表3のように分類しており、それを元に編年を行っている。

この他、出河裕典氏が長野県内出土瓦塔の屋蓋部の形態を検討し、また、各地域の瓦塔が出土した窯跡の分析を行っている（出河1995・1996）。善端直氏は、おもに北陸地方の瓦塔を集成し、その編年を行っている（善端1994）。永井邦仁氏は、東海地方を中心に瓦塔の屋蓋部・斗栱部の分析と編年を行っており、東海地方ではおもに「猿投窯型瓦塔」と「美濃須衛窯型瓦塔」が盛行し、「猿投窯型瓦塔」の製作技法が遠江へ伝播していくことを示した（永井2006・2008・2009・2012・2016）。亀田修一氏は、岡山県、広島県の瓦塔を集成しており、山陽地方から出土する瓦塔は屋蓋部が多角形や円形を呈するものが多く、その軸部も円筒形で透かしを施したものが多いことを指摘した（亀田2002）。小田富士雄氏は、九州地方の瓦塔を集成し、出土した遺跡ごとに分析している（小田ほか2007）。

表 2 池田敏宏氏の屋蓋部表現手法の分類（池田 1999 より）

手法	瓦継ぎ目長さ	瓦幅	特徴
幅広棒状粘土貼り付け手法	丸瓦 約 2.0 cm 平瓦 ——	丸瓦 約 1.5 cm 平瓦 約 1.5 cm	丸瓦は棒状粘土貼り付けにより表現。平瓦は丸瓦と丸瓦の間に平坦面を設けて表現。丸瓦にのみ瓦継ぎ目を施す。
幅狭棒状粘土貼り付け手法	丸瓦 約 1.5 cm 平瓦 約 1.4 cm	丸瓦 約 1.1 cm 平瓦 約 2.1 cm	丸瓦は棒状粘土貼り付けにより表現。平瓦は丸瓦と丸瓦の間に平坦面を設けて表現。丸瓦・平瓦とも瓦継ぎ目を施す。
幅広工具押し引き A 手法	約 1.5 cm 前後	約 1.1 cm	丸瓦のみ表現。瓦表現は工具先端による。爪先状沈線による多節の瓦継ぎ目を施すのが特徴。
幅広工具押し引き B 手法	約 2.5 cm 前後	約 1.1 cm	丸瓦のみ表現。瓦表現は工具押し引きによる。結節による多節の瓦継ぎ目を施す。
幅狭工具押し引き A 手法	軒先先端から瓦継ぎ目まで約 2.0 cm	約 0.7 cm	丸瓦のみ表現。瓦継ぎ目は工具押し引きによる結節を軒先先端寄り一節目に施すのみ。
幅狭工具押し引き B 手法	——	約 0.7 cm	丸瓦のみ表現。瓦継ぎ目を全く施さない。
幅狭工具押し引き C 手法	軒先先端から瓦継ぎ目まで約 2.0 cm。その他については不規則。	約 0.7 cm	丸瓦のみ表現。瓦継ぎ目は軒先先端寄り一節目の瓦継ぎ目表現と、不規則な細かな継ぎ目表現とにより構成される。

表 3 池田敏宏氏の軒裏垂木表現手法の分類（池田 1999 より）

手法		垂木長	垂木幅	特徴
棒状粘土貼り付け手法	地垂木 飛檐垂木	欠損・不明 欠損・不明	約 2.0 cm 欠損・不明	棒状粘土貼り付け後、へら削り調整施される。
へら削り出し A 手法	地垂木 飛檐垂木	約 8.5 cm 約 1.5 cm	約 1.5 cm 約 1.5 cm	地垂木・飛檐垂木がへら削り出し B 手法のものに比べ短い。また、へら削り出し B 手法のものと比べて垂木間隔が広い。
へら削り出し B 手法	地垂木 飛檐垂木	約 4.5 cm 約 2.5 cm	約 1.5 cm 約 1.5 cm	地垂木・飛檐垂木がへら削り出し A 手法のものに比べ長い。また、へら削り出し A 手法のものと比べて垂木間隔が狭い。
へら削り出し C1 手法	一軒構成	約 8.0 cm	約 2.0 cm	垂木幅、および垂木間隔（約 2.5 cm）を広くとる。
へら削り出し C2 手法	一軒構成	約 8.0 cm	約 1.5 cm	垂木幅、および垂木間隔（約 1.2 cm）を狭くとる。



<註>

- (1) 柴田氏は「瓦塔」について、「瓦質で塔の形状をなすもの」としているが、実際は土師質もしくは須恵質のものがほとんどである。まれに瓦質のものもある。

## 第2章 西日本の古代瓦塔の様相

### 第1節 近畿地方

#### 三重県

##### 岡山1号窯跡（四日市市上海老町）

岡山窯跡群は、四日市市西部の県地区と菰野町との境に位置し、7基の窯跡が確認されている。瓦塔が出土したのは1号窯のみである。瓦塔と共伴した須恵器は、田辺昭三氏による大阪府の陶邑編年のⅢ期からⅣ期にかけてのMT21型式、TK7型式に相当するため、1号窯の操業時期は7世紀末～8世紀後半頃と考えられる。この他にも円面硯、平瓦、丸瓦、土師器が出土している。

表4 岡山窯跡群の操業時期

	時期	おもな遺物
6号窯	6世紀前半～7世紀	須恵器
1号窯	7世紀末～8世紀後半	須恵器、円面硯、瓦、瓦塔
2号窯	8世紀後半～9世紀	須恵器、円面硯
7号窯		須恵器、瓦
4号窯		山茶碗
3号窯	12世紀前半	山茶碗

（5号窯は詳細不明）

瓦塔は屋蓋部23点、斗拱部1点、基壇部1点が確認されている。屋蓋部片は、いずれも棒状の粘土を貼り付けて丸瓦を表現する石田Bタイプで、丸瓦と丸瓦の間に平坦面を設けて平瓦を表現した本瓦葺きであるが、丸瓦、平瓦とも瓦一枚一枚の表現はない。屋蓋部の形態の差異から、少なくとも2個体の瓦塔が生産されていたと考えられる。

#### 屋蓋部Ⅰ類

棒状粘土を貼り付けて丸瓦を表現し、丸瓦は中心部から放射状に配置されている。丸瓦の上部をヘラで浅く削り、段を設けている。裏面はハケ調整されており、軒先から2.0～2.5 cmのところをヘラで方形に削り取って一軒の垂木を表現している。平面方形の屋蓋部でありながら、丸瓦が放射状に配置されることは、実際の塔建築においてはあり得ない構造である。屋蓋部の平面が多角形や円形の場合は、必然的に隅棟および丸瓦を放射状に配置することになるが、おそらく岡山1号窯跡の瓦塔は平面方形の屋蓋であろう。このような瓦塔の屋蓋部はあまり見られず、これに類似する例は北部九州で数例みられるのみである。この型式の瓦塔については、第3章で詳しく考察する。

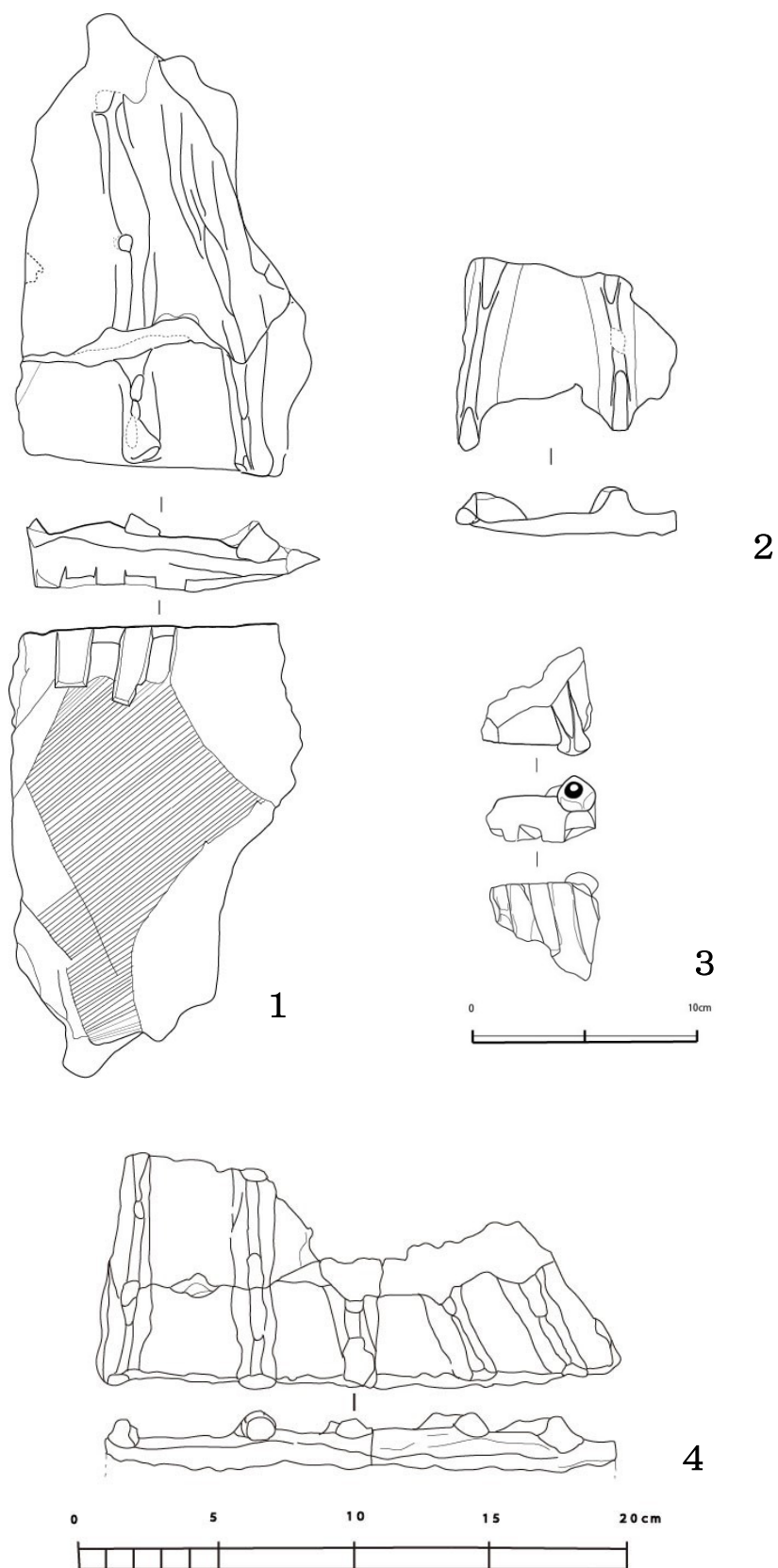


図4 岡山1号窯跡出土の瓦塔屋蓋部Ⅰ類

## 屋蓋部Ⅱ類

棒状粘土を貼り付けて隅棟を作り、その後に同じく棒状粘土を隅棟から軒先に向かって貼り付けて丸瓦を表現している。丸瓦の上部をヘラで削り取り、2つ1セットの刺突文を施すのが特徴である。瓦塔において、隅棟の軒先付近にのみ刺突文や竹管文が見られる場合、それらを鬼瓦と解釈することもできるが、岡山1号窯跡の屋蓋部Ⅱ類は丸瓦のすべてに刺突文が施されている。裏面は、ヘラで方形に削り取って作り出した垂木列を、さらに垂直に分断するようにヘラで削り取り、地垂木と飛檐垂木を表現している。

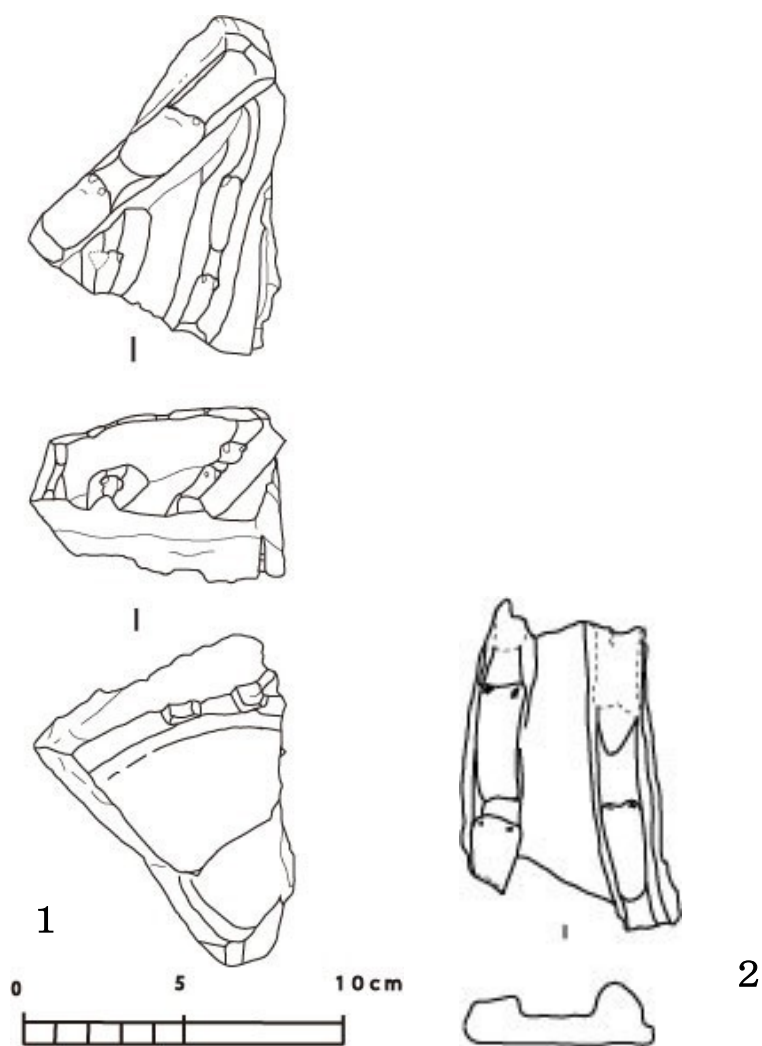


図5 岡山1号窯跡出土の瓦塔屋蓋部Ⅱ類

### 中ノ庄遺跡（松阪市中ノ庄町）

鎌倉時代から室町時代のもものとされる遺構から、山茶碗、陶器、土師器などと共伴したため、報告書（三重県教育委員会 1972）では中世の遺物として扱われてきたが、遺構自体は不明瞭であり、再度検討する必要がある。実見した限り、瓦塔の様相や成形方法、焼成から、古代の瓦塔と判断した。報告書に記載されている屋蓋部 8 点のうち、4 点は陶塔であると書かれているが、これは自然釉がかかっているだけであり、つくりは他の屋蓋部片と同じである。

#### 屋蓋部

棒状粘土を貼り付けて丸瓦を表現しており、規則的な節が沈線で施されている。丸瓦と丸瓦の間に平坦面を設けて平瓦を表現しているが、瓦一枚一枚の表現はない。隅棟は幅 2.2 cm、高さ 2.0 cm のかまぼこ形である。裏面は隅木、地垂木、飛檐垂木、茅負、木負が表現されており、隅木幅は 1.6 cm、垂木幅は 1.7 cm である。隅木は幅 1.6 cm で木の葉の圧痕がみられ、隅木の鼻の部分は欠損している。茅負の厚さは軒先で 1.0 cm、木負の厚さは 0.7 cm である。

#### 軸部

柱部には丸桁の表現があり、斗栱部には凸形を押さえによって三斗を表現している。階層部の壁面には、ヘラ描きで頭貫や柱が表現される。

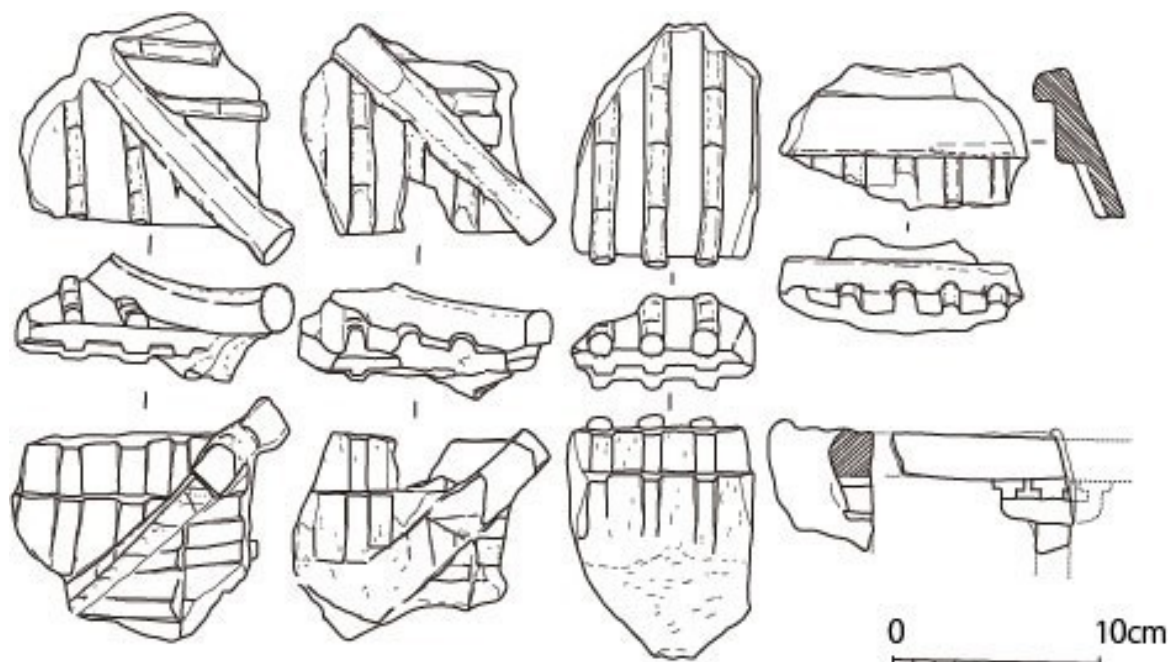


図 6 中ノ庄遺跡出土の瓦塔

## 滋賀県

### 衣川廃寺（大津市堅田衣川町）

衣川廃寺は、天神川と御呂戸川に挟まれた志賀丘陵の先端に造営されており、湖南地方が広く見渡せるところに位置している。この廃寺から北へ 450m、南へ 300m の範囲に白鳳時代の瓦が点在しているが、この付近で白鳳期まで遡る建物跡は未だ見つかっていない。

寺域からは金堂と塔跡が検出されており、この塔跡の基壇土から、瓦片と共に瓦塔片が出土している。これらは版築が行われた塔基壇の一層目に含まれており、この塔が建立される前の段階で、瓦塔を安置した瓦葺き建物が存在していたと想定される。出土した平瓦が格子目叩きのもののみで、縄目叩きの平瓦がみられないことから、この寺は 7 世紀末には廃絶していたと推測される。したがって、瓦塔の年代も古くまで遡ると考えられる。

出土した瓦塔は屋蓋部 2 点で、いずれも軒先の部分である。双方とも半截竹管状工具で丸瓦のみを表現しているが、それぞれ別個体と考えられる。片方は隅棟、稚児棟を表現しているが、もう一方は隅棟先の表現を省略している。



図 7 衣川廃寺出土の瓦塔

## 奈良県

### 薬師寺（奈良市西ノ京町）

薬師寺境内の発掘調査で瓦塔片が 2 点出土し、1 点は高欄部、もう 1 点は基壇部である。全体的に緑釉が施され、ごく一部に褐釉が認められる二彩の瓦塔である。胎土・焼成ともに灰白色で軟質であり、三彩・二彩陶器とよく似ている。高欄部は共伴した基壇部に対してやや大きく、別個体の可能性が考えられる。

赤彩や黒彩を施した瓦塔は全国各地で数例確認されているが、緑釉を施した瓦塔は本例と次項で紹介する瀬後谷瓦窯例のみである。

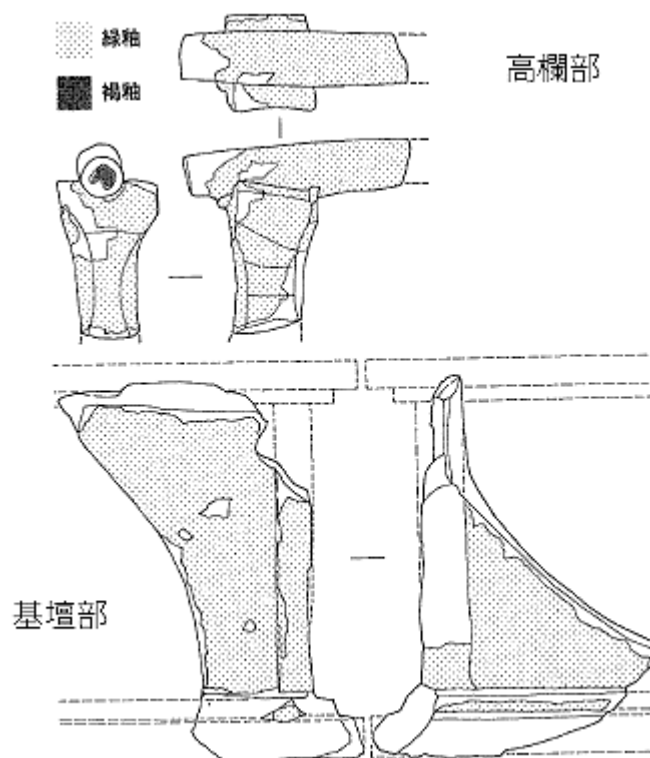


図 8 薬師寺出土の瓦塔

## 京都府

### 瀬後谷瓦窯（木津川市市坂）

市坂地区の南端に位置し、北側には平城京大膳職所用の瓦窯である市坂瓦窯や、市坂瓦窯の工房跡とされている上人ヶ平遺跡がある。瀬後谷瓦窯の推定 4・5 号窯灰原からまとめて瓦塔片が出土しており、2・3 号窯灰原からも若干数出土している。推定 4 号窯自体は削り取られていたため窯跡は確認できない状態であったが、その灰原からは、瓦塔とともに平城宮瓦編年第Ⅰ期～第Ⅱ期中頃の瓦と平城宮土器編年第Ⅱ期ないし第Ⅲ期の須恵器<sup>(1)</sup>が出土しているため、瓦塔の製作時期は 8 世紀代であろう。瓦塔の一部に鉛を含んだ人工釉が付着しているが、前項の薬師寺例のように外装目的か、あるいは接着剤として使用したかは不明である。瓦塔片は 100 点以上出土しており、最低でも 3 個体は存在していたと思われる。屋蓋部と基壇部はほぼ復元されている。

屋蓋部は一辺約 36 cm で、棒状粘土を貼り付けて丸瓦を表現している。平瓦部は、半円状の工具で刻み目を付け、瓦一枚一枚を表現している。平瓦の軒先には、連続的な竹管文が施されている。隅棟は、軒先に向かうにつれて徐々に太くなっている棒状粘土を貼り付けて表現している。裏面には、断面長方形の粘土を貼り付けて垂木を表現し、その内側には軒桁を表現した粘土板が貼り付けられている。また、裏面の四隅には斗と尾垂木が表現されている。屋蓋部上部には高欄が表現されている。



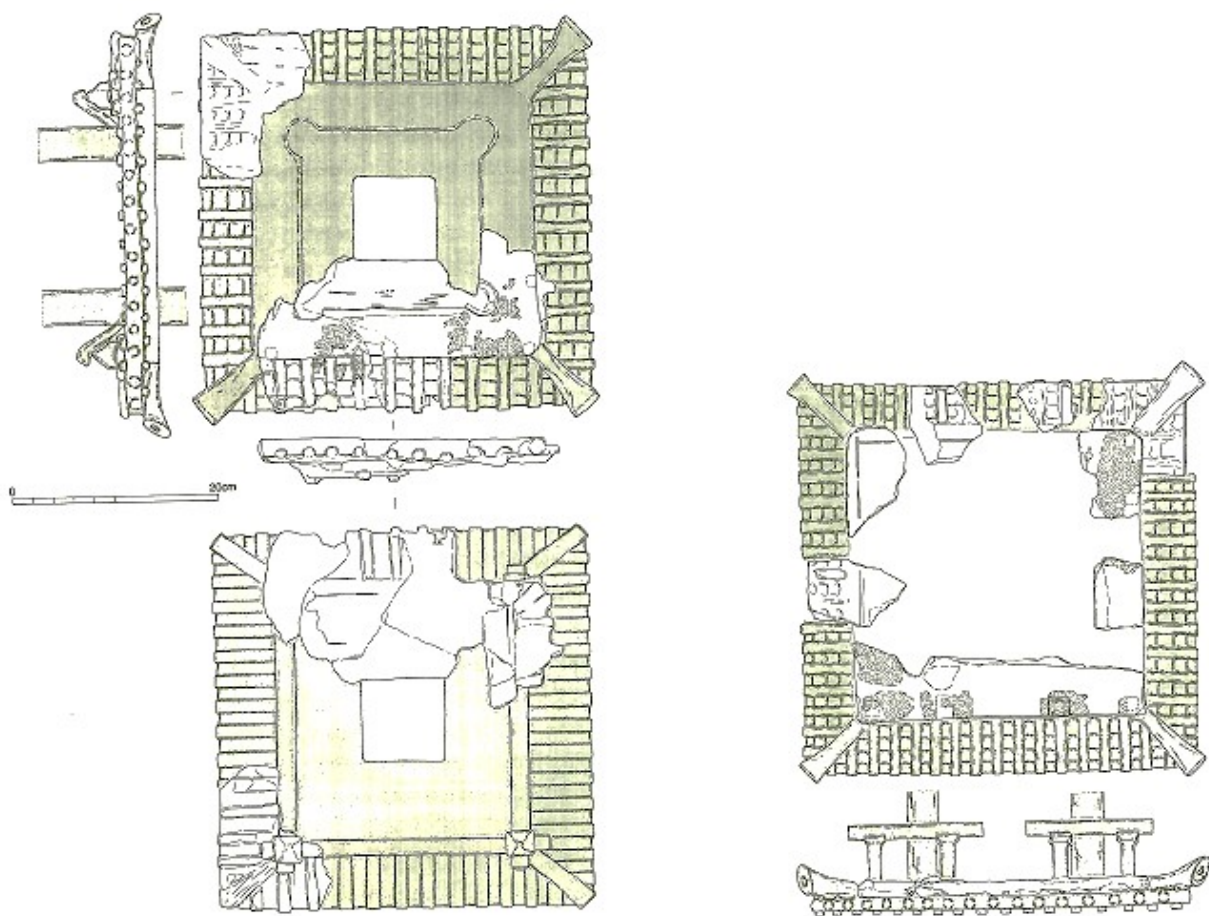


図9 瀬後谷瓦窯出土の瓦塔

## 大阪府

### 勝部遺跡（豊中市勝部）

1900年に勝部地区の田から採集されたものであり、出土状況の詳細は不明である。屋蓋部3点が採集され、うち2点は接合した。屋蓋部とその直上の軸部を一体に作っている。丸瓦は棒状粘土を貼り付けて表現しており、隅棟は丸瓦よりも太く短く作られている。屋蓋部の一辺は18.0 cmで、かなり小ぶりである。裏面に垂木表現はない。軸部は一辺9.6 cmで、辺の中心に3.5 cmの窓を設ける。



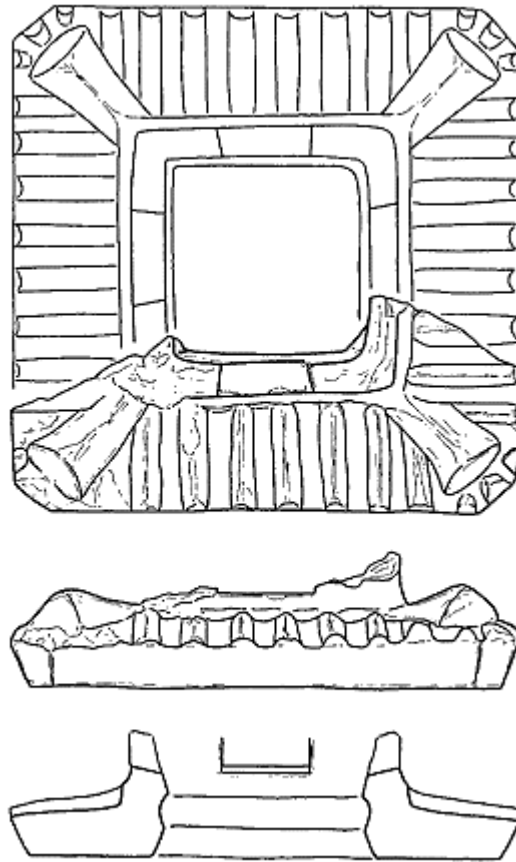


図 10 勝部遺跡出土の瓦塔

### 五十村<sup>い</sup>廃寺（柏原市旭ヶ丘）

主要伽藍の1つと考えられる基壇の一部が検出されており、地覆石に使用されたであろう凝灰岩や瓦積みの最下段が確認されている。瓦塔はこの瓦積みに使用された平瓦に混ざって、基壇の北方から3点出土している。屋蓋部が1点、他の2点は初層軸部で、いずれも青灰色の須恵質である。屋蓋部と軸部を一体にして焼成した痕跡がみられる。

検出された基壇建物に伴うであろう瓦の年代から、当瓦塔は、8世紀初頭は下らないものとされている。もし、その時期に位置付けられるならば、衣川廃寺例と同じくかなり古い時期の初期の瓦塔である。

#### 屋蓋部

棒状粘土を貼り付けて丸瓦を表現し、軒先に向かって真っすぐに貼り付けられている。丸瓦幅は約1.4 cm、断面三角形でしっかりとなでつけられている。平瓦幅は約3.4 cm。裏面にも棒状の粘土を貼り付け、垂木を表現している。垂木幅は約1.4 cm。

#### 初層軸部

双方とも開口部がある。片方は側柱と頭貫が表現しており、屋蓋部との接合が剥離した痕が残っている。もう一方は頭貫（あるいは台輪か）表現と屋蓋部との間に「北」という線刻が施されている。瓦塔は各部位ごとに成形し、焼成後に組み立てるため、各階層を判別するために数字を記したものが見られるが、このように方角を記す例は稀である。



図 11 五十村廃寺出土の瓦塔

#### 鶴田池東遺跡（堺市菱木）

須恵質の瓦塔の屋蓋部が 1 点出土しており、一辺は約 11.0 cm、厚さ約 2.5 cm である。勝部遺跡例

同様、瓦塔の屋蓋部にしてはかなり小ぶりの印象を受ける。

四隅に棒状粘土を貼り付けて隅棟を表現しており、ヘラ状工具で凹線状に削り取って丸瓦が浮き彫りになるように成形している。これは、瓦塔において垂木を表現する場合によく用いられる手法であり、この方法で屋根瓦を表現する例は稀である。また、屋蓋部の中央には心柱を通すための孔を設けるのが一般的ではあるが、本例はその心柱孔が開けられておらず、円形に調整されているのみである。裏面は平滑に仕上げてあり、垂木表現はみられない。

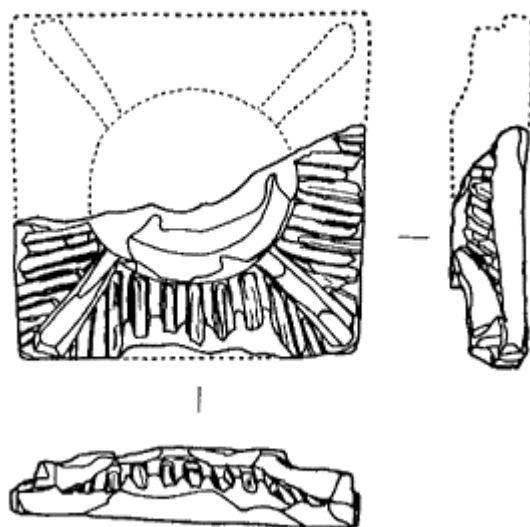


図 12 鶴田池東遺跡出土の瓦塔

## 和歌山県

### 北山廃寺（紀の川市貴志川町北山）

検出された塔跡の心礎が半地下式で、尚且つ軒平瓦が出土していないことから、かなり早い段階に創建されたと考えられる。出土した土器、瓦類から、その年代は 7 世紀中頃を下らないだろう。奈良県明日香の坂田寺の系統の瓦を有しており、検出された瓦溜まりがすべて南北一直線上に並ぶことから、四天王寺式伽藍配置を採用していたとされている。瓦塔片は中門推定地の瓦溜まりから出土しており、坂田寺系の単弁八葉蓮華文軒丸瓦、平城宮式の重圈文軒丸瓦<sup>(2)</sup>が共伴している。

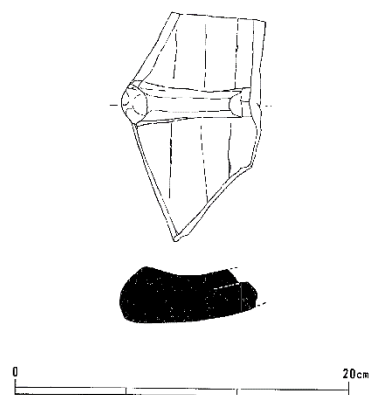


図 13 北山廃寺出土の瓦塔

出土した瓦塔片は1点で、軒先の部分である。軒先は大きく開いており、平面が八角形の屋蓋部と考えられる。

## 兵庫県

### 岩戸4号窯跡（丹波市市島町岩戸）

丹波国氷上郡に属し、市島町の中心地域の東側の谷に位置する。岩戸4号窯跡は鴨庄古窯跡群のうちの1つで、その操業時期は8世紀前半～後半である。鴨庄古窯跡群で生産された須恵器類は、三ッ塚廃寺を中心とする三ッ塚遺跡へ供給されていたとされている。

出土した瓦塔片は屋蓋部で、棒状粘土を貼り付けて隅棟と丸瓦を表現している。丸瓦は、段を設けて瓦一枚一枚を表現している。平面形が方形の屋蓋部が想定でき、この屋蓋部に組み合う軸部は断面方形のものである。裏面に垂木表現はない。

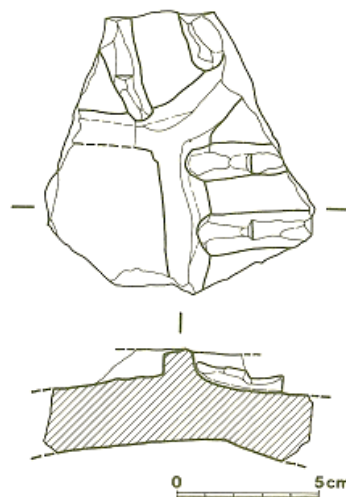


図14 岩戸4号窯跡出土の瓦塔

### 金心寺廃寺（三田市屋敷町）

金心寺廃寺は、摂津国有馬郡に属する唯一の古代寺院である。近世の城下町である屋敷町遺跡と重複しているため失われた部分も多く、瓦塔の年代を特定することは困難である。出土した瓦や、検出された井戸から出土した木材より、創建時期は7世紀末～8世紀前葉と推定されている。金心寺廃寺の瓦塔については永井氏が分析しており、同氏はこの瓦塔を8世紀前葉～中葉に位置付けている（永井2009）。

#### 屋蓋部

焼成は硬質で、色調は灰色である。棒状粘土を貼り付けて丸瓦を表現し、規則的な沈線を施している。丸瓦と丸瓦の間に平坦面を設けて平瓦とし、軒先には花卉のスタンプを押して軒丸瓦を表現している。裏面は軒先から3.6 cmのところまでヘラで削り取り、一軒の垂木を表現している。屋蓋部は平面方形で、残存部から屋蓋部の一辺は約33.0 cmと想定されている。

#### 軸部

軸部は方柱形のもの、円筒形の2種類出土している。方柱形のは初層軸部で、隅柱から2.6 cmのところに開口部がある。粘土紐を積み上げて成形した後、円柱形の粘土を貼り付けて柱を表現している。斗拱部は残っていない。出土した屋蓋部と組み合うものと思われる。

円筒形のは上端に斗拱部が残存している。壁面には7.6×1.4 cmの透かしが入り、軸部の直径は残存部から約20.0 cmと推定される。

#### 基壇部

焼成は硬質で、色調は明灰色である。円筒形軸部の基底部と思われる。上部には直径約6.0 mmの小孔が穿たれている。

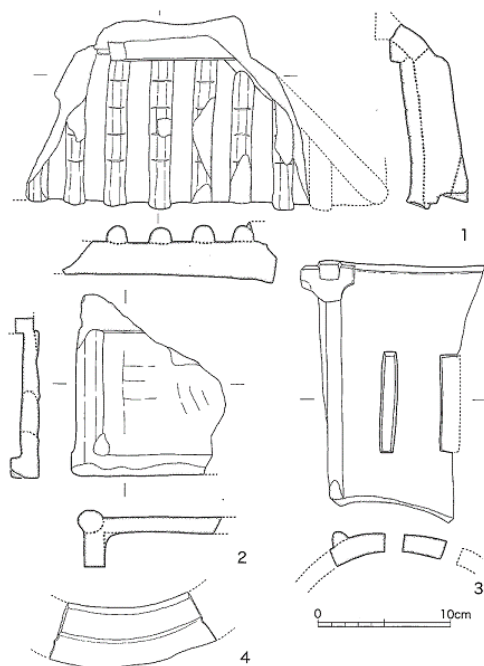


図 15 金心寺廃寺出土の瓦塔

#### 廣渡廢寺（小野市廣渡町）

播磨国賀毛郡に属し、播磨東部、加古川の中流左岸に位置する。発掘調査により西塔跡、東塔跡、金堂跡、講堂跡、中門跡、回廊跡などが検出されている。瓦塔は西塔跡から、奈良時代後期以降の瓦とともに出土している。瓦塔片は、発掘調査以前の採集品も含めると総数 20 点以上である。

1 は屋蓋部の隅棟の部分である。棒状粘土を貼り付けて隅棟と丸瓦を表現しており、丸瓦にのみ約 3.0 cm ごとに沈線を施して瓦一枚一枚を表現している。裏面は軸部に隠れる部分であるためか、垂木表現はみられない。

2 も屋蓋部で、棒状粘土を貼り付けて丸瓦（隅棟か？）を表現している。裏面には垂木表現があり、垂木幅は 1.5 cm、垂木間隔は 2.0～2.5 cm である。垂木の奥には、軸部の一部かと思われる部材が残っている。

3 は初層軸部である。欠損しているが、上部には斗栱表現があったと思われる。壁面には、横方向に 2 条の線刻がみられ、その間に縦方向の線刻を一定間隔に施している。2 条の横方向線刻の下には、波状の線刻が施されている。縦方向に突帯を貼り付けて柱を、横方向に突帯を貼り付けて台輪と内法長押を表現している。下部には、幅 2.5 cm の透かしが施されている。

この他、九輪が採集されている。上下は欠損しているが、残存部の高さは 15.0 cm 弱で、輪形が 5 つ連なっている。中心は直径 1.0 cm 内外の空洞になっている。

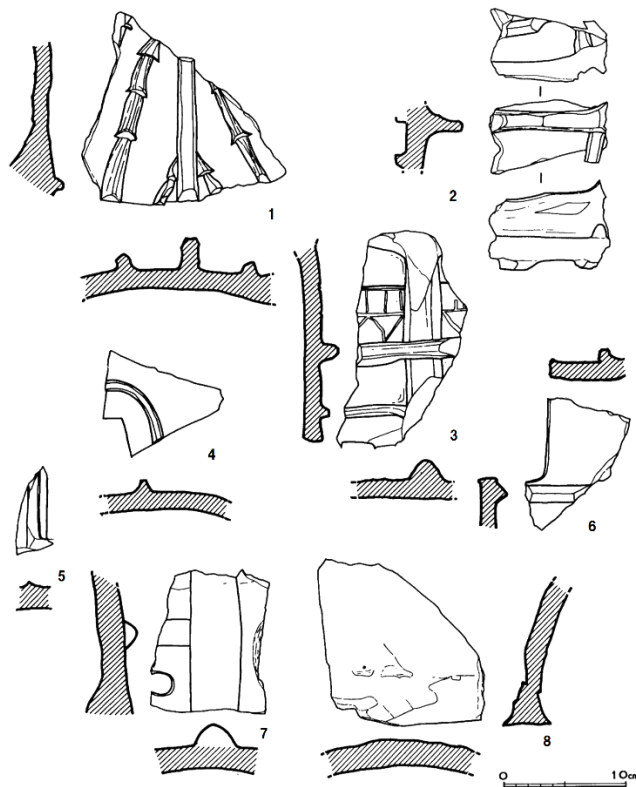


図 16 広渡廃寺出土の瓦塔

### 正法寺山遺跡（三木市和田町）

加古川左岸の丘陵地に位置する小和田神社の裏から瓦塔の屋蓋部と軸部が出土しているが、詳細は不明である。屋蓋部は棒状粘土を貼り付けて丸瓦を表現しており、軸部には型抜きした仏像がみられる。これは軸部ではなく、瓦塔内部に安置されていた内陣の破片かと思われる。仏像が表現されている破片は3点出土しており、そのうちの1点は富山県高岡市福岡町の石名田木舟遺跡出土の埴仏と同範である。



図 17 正法寺山遺跡出土の瓦塔（内陣の仏像）

### 千本屋廃寺（宍粟市山崎町千本屋）

播磨国宍粟郡に属し、播磨西部の揖保川の中流、山崎盆地の中央部に位置する。築地跡と思われる遺構の北寄りの一帯から、瓦塔が出土している。

屋蓋部と軸部を一体にして成形しており、瓦塔 1 はその屋蓋部と軸部の接合部分である。屋蓋部は平面円形で、棒状粘土を放射状に 6 本貼り付けて丸瓦を表現している。軸部も円筒形で、壁面には縦長の細い透かしを施している。瓦塔 2 は初層軸部で、瓦塔 1 と同一個体と思われる。いずれも胎土に砂粒を含み、焼成はあまく、色調は黄褐色である。瓦塔 2 の下端から 10 cm のところに突帯をめぐるせている。軸部の復元径は約 30 cm である。

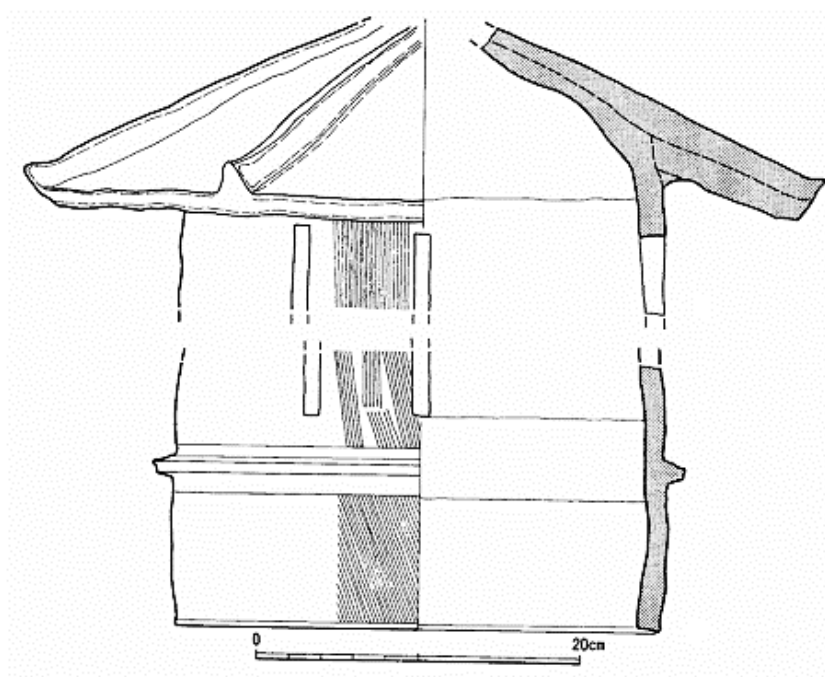


図 18 千本屋廃寺出土の瓦塔

## 第 2 節 山陰地方

### 鳥取県

#### 大原廃寺（倉吉市大原）

白鳳時代に創建され、8 世紀後半まで続くとされている。検出された塔心礎は、長径 2.9m、短径 2.8m で山陰地方最大級のものとされている。創建時の軒丸瓦と軒平瓦の文様は、川原寺系統のものである。

出土した瓦塔は小片 1 点のみで、瓦溜まりから出土した。屋蓋部、もしくは軸部の破片と思われる。

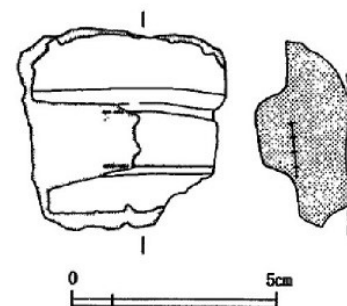


図 19 大原廃寺出土の瓦塔

### 金田堂ノ脇遺跡（西伯郡南部町金田）

瓦塔と思われる破片は1点のみであり、瓦塔であるのかどうかは疑わしい。考察するには不十分なため、今回は紹介にとどめておく。この破片が瓦塔であるならば、おそらく屋蓋部の中心付近であろう。平面方形の屋蓋部で、棒状粘土を貼り付けて丸瓦を表現している。裏面に垂木の表現はなく、無方向に刷毛目調整が施されている。江見廃寺（岡山県美作市）出土瓦塔の屋蓋部に類似している。

瓦塔片は段状遺構から、青磁、須恵質土器、高台をもつ陶磁器と共伴している。これらの遺物は二次的な流入によるもので、遺構自体に伴うものではない。金田堂ノ脇遺跡からは弥生時代の土師器甕なども出土しているが、検出された遺構は近世以降と考えられるものが多い。瓦塔が出土した段状遺構も、下限は江戸時代まで下るとされている。

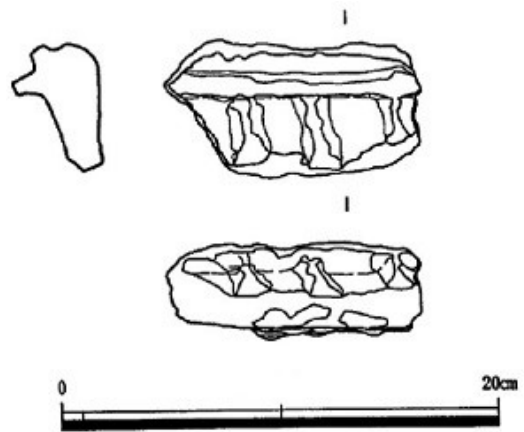


図 20 金田堂ノ脇遺跡の瓦塔

### 朝金天田遺跡（西伯郡南部町朝金）

屋蓋部の瓦塔片が1点出土している。出土したのは土器包含層からで、調査区外からの流入と考えられる。遺構状況から瓦塔が安置されていた時期は特定できないが、瓦塔の形態から8世紀代のものと思われる。

出土したのは屋蓋部の隅軒先部分で、棒状粘土を貼り付けて隅棟と丸瓦を表現している。貼り付けられた棒状粘土はしっかりとなでつけられており、隅棟は断面台形、丸瓦は断面三角形である。裏面にも棒状粘土を貼り付けて、隅木と垂木を表現している。隅木は中心部から軒先に向かって棒状粘土が貼り付けられているが、垂木が表現されているのは軒先から約3cmのあたりまでである。

瓦塔で垂木を表現する場合、多くは屋蓋の裏面をヘラで削り取り、浮き出た部分を垂木とすることが多いが、朝金天田遺跡例のように、棒状粘土を貼り付けて垂木を表現する場合もある。姥田窯跡（埼玉県日高市）出土瓦塔も同様の手法で垂木を表現している。



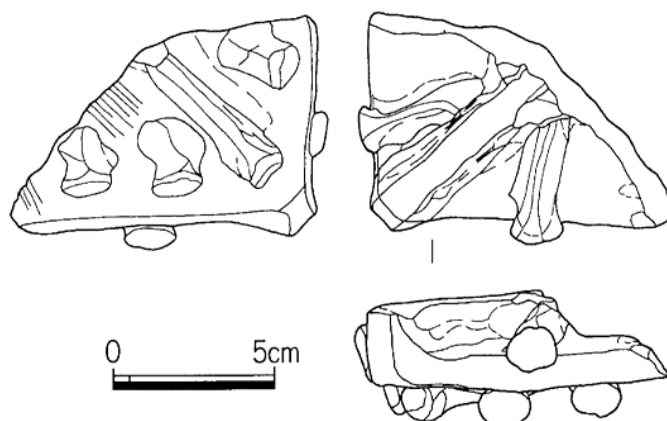


図 21 朝金天田遺跡出土の瓦塔

## 島根県

### オノ神遺跡（安来市黒井田町）

瓦塔は、越峠池のほとりにある窪地（調査Ⅱ区）に散乱する形で出土している。Ⅱ区からは、8世紀中葉以降と思われる掘立柱建物跡1棟、時期不明の掘立柱建物跡1棟、加工段1、1列をなす焼土土坑3基、ボウル状の土坑1基が検出されており、古墳時代から奈良・平安時代にかけての土器や瓦塔片が出土している。瓦塔片はⅡ区内に散乱していたが、一部はボウル状の土坑に埋納される形で出土した。このボウル状の土坑の時期は特定できないが、同一個体と考えられる瓦塔片が8世紀末～9世紀前半の須恵器と相伴しており、瓦塔も同一時期のものと考えられる。出土した瓦塔はすべて屋蓋部であるが、2種類確認されている。

#### 瓦塔 1

胎土は良質であるが、焼成はあまく、軟質で色調は乳白色である。円形の屋蓋で、上部の円筒部分の復元径は外周が約 14.0 cm、内法が約 12.4 cm となる。内面はナデ調整で、外面には直径 1.3 cm 前後の竹管文が全面に施されている。上部には突出約 1.2 cm の 2 条の突帯がめぐり、その突帯の間に挟まれた一段の竹管文には右下がりの斜線が引かれている。2 条の突帯の下側からは、軒先に向かって放射状に棒状の粘土が貼り付けられており、おそらく丸瓦を表現したものであろう。軒上にも幅 1.0 cm の突帯がめぐり、軒先外周の復元径は約 42.0 cm となる。

#### 瓦塔 2

胎土は良質で、焼成も堅固、色調は乳灰色である。円形の屋蓋か、あるいは各辺が丸みを帯びた多角形の屋蓋と考えられる。内面はヘラでナデ調整されている。上部に 2 条の突帯をめぐらせているが、突帯間の幅は狭く、瓦塔 1 のような竹管文は施されていない。突帯の下側から軒先に向かって、放射状に工具で削り取ったような溝がある。軒先には垂木表現があり、垂木を含めた軒先の推定復元径は約 52.0 cm である。

瓦塔が出土したⅡ区からは、他にも鉄鉢形土器、須恵器浄瓶といった仏教的な要素をもつ遺物が出土しており、この地に何らかの仏教的施設が存在していた可能性がある。島根県では、瓦塔が出土することはほとんどなく、円形の屋蓋をもつものは県内ではオノ神遺跡例のみである。このように円形の屋蓋で、尚且つ竹管文を施したものは全国的にも他に類を見ない。

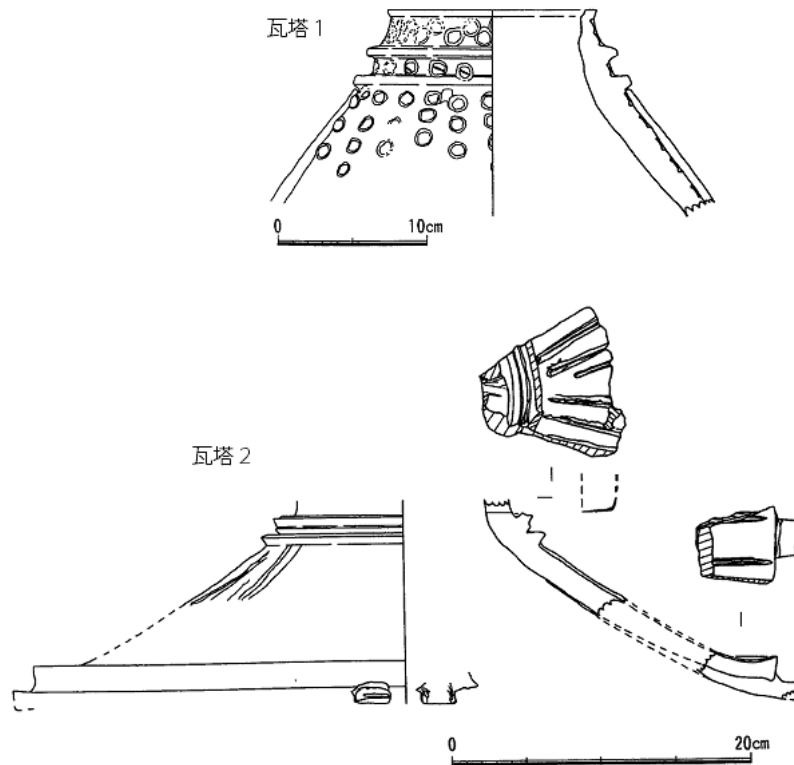


図 22 オノ神遺跡出土の瓦塔

### 第3節 山陽地方

#### 岡山県

##### 須恵廃寺（瀬戸内市長船町西須恵）

備前国邑久郡、桂山と高山の間の谷状平野の南に位置する古代寺院跡で、その創建は飛鳥時代末期ないし白鳳時代初頭、奈良時代中頃に完成、あるいは大幅な改修が行われ、以降中世まで存続する。一町四方の寺域が想定されているが、現在寺域内は水田となっている。瓦塔片は、推定寺域の南側で採集された。採集品であるため瓦塔の時期は不明である。推定寺域の東側から東方の谷にかけて、6・7世紀代の須恵器窯跡が存在している。

瓦については宇垣匡雅氏が分析しており、飛鳥時代末期ないし白鳳時代初頭の素弁八弁蓮華文軒丸瓦、川原寺式の複弁蓮華文軒丸瓦、奈良時代中頃に位置付けられる平城宮 6663 型式軒平瓦に類似する瓦、奈良時代末期ないし平安時代初頭頃と思われる軒丸瓦等が出土している（宇垣 1985）。

瓦塔は3点採集されており、うち2点は屋蓋部、1点は軸部かと思われる。

#### 屋蓋部

胎土・色調から、2点は同一個体の可能性が高いとされている。棒状粘土を貼り付けて丸瓦を表現しており、その上部に半截竹管で押圧文を施して瓦一枚一枚を表現している。2点のうち1点は隅棟部であり、その平面は屈曲している。宇垣氏は、この瓦塔の屋蓋部の平面は方形ではなく、八角形を想定している。須恵廃寺例と類似したものが賞田廃寺（岡山市賞田）でも確認されている。

#### 軸部

小片のため詳細は不明である。突帯を貼り付けており、外面は横方向にユビナデ、内面は横方向にハケ調整されている。

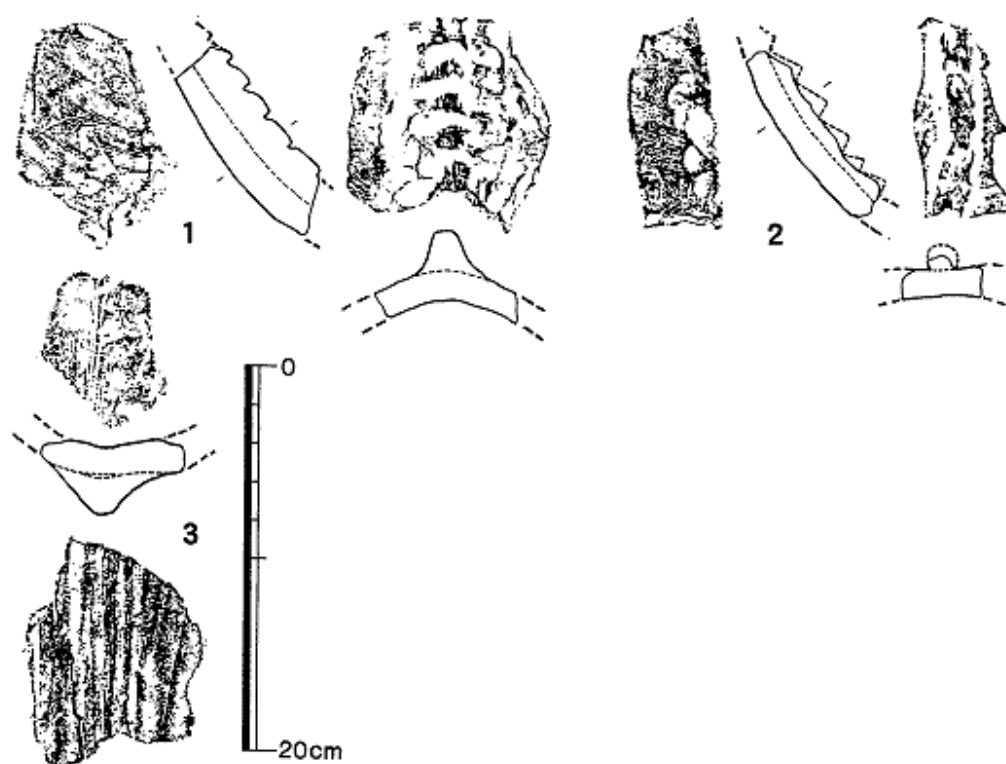


図 23 須恵廃寺出土の瓦塔

#### 吉井廃寺（岡山市東区吉井）

発掘調査はなされておらず、建物跡等は不明である。瓦塔片が1点と瓦片が採集されている。共伴した瓦は8世紀前半頃のものである。

瓦塔片は須恵質で、残存部から屋蓋部の平面は多角形ないし円形と推定できる。裏面はロクロナデ調整されており、一部に剥離痕があることから、棒状粘土を貼り付けて垂木を表現していた可能性がある。丸瓦は棒状粘土を貼り付けて、その上に半截竹管の押圧文で瓦を一枚一枚表現している。丸瓦と丸瓦の間の平坦面を平瓦とし、ヘラによる沈線で瓦一枚一枚を表現しているが雑然としてい

る。この屋蓋部の様相を保ったまま中央部で立ち上げており、軸部と一体化しているように思われるが定かではない。軒丸・軒平ともに、軒先に四葉の花弁のスタンプが押されている。

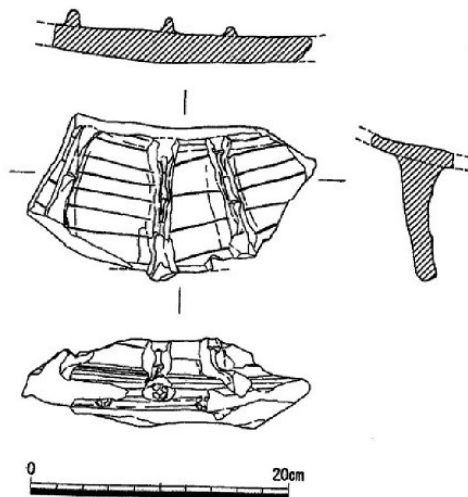


図 24 吉井廃寺出土の瓦塔

#### 賞田廃寺（岡山市中区賞田）

備前国上道郡、岡山平野のほぼ中心部に位置する、7 世紀中葉創建の古代寺院跡である。吉備の有力豪族であった上道氏の氏寺と考えられている。1970 年度に発掘調査が行われ、その後史跡整備のために 2001 年度以降数年に渡って発掘調査がなされている。東塔と西塔の基壇が、地方寺院ではめずらしい壇上積基壇であったことが確認されている。また、奈良三彩や備前国域で唯一の飛鳥様式の瓦が出土している。出土した瓦塔片は、小片も含め総数 26 点に及ぶ。

#### 屋蓋部

多様な表現の屋蓋部が出土しているため、Ⅰ～Ⅳ類に分類する。

##### Ⅰ類（屋蓋部 1）

棒状粘土を貼り付けて丸瓦を表現しており、半截竹管状の工具で 2.8 cm～3.5 cm ごとに沈線で節をつけている。裏面に垂木の表現はなく、同心円あて具痕が残っている。

##### Ⅱ類（屋蓋部 2）

Ⅰ類と似た作りではあるが、丸瓦の規模はⅠ類よりも若干小さく、半截竹管状の工具を用いて約 2.5 cm ごとに節をつけている。丸瓦の両横には、半月形のスタンプが中心から軒先にかけて押してあり、平瓦を表現したものと思われる。Ⅰ類同様、裏面に垂木表現はなく、同心円あて具痕が残る。

##### Ⅲ類（屋蓋部 3・4）

屋蓋部 3 は棒状粘土を貼り付けて丸瓦を表現し、何らかの工具で丸瓦の上部を削り取って瓦一枚一枚を表現している。残存する丸瓦と剥離痕から、丸瓦が放射状に配置されていたと思われる。

屋蓋部 4 は軒先部分であるが、丸瓦はすべて剥落している。剥離痕から丸瓦は放射状に配置されており、軒丸瓦も表現されていたようだ。軒先がゆるやかな弧を呈しており、屋蓋部の平面が円形であった可能性がある。

#### Ⅳ類（屋蓋部 5～7）

屋蓋部 5 は、屋蓋部から軸部へかけての部分である。屋蓋部の表面に直径 1.8 cm の蓮華文スタンプと、直径 1.7 cm の半月形スタンプを一つずつ押している。

屋蓋部 6 と屋蓋部 7 は、屋蓋部 5 と類似している。いずれも屋蓋部から軸部にかけての部分で、このことから屋蓋部と軸部を一体にして成形していたと考えられる。屋蓋部 7 は、丸瓦あるいは隅棟と思しき棒状粘土帯の右側に半月形スタンプ、蓮華文スタンプが押されている。残存している軸部が弧状のため、この屋蓋部に組み合う軸部は円筒形であったと考えられる。

#### Ⅴ類（屋蓋部 8）

屋蓋部 8 は軒先部分で、屋蓋部 1～8 とは色調が異なり土師質である。軒丸瓦の瓦当面に直径 2.2 cm の五葉の蓮華文スタンプが押されている。

### 軸部

軸部 1 は、ヘラによる沈線で柱を表現している。初層軸部 1 と胎土・焼成・厚みが似ているため、2 つは同一個体の可能性がある。他にも同一個体かと思われる破片が数点出土している。

軸部 2、軸部 3 は方柱状の突帯を貼り付けて柱を表現している。裏面には同心円あて具痕が残っている。

#### 初層軸部

初層軸部 1 はヘラによる沈線と、壁面よりも 1 mm 程度の厚みをもたせることで柱・地覆を表現している。底部は安定感をもたせるためか、やや裾広がりになっている。

初層軸部 2 は、方柱状の突帯を貼り付けて柱・地覆を表現している。柱と地覆の交点には、屋蓋部表面にも使用されていた蓮華文スタンプが押されている。底部が弧を描いており、円筒形の軸部が想定できる。

### 水煙

破片のため全形は不明であるが、薄板に波状の透かしを施している。一辺のみ厚手で直線を呈す。柱状の連結部が見受けられ、おそらく水煙の部分と考えられる。

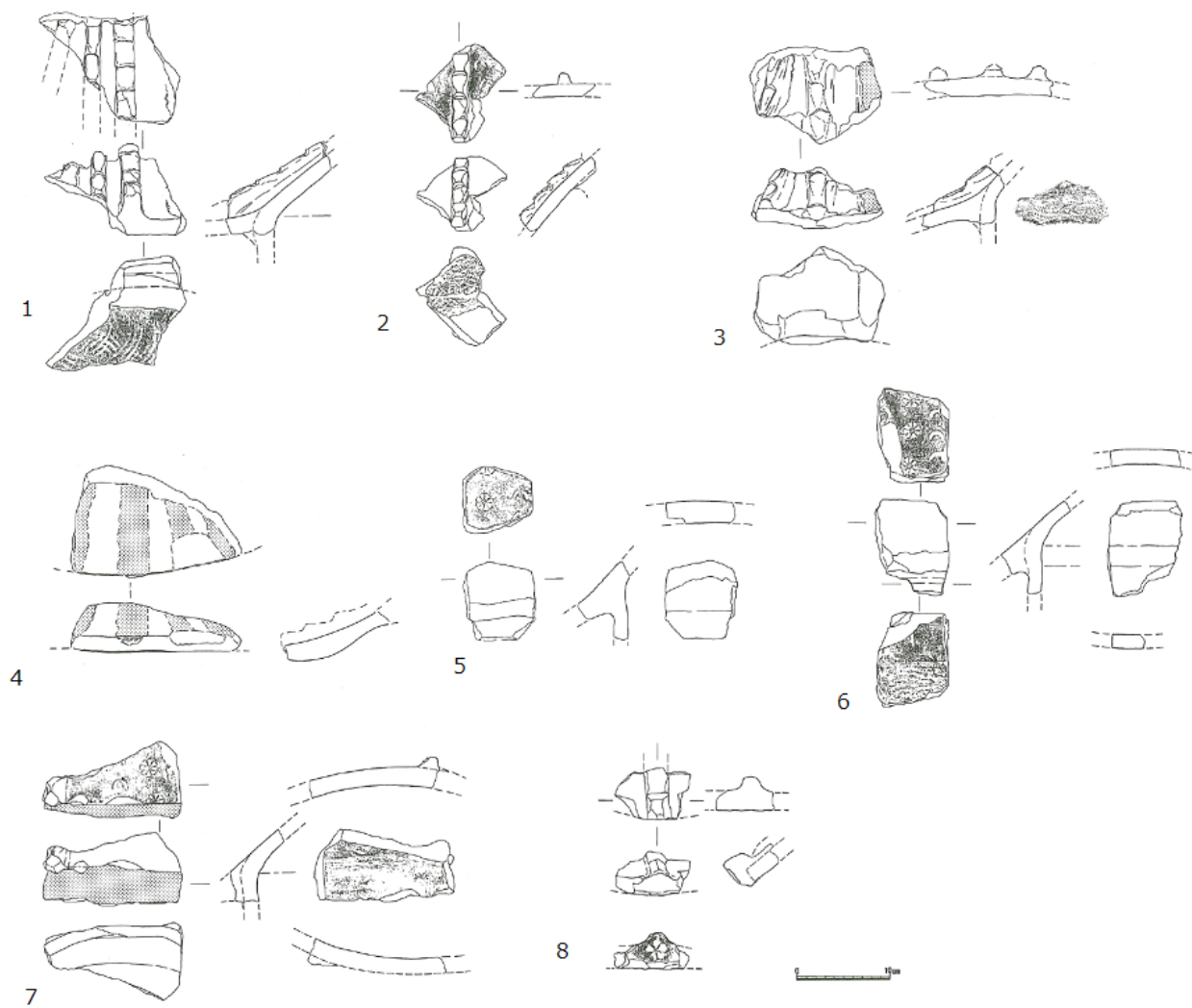


図 25 賞田廃寺出土の瓦塔の屋蓋部

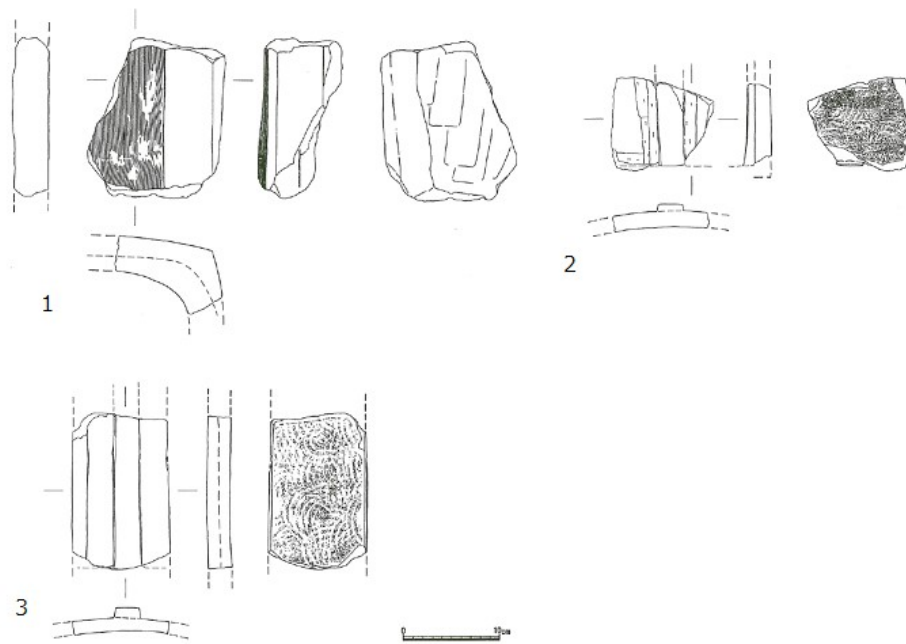


図 26 賞田廃寺出土の瓦塔の軸部

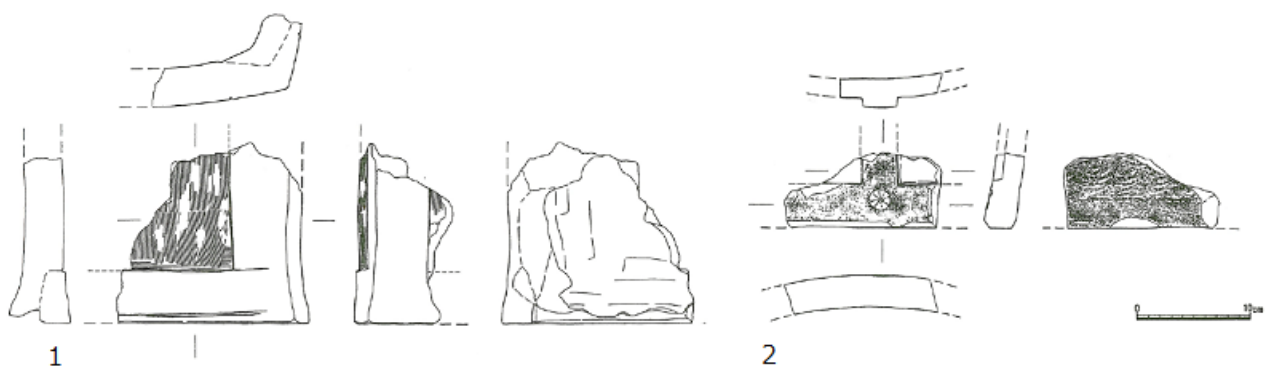


図 27 賞田廃寺出土の瓦塔の初層軸部

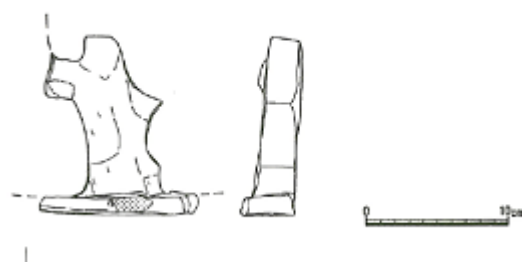


図 28 賞田廃寺出土の瓦塔の水煙

### ハガ遺跡（岡山市中区国府市場）

賞田廃寺から南東に約 1 km、推定古代山陽道のすぐ南側に位置する。ハガ遺跡は推定備前国府推定地の範囲に含まれており、備前国府に関係する官衙施設であると考えられている。古代の遺構面は 2 つ検出されており、瓦塔が出土した遺構の時期は 8 世紀～12 世紀である<sup>(3)</sup>。正方位の区画と建物跡が検出されており、三彩陶器、青磁、羊形硯といった極めて稀な遺物も出土している。瓦塔や泥塔、灯明痕のある土器も多く出土したことから、仏教的性格を有していたことがうかがえる。瓦塔は草原孝典氏によって、その焼成・色調・形態から 3 つに分類されている。

#### I 類（1～7）

1～3 は屋蓋部、4 は軸部、5～7 は水煙部である。硬質で、色調は灰褐色である。屋蓋部の軒先が弧を呈するので、屋蓋部の平面形は円形となる。丸瓦は棒状粘土を貼り付けて表現し、その断面は半円形である。丸瓦の上部に刻み目をつけて瓦一枚一枚を表現している。軸部上部には組物の表現が残っており、へら状工具で凸形に切り抜いて斗拱部を表現している。組物の下には頭貫、その下には連子窓状の透かしがあり、透かしの間隔は 2.7 cm～3.0 cm である。軸部の断面も弧を呈しており、おそらく円筒形となる。屋蓋部や軸部を見る限り、II 類に比べると写實的に表現されている部分が多い。

#### II 類（8～12）

8 は屋蓋部、9～12 は軸部である。やや軟質で、色調は灰白色である。屋蓋部の平面形は多角形となる。丸瓦は棒状粘土を貼り付けて表現し、その断面は方形である。II 類は、屋蓋部と軸部を一体にして成形しており、類似例として千本屋廃寺例（兵庫県宍粟市）、賞田廃寺例（岡山県岡山市）が挙げられる。I 類と同様に軸部に透かしがあるが、その間隔は残存部からは明らかにできない。

#### III 類（13～15）

瓦質で、軸部と思われる破片が数点出土している。軸部の壁面には、蓮華を模したと思われる線刻がある。器物に蓮華文を線刻したものは、岡山県内では平安時代中期頃からみられるもので、III 類は I 類、II 類よりも後出と考えられる。瓦塔の軸部壁面に花卉の線刻を施したものは、関戸廃寺（岡山県笹岡市）からも出土している。現時点では、III 類は出土数が少なく、その全貌が明らかで



ないため、瓦塔であるのか判断が困難である。草原孝典氏は、Ⅲ類の遺物が熊山遺跡（岡山県熊山町）の石積遺構から出土した筒形容器の一部に似ていると指摘している（岡山市教育委員会 2004）。

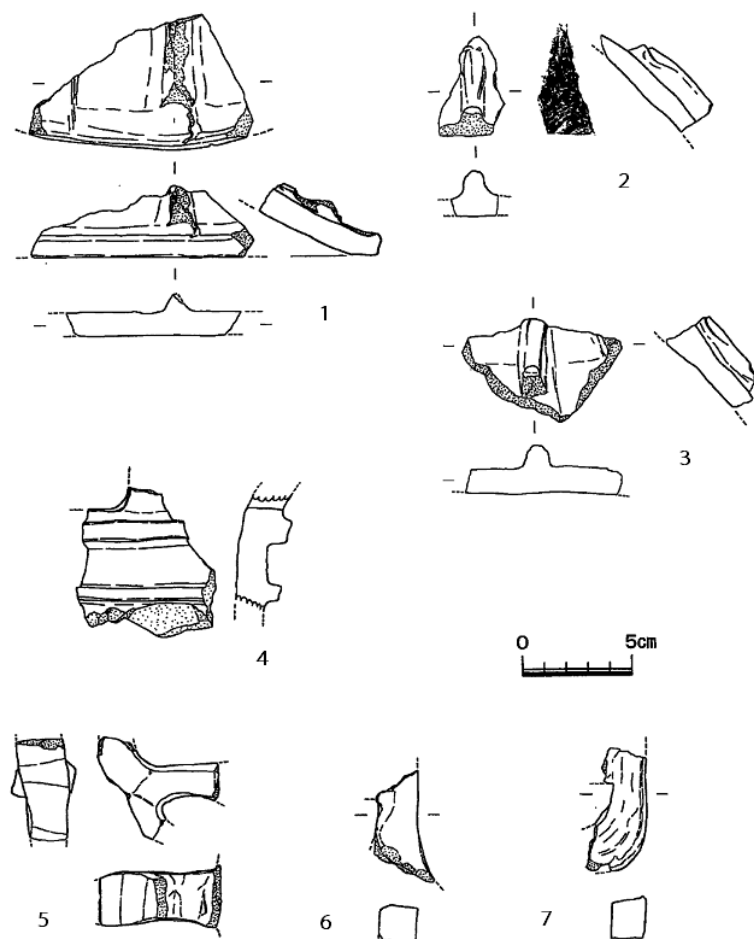


図 29 ハガ遺跡出土の瓦塔Ⅰ類

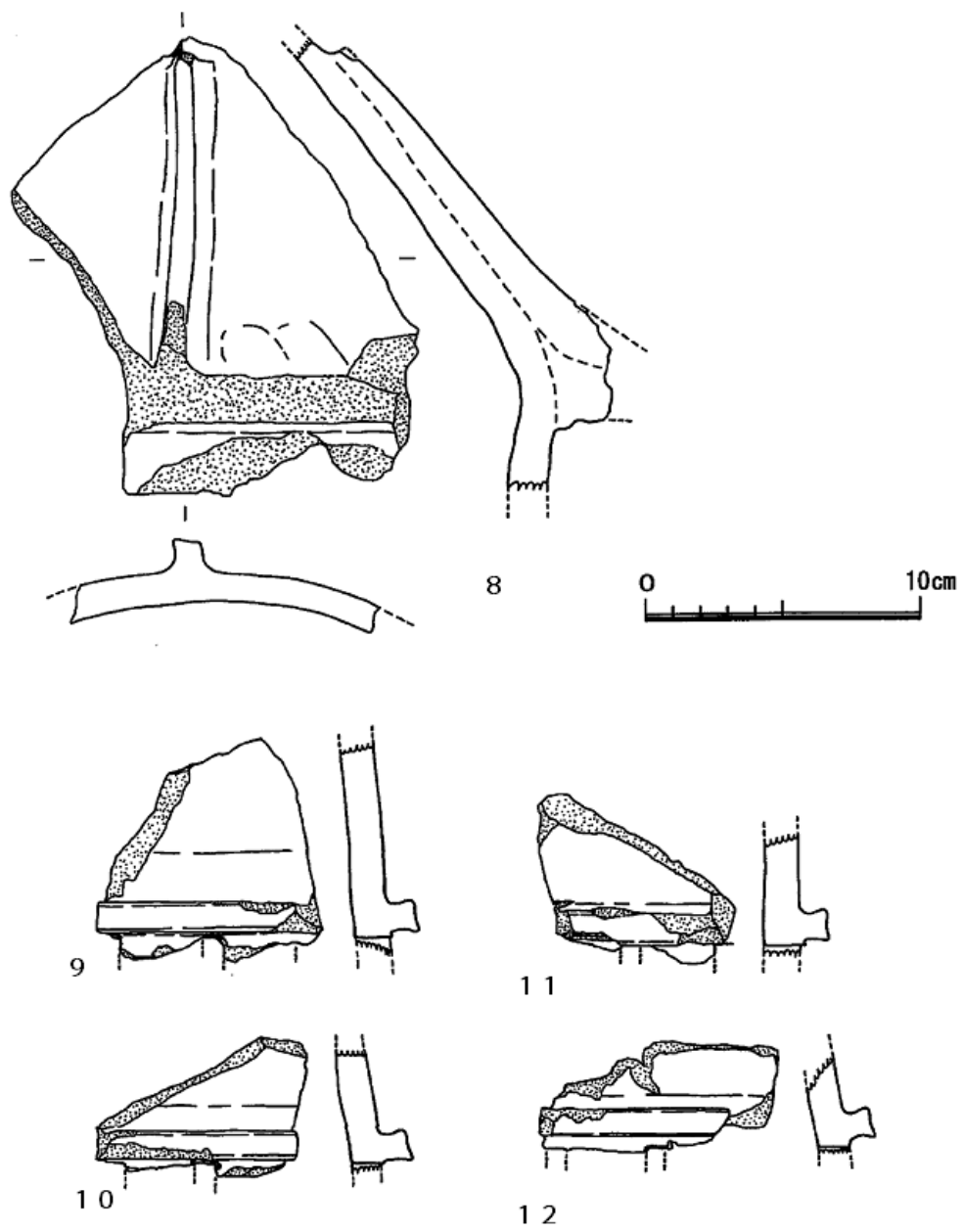


図 30 ハガ遺跡出土の瓦塔Ⅱ類

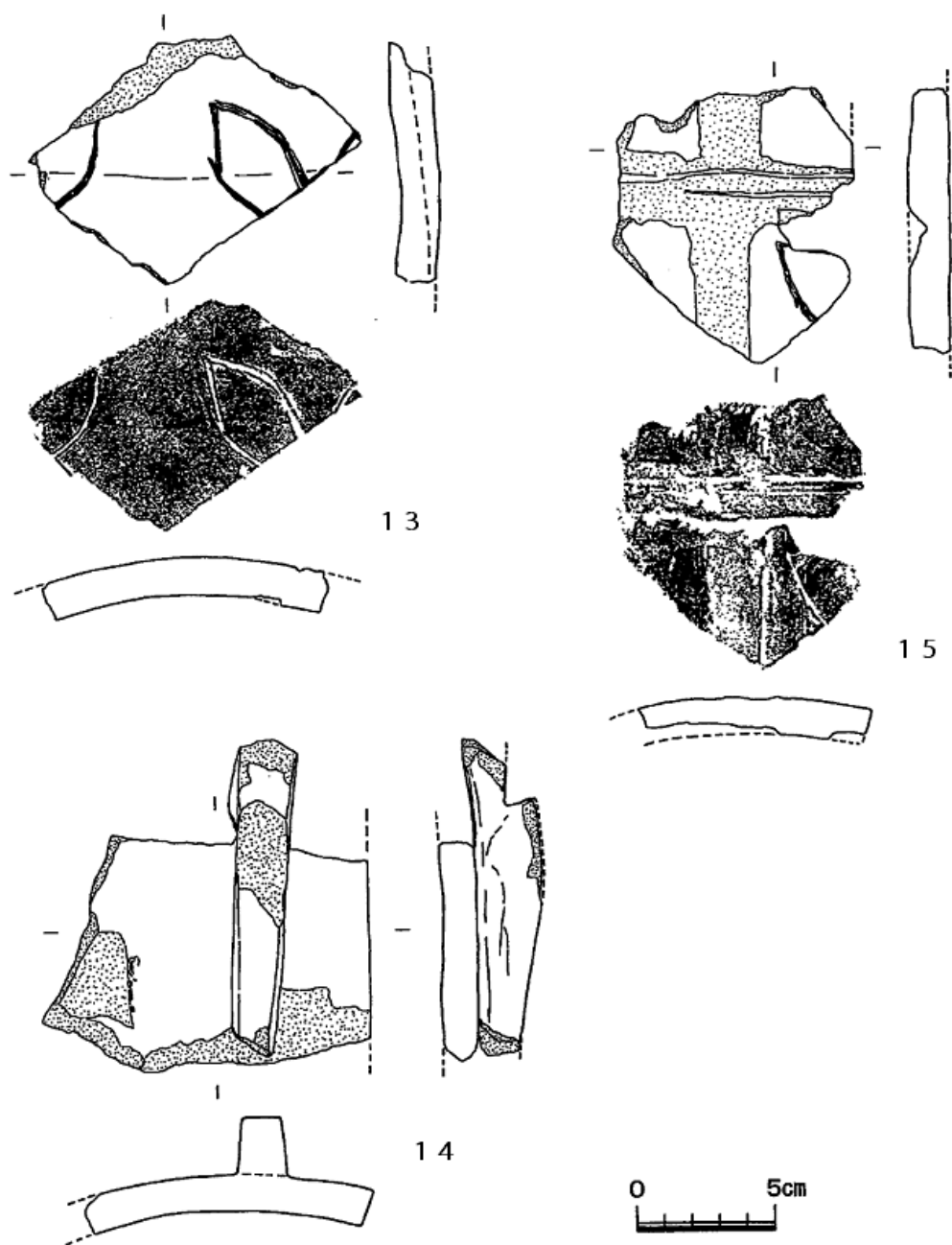


図 31 ハガ遺跡出土の瓦塔Ⅲ類

#### 神力寺廃寺（岡山市北区一宮）

備前一宮である吉備津神社の南に位置し、その創建は7世紀末頃である。7世紀末頃の軒丸瓦と瓦塔片が採集されている。また、この他に二彩を施した六角層塔と思われる破片も採集されている。発掘調査はなされていないため、その他の遺物・遺構に関しては不明である。

瓦塔片は屋蓋部の瓦当面で、ヘラで六葉蓮華文を描いている。二彩を施したものは、屋蓋部の破片で平面六角形のものと思われるが、この二彩六角層塔の詳細は不明である。小型層塔には違いがないが、厨子的な性格を有した瓦塔とはまた別種のものである。正倉院の奈良三彩磁塔と類似しているといわれている。正倉院の奈良三彩磁塔は、銅製の心柱を通した七重塔<sup>(4)</sup>で、総高 17.2 cm である。



図 32 神力寺廃寺出土の瓦塔

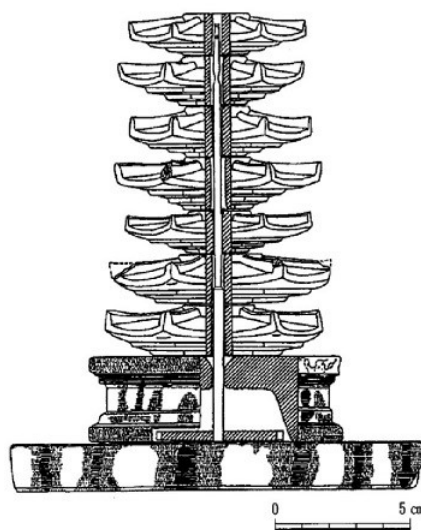


図 33 正倉院の奈良三彩磁塔

#### 釈塔遺跡（倉敷市福田町広江）

備前国児島郡の西端部、天<sup>わけのいわとわけほふら</sup>石門別保布羅神社の境内に位置する。通称「釈塔様」と呼ばれる古代の石造層塔があり、その層塔の解体修理のさいに基壇中から瓦塔片が4点出土した。その他にも、多量の寛永通宝や中国銭、明治・大正期の硬貨、備前焼灯明皿等が検出されており、この時期に信仰が盛んであったことがうかがえる。瓦塔の時期は不明だが、石造層塔と同時期にお堂か、あるいはその付近に安置されていたと考えられているようである。

出土した4点の瓦塔片は同一個体と考えられる。須恵質～瓦質で、色調は暗灰色～淡灰色、部分

的に淡赤褐色である。いずれも屋蓋部の軒先の部分で、軒先の瓦当面を表現したと思われる重圏文が型押しされている。厚さはそれぞれで若干異なるがおよそ 7.0 cm～7.9 cm、3 のみが上下二段の構造のため、その厚さは約 9.0 cm となる。

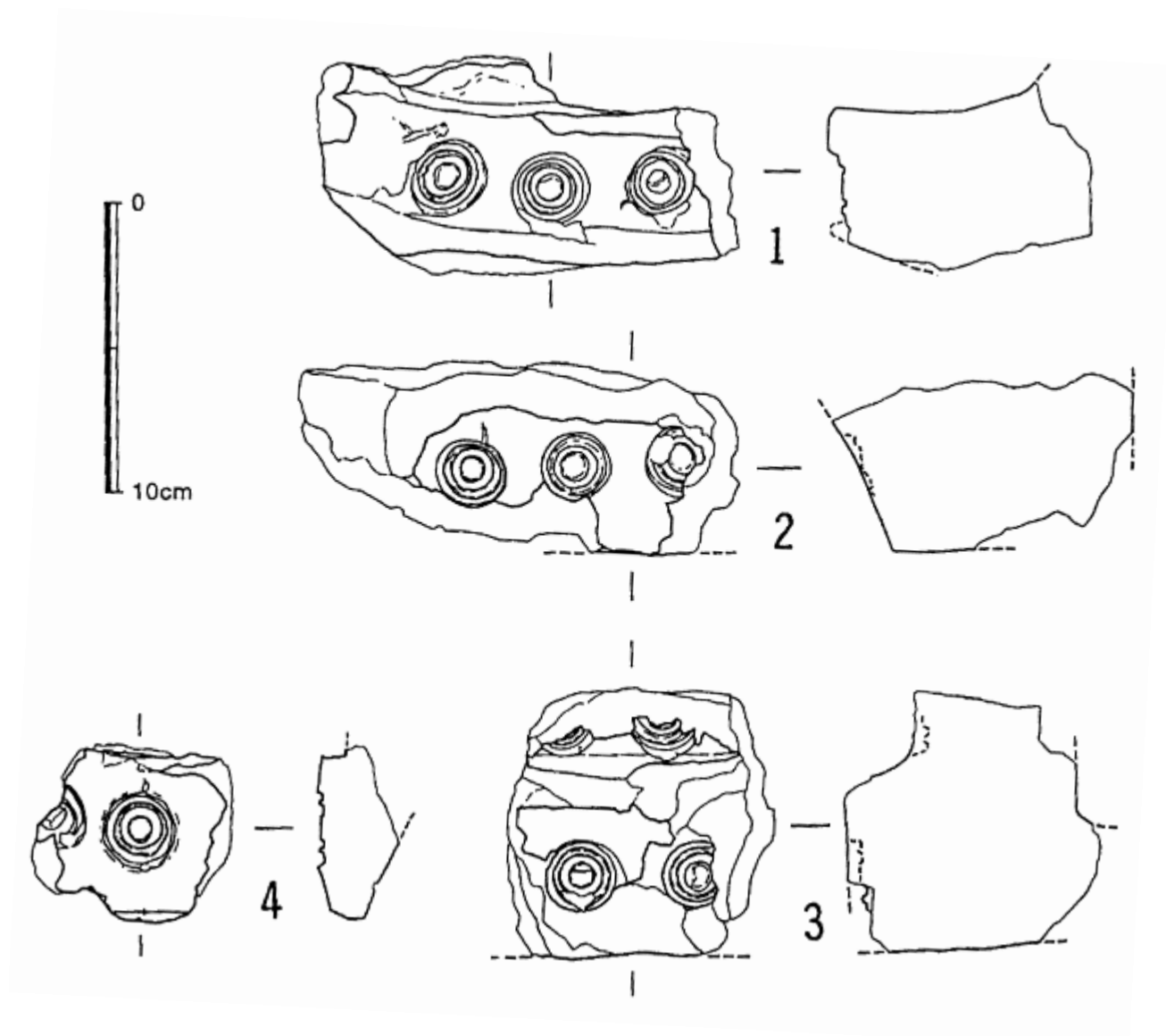


図 34 釈塔遺跡出土の瓦塔

#### 今岡廃寺（美作市今岡）

1998 年、1999 年の発掘調査がされるまでは、長大寺廃寺と呼ばれていた。作国英多郡のやや北寄りに位置し、創建時期は 7 世紀後半である。この地域は、7 世紀後半になると今岡廃寺を含め、次々と寺院が建立されるようになる。1 郡に 6 寺という寺院数の多さは、この地が中央政権と強い

結びつきにあったことを示している。

瓦塔は、推定西門付近の溝から 1 点出土しており、8 世紀～11 世紀前半の遺物と共伴している。出土したのは平面方形の瓦塔屋蓋部の隅の部分で、須恵質である。棒状粘土を貼り付けて隅棟を表現しており、丸瓦・平瓦ともに瓦一枚一枚の表現はない。裏面も同じく棒状粘土を貼り付けてあり、隅垂木が表現されている。厚さは比較的薄く、6～7 mm である。

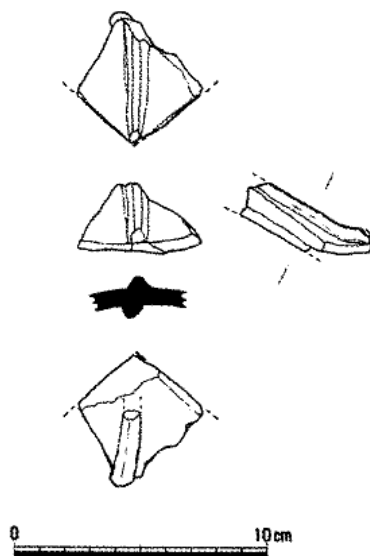


図 35 今岡廃寺出土の瓦塔

### 江見廃寺（美作市江見）

美作国英多郡のほぼ中央に位置し、創建時期は 7 世紀後半である。県道拡張工事に伴う発掘調査で瓦塔片が 3 点出土した。発掘調査は小面積で実施されたため、建物跡等は検出されていない。出土した瓦塔片は、屋蓋部が 2 点、初層軸部が 1 点である。

#### 屋蓋部

1・2 は、いずれも棒状粘土を貼り付けて丸瓦を表現している。丸瓦・平瓦ともに瓦一枚一枚の表現はない。1 の丸瓦の先端に径約 5.0 mm の穴が穿たれているが、貫通はしない。1 の裏面には剥離痕があり、棒状粘土を貼り付けて垂木を表現していたと思われる。

#### 初層軸部

高さ 27.6 cm、厚さ 2.3～2.8 cm で、重くがっしりとした作りである。宇志北大里遺跡例（静岡県北区）や宅部山<sup>やけべやま</sup>遺跡例（東京都東村山市）に代表されるような一般的な瓦塔に比べ、大ぶりで堅牢な印象を受けた。底部は約 135° の角度を有しており、八角形になると推測される。縦方向の突帯で柱を表現し、横方向にも 2 条の突帯<sup>こうぎ ま</sup>を巡らす。最下段の 2 面の壁には格狭間が表現され、その中

中央には蓮華文がへう描きされている。下から2段目の2面の壁には、格狭間はなく、蓮華文のみへう描きされている。部分的に赤色顔料の痕跡が残っている。裏面にも、表面の柱に対応する位置に突帯を付している。

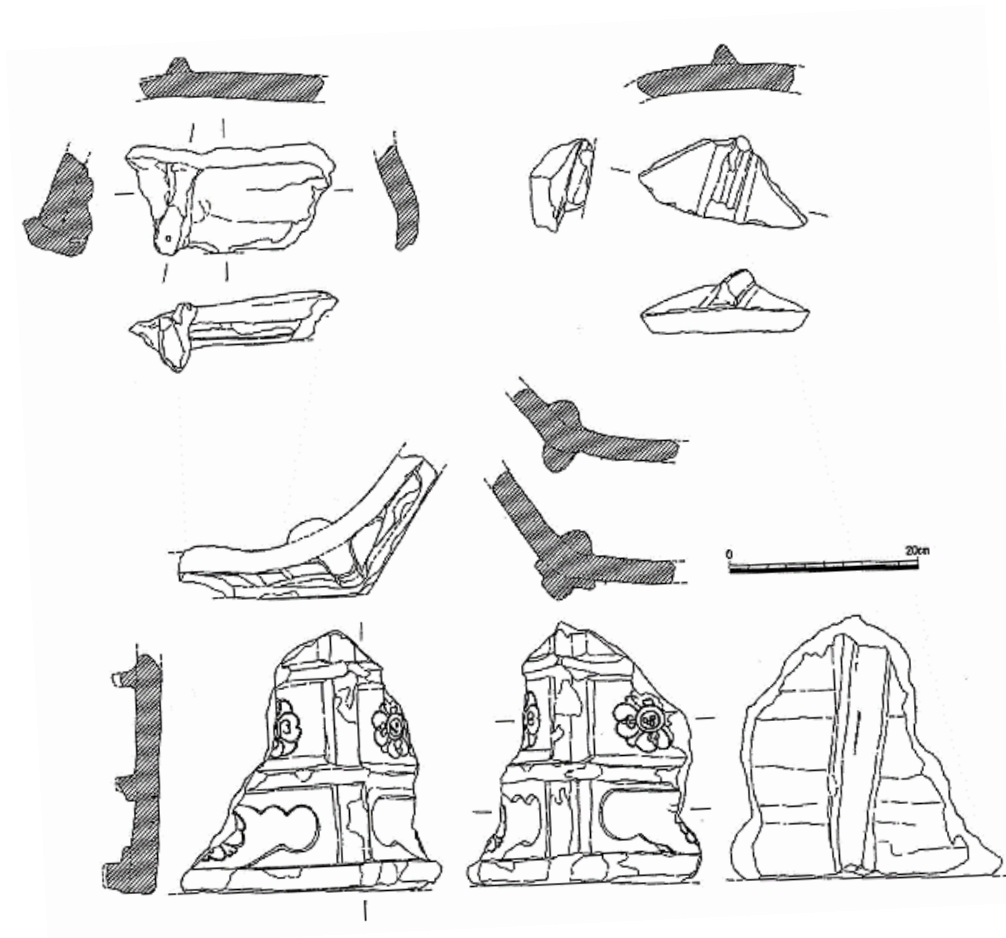


図 36 江見廃寺出土の瓦塔

### 大田茶屋遺跡（津山市大田）

美作国苫田郡の中南部に位置する。古代の遺構面からは、掘立柱建物跡が 17 棟検出されており、大田茶屋遺跡を中心に官衙施設が設置されていたとされている。美作国府・国分寺と同範の軒瓦が出土しており、国府に関係する官衙施設の一つと考えられている。また、掘立柱建物跡群の付近からは、瓦塔や灯明痕のある坏、瓦鉢が出土しており、官衙施設の一画に仏教的施設を設けていたか、あるいは小規模な寺院が建立されていたとされている。

瓦塔片は古代の遺構面から 2 点出土しており、8 世紀半ば～9 世紀前半のものとされている。1 点は屋蓋部で、もう 1 点は初層軸部である。胎土や焼成から、2 点は同一個体と考えられる。

#### 屋蓋部

おそらく隅の軒先の部分で、屋蓋部の厚さは約 1.8 cm である。棒状粘土を貼り付けて隅棟を表現しており、丸瓦・平瓦ともに瓦一枚一枚の表現はない。裏面に垂木の表現はなく、ヨコナデ調整されている。隅の角度が約  $150^{\circ}$  であり、屋蓋部の平面形が十二角形になると考えられるが、平面円形の屋蓋部と見ることもできる。

#### 初層軸部

出土したのは、初層軸部の底部付近である。壁面の厚さは約 2.2 cm で、円筒形の軸部である。残存部から、初層軸部の復元径は直径 37.0 cm 程度となる。ヘラで窓状に切り抜いた透かしがある。

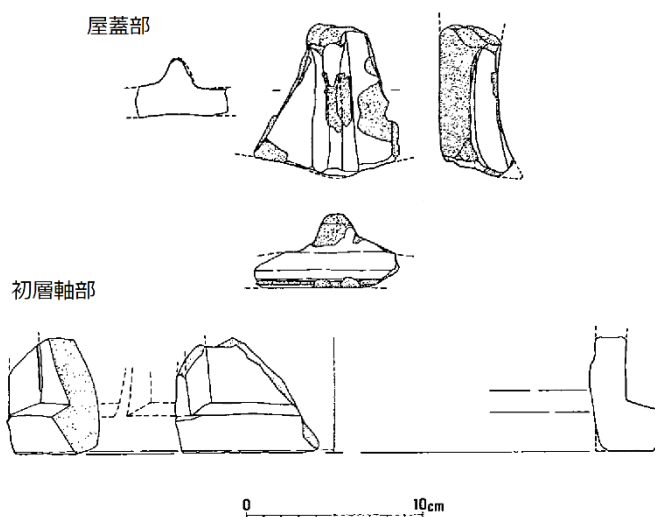


図 37 大田茶屋遺跡出土の瓦塔

#### 備中国分寺跡（総社市上林）

備中国窪屋郡に位置する。現在この地にある日照山国分寺は、江戸時代に再建されたものである。1971 年の発掘調査により、南門跡、中門跡、建物跡、築地堀跡等が検出されている。瓦塔はこの建物跡の付近から 5 点出土しており、屋蓋部が 4 点、軸部が 1 点である。

#### 屋蓋部 1

軒先の部分で、須恵質である。厚さは約 2.0 cm で、色調は灰白色である。棒状粘土を貼り付けて丸瓦を表現しており、丸瓦・平瓦ともに瓦一枚一枚の表現はない。丸瓦の断面は円形である。軒先の瓦当面には、四葉の蓮華文のスタンプが押されている。裏面に垂木の表現はなく、屋蓋部の中央に近いところはヘラケズリ調整されている。



## 屋蓋部 2

厚さは約 1.5 cm で、色調は灰白色である。棒状粘土を貼り付けて丸瓦を表現しており、丸瓦・平瓦ともに瓦一枚一枚の表現はない。丸瓦の断面は円形である。残存している丸瓦の横には、丸瓦が剥落した剥離痕が残っている。この 2 条の丸瓦から、丸瓦が放射状に配置されていたと推測される。屋蓋部の平面が多角形、あるいは円形となるか、北部九州で多くみられる型式で、方形屋蓋で放射状に丸瓦を配置したものと思われる。裏面に垂木の表現はなく、同心円あて具痕が残る。

## 屋蓋部 3

屋蓋部の厚さや丸瓦の形状は屋蓋部 2 と似ているが、色調は濃灰色である。

## 屋蓋部 4

須恵質で、厚さは約 1.0 cm である。棒状粘土を貼り付けて丸瓦を表現し、段を付けて瓦を一枚ずつ表現している。丸瓦の断面は方形である。平瓦一枚一枚の表現はない。わずかに軒先の部分が残っており、屋蓋部は円形になると思われる<sup>(5)</sup>。

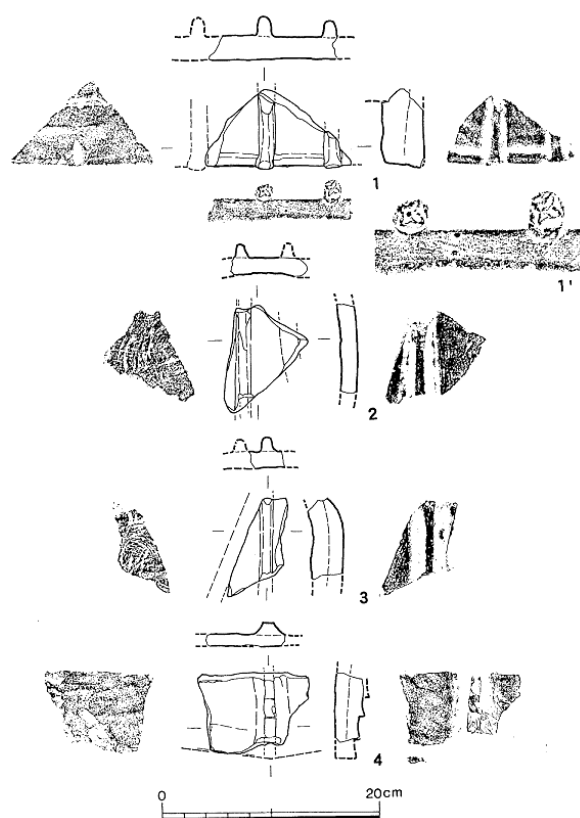


図 38 備中国分寺跡出土の瓦塔

### 鬼ノ城（総社市奥坂）

備中国賀夜郡、鬼城山の山頂付近に位置する、7世紀後半築城の古代山城跡である。1978年の調査では、城壁の全長が約2.8km、城内面積約30haの規模をもっていたことが明らかになった。1986年には、古代城郭研究に欠かせない遺跡として国史跡に指定された。鬼城山は吉備高原の南端に位置する標高396.3mの山岳で、その眼下には総社平野が広がる。瓦塔の屋蓋部が出土しており、その様相から瓦塔A、瓦塔Bの2種類に分けられるため、最低でも2個体存在していたと思われる。

#### 瓦塔A

須恵質で焼成は良好、色調は暗灰色である。半截竹管状の工具で段を付けて、丸瓦・平瓦ともに瓦一枚一枚を表現している。裏面に垂木表現はない。破片から推測するに、屋蓋部の平面形は方形と考えられる。

#### 瓦塔B

胎土は良質で、焼成はやや不良である。最大厚が6.9cmで、一般的な瓦塔に比べて厚い。瓦塔A同様、段を設けて丸瓦・平瓦を一枚一枚表現している。隅は欠損しているが、残存部の形態から平面方形の屋蓋部が想定されている。中央部には一辺約6.0cmの方形の孔が開いており、方柱を通していたと思われる。屋蓋部の規模に対して、瓦葺きを表現した部分が狭く、瓦葺き表現部位から中央の孔までの間はハケ調整されている。中央の孔の周囲には長方形の貫通しない穴が開いており、上階の軸部を受けるためのものと思われる。裏面に垂木の表現はない。

鬼ノ城の瓦塔は、出土した遺構年代が明らかでないため、鬼ノ城存続時期に城内に置かれたものであったのか、廃城後の寺院に伴うものであったのかは不明である<sup>6)</sup>。



図 39 鬼ノ城出土の瓦塔

### 関戸廃寺（笠岡市関戸）

備中国小田郡に位置する、7世紀後半創建の寺院である。発掘調査により、金堂と塔の位置が判明し、その他にも瓦葺建物跡や掘立柱建物跡、土師器を焼成したと思われる窯跡が検出されている。瓦塔片は30点以上出土している。瓦塔の共伴遺物の年代は、7世紀後半～11世紀前半である。

#### 屋蓋部（1～8）

1は焼成良好、灰白色である。棒状粘土を貼り付けて丸瓦を表現し、段を設けて瓦一枚一枚を表

現している。平瓦の部分には特徴的な線刻が施されている。丸瓦間は約 30° の角度をもっており、丸瓦が放射状に配置されていたと考えられる。平面方形の屋蓋部で丸瓦を放射状に配置していたか、あるいは平面形が多角形、円形の屋蓋部であったと思われる。

2 は瓦質に近い。軒先が約 120° の角度をもって上方に反り上がり、その屈曲部に小孔が穿たれている。風鐸を吊るすための孔か、排水のための孔と思われる。その小孔に向けて線刻が施されている。

3 は焼成・形態ともに 2 に類似している。棒状粘土を貼り付けて隅棟を表現し、軒先には 2 つの竹管文で鬼瓦を表現している。

4 は焼成良好、平面が円形の屋蓋部の軒先部である。丸瓦はやや角張った粘土紐を貼り付けており、その接着面との隙間を粘土で埋めて丁寧になでている。丸瓦の脇には、縦方向に線刻を施している。丸瓦は軒先よりも飛び出ており、瓦当面に十字の切り込みを施している。

5 は丸瓦の先端部である。4 と酷似しており、同一個体かと思われる。

6 は焼成があまり良くないが、1・3 と同様に丸瓦を貼り付けていたのであろう剥離痕が残っている。平瓦の軒先には、波形の線刻を施している。

7、8 はいずれも屋蓋部の軒先の部分である。裏面の、軒先から約 5 cm のところに軸部の痕跡があり、屋蓋部と軸部を一体にして成形していたと思われる。軒先は直線的で、平面が方形の屋蓋部と思われる。

#### 軸部 (9～17)

9 は焼成良好、斗栱部である。縦方向に突帯を貼り付けて柱を表現している。

10 は軸部の上端部である。T 字に突帯を貼り付けて、頭貫と柱を表現している。突帯で区画された壁面に線刻を施し、また、一部には透かしの表現がある。円筒形の軸部と思われ、突帯の付け根の復元径は直径約 50 cm となる。

11 は焼成良好、柱と思われる突帯には、ヘラ状工具で段を設けている。針状の工具で縦・横方向に線刻を施している。透かしと思われる切れ込みがある。

12 は 10 と胎土・焼成が類似しているが、10 とは内傾する角度が異なる。横方向に線刻を施し、突帯の付け根には小孔が穿たれている。

13 は瓦質で、幅が狭い突帯を横方向に巡らせている。その突帯を貫くように小孔が穿たれており、突帯の上には縦方向に線刻が施されている。裏面には、同心円あて具痕が残っている。

14、15 は、ともに焼成はあまり良くない。縦・横方向に突帯を貼り付け、ヘラ状工具で段を設けている。突帯の左右には透かしが表現されている。針状の工具で線刻が施されている。

16、17 は、ともに瓦質で、壁面に花卉が線刻されている。16 は縦・横方向に突帯を貼り付けており、13 と同様に突帯を貫く小孔が穿たれている。壁面に花卉を線刻する瓦塔は、ハガ遺跡(岡山県岡山市)からも出土している。

#### 初層軸部 (18・19)

18 は胎土に砂粒を多く含み、焼成もあまり良くない。底部の小片ではあるが、底部の上方に複数の透かしが施されている。

19 も初層軸部の下側の底部である。表面には、直径約 2 cmの十字を印刻したスタンプが横一列に押されている。

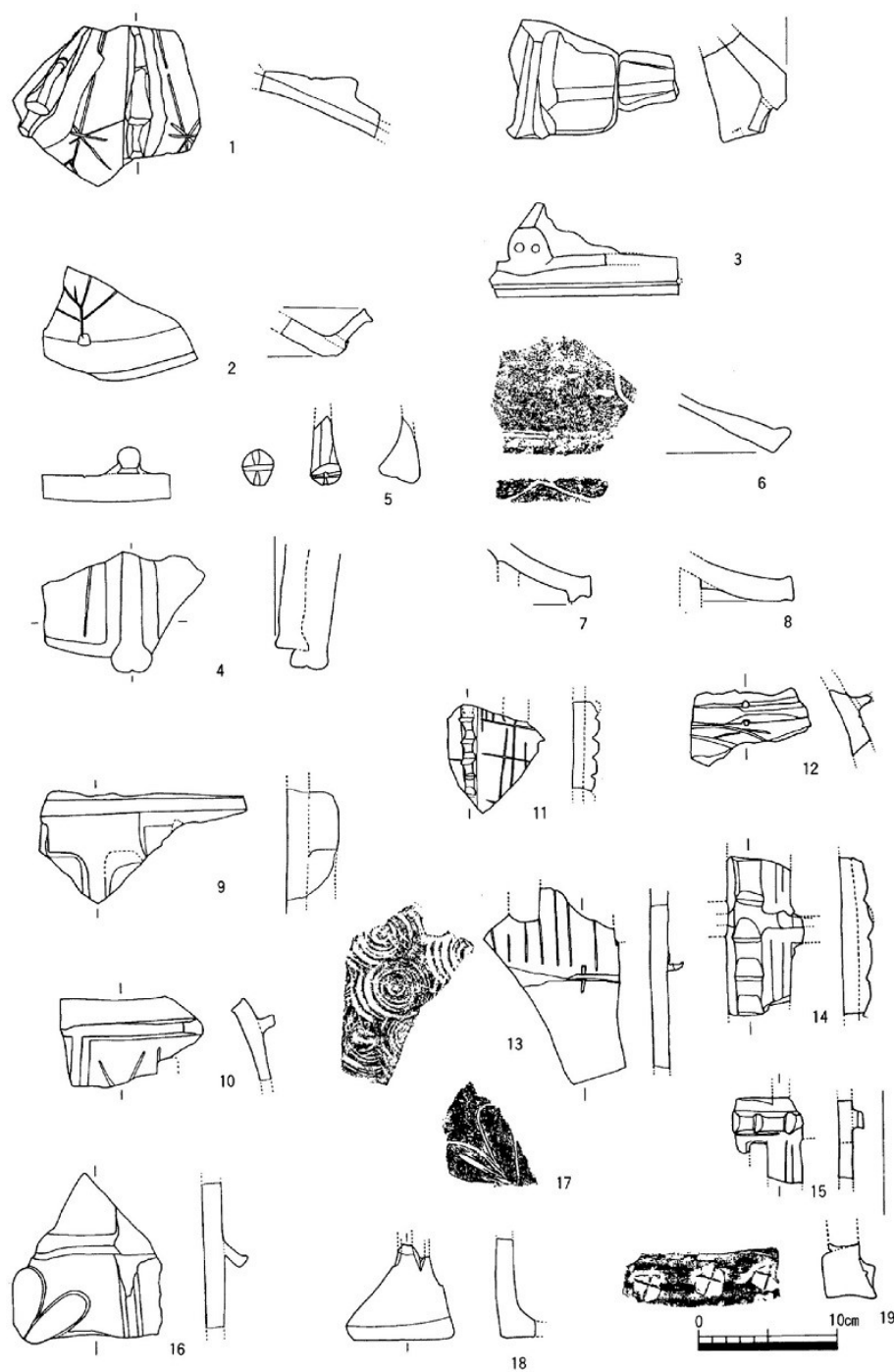


図 40 関戸廃寺出土の瓦塔

## 広島県

### 川谷遺跡（福山市神辺町上竹田）

備後国安那郡に位置する。発掘調査はなされておらず、遺跡の性格は不明である。瓦塔は1点採集されており、8世紀後半～10世紀の軒先瓦と共伴している。

採集された瓦塔片は、屋蓋部の破片で須恵質である。棒状粘土を貼り付けて表現した丸瓦が4本残っている。丸瓦の上部には、切れ込みを入れて瓦一枚一枚を表現している。平瓦の表現はない。裏面はヨコナデ調整されており、軸部の一部が残っている。軸部はおそらく円筒形で、その復元径は約47cmになる。

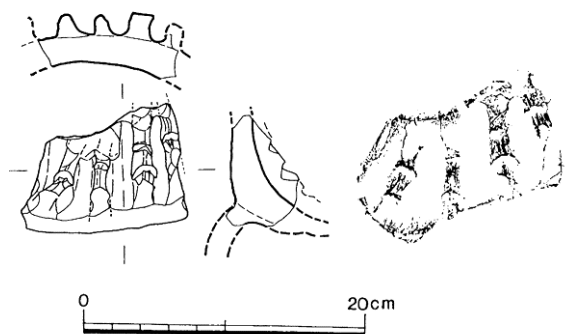


図 41 川谷遺跡出土の瓦塔

### 寺戸廃寺（三次市三次町寺戸）

備後国三次郡に位置しており、その創建時期は7世紀後半である。1969年、1970年に発掘調査が行われたが、明確な伽藍配置はわかっていない。

瓦塔は、初層軸部の入口の部分で1点出土している。須恵質で、厚さは約1cmである。開口部の縁に沿って断面方形の突帯が貼り付けられている。上部に向かうにつれ、やや内傾する。裏面には、同心円あて具痕が残っている。

瓦塔の他にも、瓦堂などの小建築物に伴うとされる小型の鴟尾も出土している。

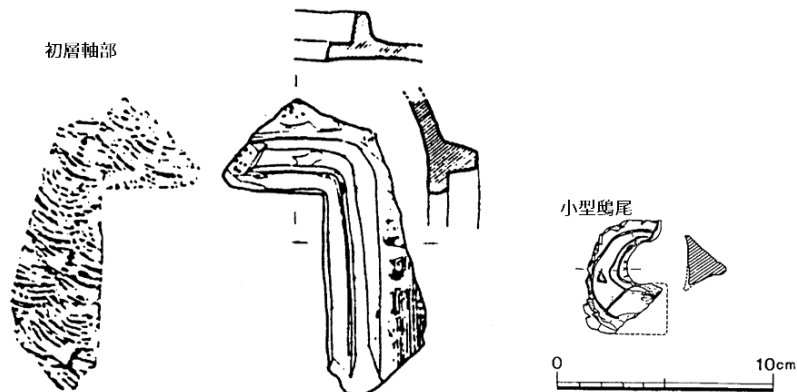


図 42 寺戸廃寺出土の瓦塔

## 第4節 四国地方

### 愛媛県

#### 来住廃寺（松山市来住町）

来住廃寺は、伊予国久米郡に属し、国指定史跡である久米官衙遺跡群に含まれる。松山平野の北東部に位置し、久米官衙遺跡は正倉院跡、政庁跡、回廊状遺構が区画性をもって造営されていることから、官衙関連施設とされている。現在知られている中では日本最古の政庁跡であり、7世紀中頃までには整備が完了していたと考えられている。来住廃寺は、7世紀の終わり頃に久米官衙遺跡の回廊状遺構が壊された後に建立されており、発掘調査によって金堂跡が検出されている。

瓦塔は35次調査で初層軸部とその開口部、36次調査で屋蓋部と軸部の接合部が出土している。該当する調査の報告書は刊行されておらず、図面等は未発表のため詳細は不明である。現地説明会資料によると、瓦塔の軸部は円筒形に復元され、壁面に透かしが施されているらしい。

### 徳島県

#### 石井廃寺（名西郡石井町城ノ内）

発掘調査により、金堂跡、塔跡、回廊跡が検出されている。瓦塔は塔跡から出土した。

1、2は初層軸部である。突帯で柱を表現しており、壁面には湾曲した窓が設けられている。初層軸部の断面はゆるやかに弧を描いており、円筒形軸部かと思われる。

3は屋蓋部の隅棟の部分かと思われる。先端に向かうにつれ、徐々に太くなる。

4は部位不明。突帯を貼り付けており、断面は急な弧を描いている。

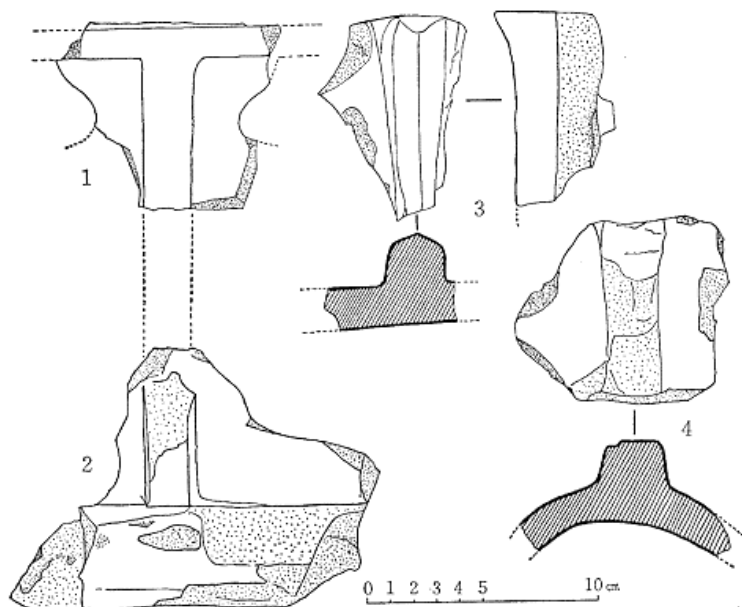


図43 石井廃寺出土の瓦塔

## 第5節 九州地方

### 福岡県

#### トギバ窯跡（北九州市小倉南区）

豊前国企救郡に属する、8世紀後半を主体に操業していた須恵器窯跡で、その最終段階は8世紀末か、少し下って9世紀前半である。水晶山系山地の山麓から山中にかけて古代の須恵器窯が集中する水晶山系窯跡群に属し、トギバ窯跡はそのなかでも最大規模の窯跡である。瓦塔は、屋蓋部片が数点出土している。出土した瓦塔片から、2種類の屋蓋部が復元できる。1つは平面方形の屋蓋部、もう1つは平面円形の屋蓋部である。

##### 屋蓋部 1

一辺 33.4 cm の方形の屋蓋部であるが、各辺とも外側に膨れるため、その最大幅は 39.4 cm となる。全体にロクロナデ調整の痕跡があり、最初に円形に成形してから4か所をヘラで切って隅を作り出したと考えられる。四隅に伸びる隅棟の間に3列ずつ丸瓦を放射状に配置している。丸瓦は棒状粘土を貼り付けて表現している。隅棟の軒先付近右傍らに、風鐸を吊るすための小孔が穿たれている。中心部は心柱を通すための円孔が開いており、その上部は水平に調整されている。裏面に垂木の表現はない。

##### 屋蓋部 2

平面円形の屋蓋部で直径は約 40.4 cm、全体にロクロナデ調整の痕跡がある。棒状粘土を貼り付けて丸瓦を表現しており、丸瓦は計 12 本であったと思われる。平面方形の屋蓋部 1 と同じく、心柱を通す円孔の上部は水平に調整されている。裏面に垂木の表現はない。

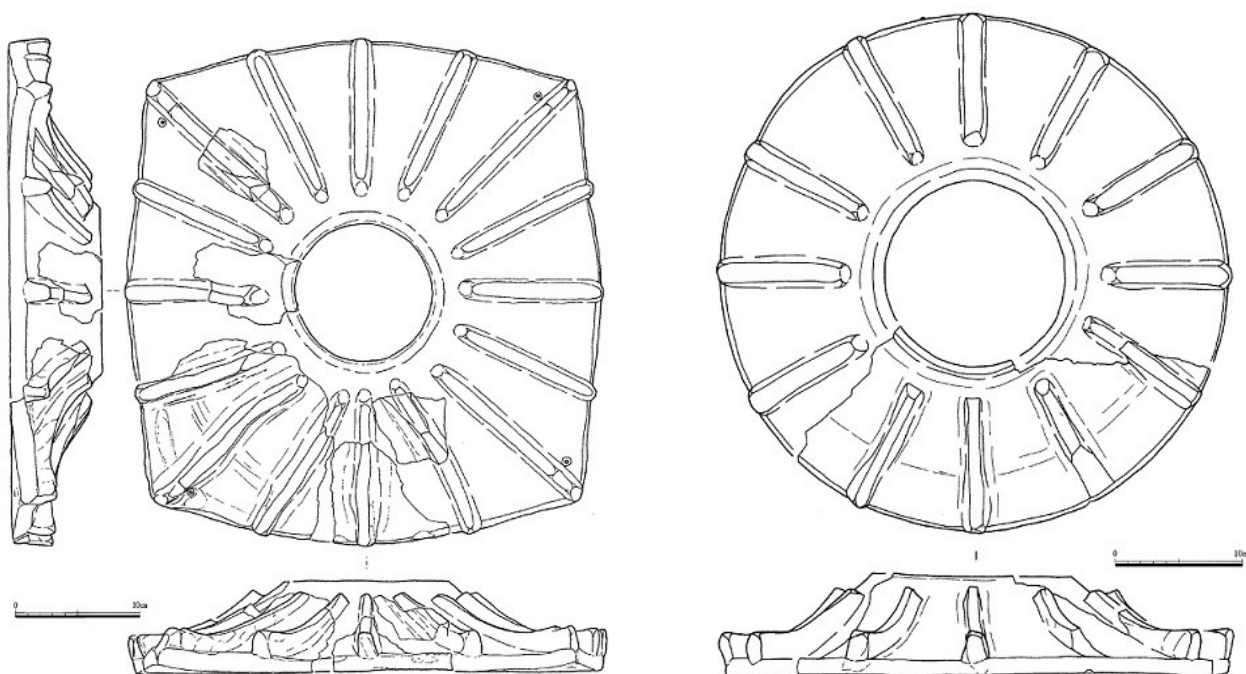


図 44 トギバ窯跡出土の瓦塔

#### 粃ノ粉池窯跡（北九州市小倉南区）

水晶山系窯跡群からは少し離れるが、トギバ窯跡と似た器種の須恵器が採集されており、時期も 8 世紀後半代と考えられる。踏査により、粃ノ粉池の西岸に 2 基、東岸に 4 基、南岸に 1～2 基の窯跡が確認された。

瓦塔は、西岸の窯跡から 2 点採集されている。いずれも屋蓋部の軒先の部分で、同一個体かと思われる。棒状粘土を貼り付けて丸瓦を表現し、その断面は方形である。軒先付近の丸瓦は、上部を削り取って段を設けている。

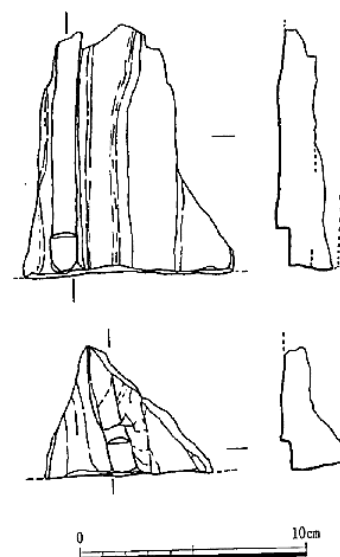


図 45 粃ノ粉池窯跡出土の瓦塔

#### 御祖神社裏窯跡（北九州市小倉南区）

トギバ窯跡と同じく水晶山系窯跡群に属し、その西方、標高 150m ほどの山中に位置する。瓦塔の屋蓋部が 1 点出土しており、共伴遺物には坏、蓋、有蓋椀、皿、盤、短頸壺、双耳瓶、中頸小瓶などがある。操業時期はトギバ窯跡と重複するが、下限はやや新しい時期まで下るかと思われる。

出土した瓦塔片は、屋蓋部の隅の部分である。心柱を通す中央の円孔の復元径は直径約 14 cm で、そこから想定される屋蓋部の一辺は約 42 cm である。中央の円孔の周りには、幅 4 cm ほどの周縁帯を貼り付けている。丸瓦は棒状粘土を貼り付けて表現し、各辺に 6 本ずつ、放射状に配置していたと思われる。軒先はやや反り上がる。隅棟の先端を削り取り、隅棟と稚児棟を表現している。隅棟と稚児棟の間には、風鐸を吊るすための小孔が穿たれている。裏面に垂木の表現はない。

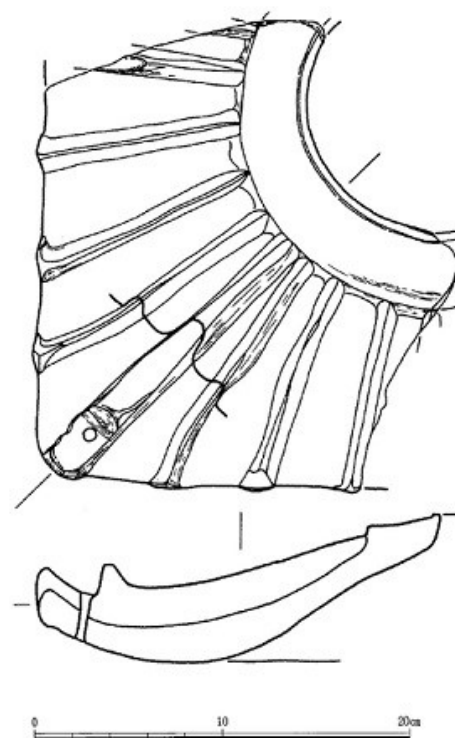


図 46 御祖神社裏窯跡出土の瓦塔



## <sup>あらいづ</sup>洗子窯跡（北九州市小倉南区）

トギバ窯跡や御祖神社裏窯跡と同じく水晶山系窯跡群に属し、トギバ窯跡の南西、標高 180m の地点に位置する。おもに大分県宇佐市の方面に須恵器を供給していた窯跡とされており、出土した須恵器類の器種や特徴がトギバ窯跡と類似している。操業時期はトギバ窯跡と同じく、8 世紀後半を主体とし、9 世紀にまで及ぶ。瓦塔は屋蓋部のほか、水煙、九輪、心柱円筒部、風鐸が出土しており、3 個体以上確認されている。共伴遺物には、坏、蓋、椀、高坏、皿、双耳瓶、甕などがある。

### 屋蓋部

1 の一辺は約 48.5 cm、心柱を通すための中央の円孔の直径は約 16.0 cm である。トギバ窯跡例、御祖神社裏窯跡例と同様に棒状粘土を放射状に配置しているが、上記 2 例のようにすべての丸瓦が中心から放射状に降りてくるのではなく、屋蓋部の一番端の丸瓦のみ隅棟から軒先へと伸びている。また、本例は軒先瓦当面に円盤状の粘土を貼り付けて軒丸瓦を表現している。丸瓦は、一辺につき 7 本ずつ配置されている。御祖神社裏窯跡例と同じく、隅棟と稚児棟を設けて、その間に風鐸を吊るすための小孔が穿たれている。

2 は、1 と同様の屋蓋部である。一辺の長さは約 44.0 cm となる。

3、4 はいずれも屋蓋部の隅棟の軒先部分である。隅の角度が 108° とやや開き気味ではあるが、トギバ窯跡例のように各辺が外側に張り出すような方形の屋蓋部であったと思われる。3 の風鐸を吊るすための小孔は、トギバ窯跡例と同じく隅棟の傍らに穿たれている。

### 相輪部

5、6 は水煙の破片である。厚さ約 1.0 cm の粘土板に複数の透かしを設けている。

7、8 はいずれも九輪である。皿を伏せたような形で、中央に直径約 10 cm の円孔を設けている。側面にも直径 4.0 mm の小孔が 4 か所穿たれている。

### 心柱円筒部

9 は水煙部の心柱で、水煙が剥離した跡が残っている。上部がすぼまるような形状をしているが、これはこの上に組み合わさる竜車や宝珠を固定するためであろう。残存部の最大径は約 12.0 cm で、このまま円筒形の土製品が心柱として初層部まで至っていたのか、途中で木造の心柱と接続していたのかは不明である。

### 風鐸

10、11 は屋蓋部の四隅に吊るされていた風鐸、12、13 はそれに吊り下げられる風招である。

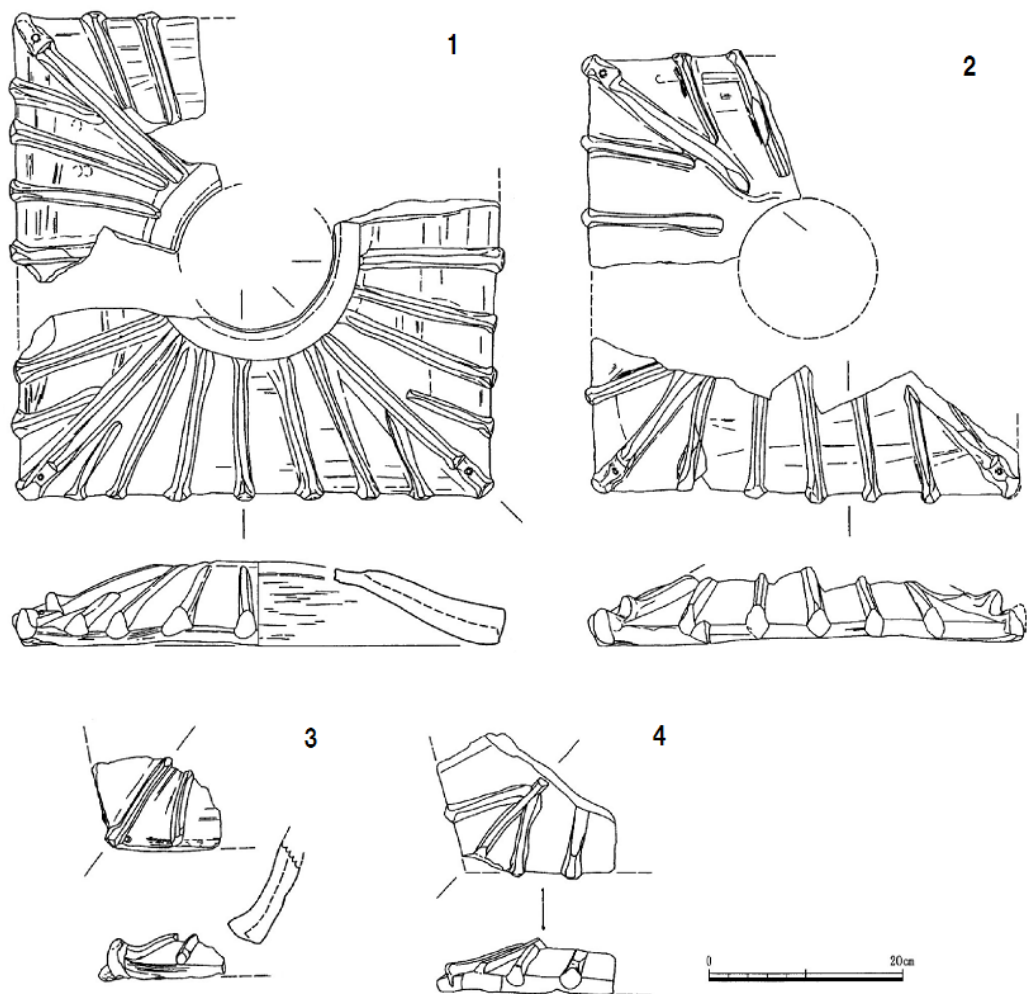


図 47 洗子窯跡出土の瓦塔

### 山方里窯跡（北九州市小倉南区）

水晶山系窯跡群に属し、洗子窯跡の南約 350m、標高 220m の地点に位置する。瓦塔は、屋蓋部と水煙の他に、心柱円筒部品も出土しているようである。共伴遺物には坏、蓋、有蓋椀、高坏、皿、甕などがある。瓦塔の様相は、洗子窯跡例と近似している。その他の須恵器類も、洗子窯跡のものと似た特徴を有しており、ほぼ同じ時期に操業していたと考えられる。

#### 屋蓋部

平面方形の屋蓋部で、一辺は 37.4 cm、中央の円孔の直径は 10.0 cm である。丸瓦は棒状粘土を貼り付けて表現しており、一辺につき 6 本ずつ放射状に配置していたと思われる。隅棟と稚児棟を表現しており、隅棟の傍らには、風鐸を吊るすための小孔が穿たれている。裏面に垂木の表現はない。

#### 水煙

粘土板に、直径 2.0 cm ほどの楕円形の透かしを複数設けて表現している。

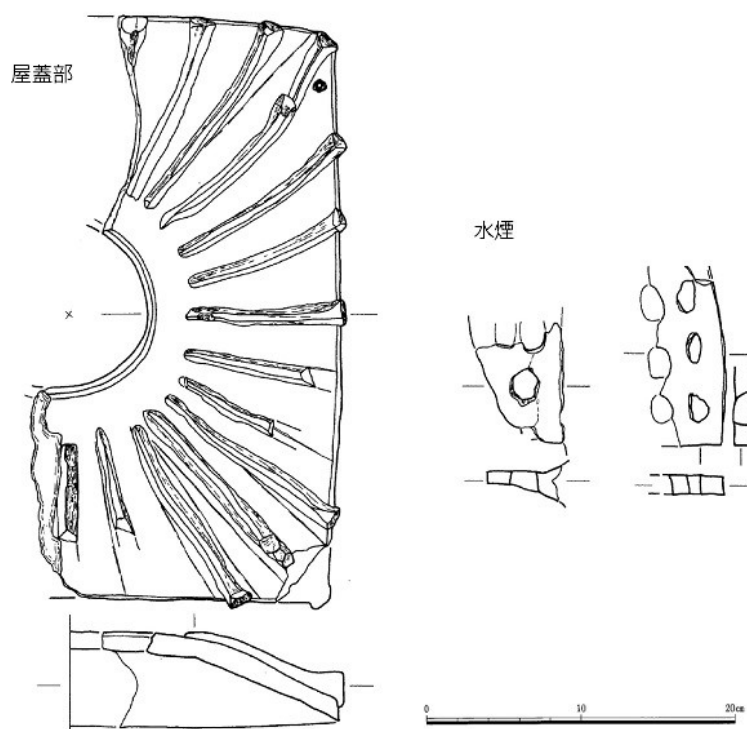


図 48 山方里窯跡出土の瓦塔

#### 牛頸本堂遺跡（大野城市上大利）

筑前国御笠郡に位置する、九州地方最大の窯跡群である。『延喜式』では、九州で唯一の須恵器貢納国として「筑前国」が挙げられており、それに該当する窯跡が牛頸窯跡群であるとされている。また、牛頸窯跡群から大宰府へ調納していたことも明らかになっている。瓦塔は、牛頸本堂遺跡群 2～5 次窯跡の灰原から出土しているため、いずれの窯で製作されていたのかは不明である。共伴遺物には坏蓋、坏、有蓋椀、高坏、皿、鉢、短頸壺、長頸壺、中頸壺、甕、大甕などがあり、豊富な器種製作を行っていた須恵器窯であったことがうかがえる。2～5 次窯跡の操業時期は 8 世紀後半を中心とする。

出土した瓦塔片は屋蓋部のみである。屋蓋部の一辺の長さは約 40.0 cm で、四隅に伸びる隅棟の間に 4 本の丸瓦が配置されている。丸瓦は、棒状粘土を放射状に貼り付けて表現している。中央には、心柱を通すために直径 11.2 cm 前後の円孔が開けられている。四隅は反り上がり、隅棟の先には風鐸を吊るすための小孔が穿たれている。裏面に垂木の表現はない。

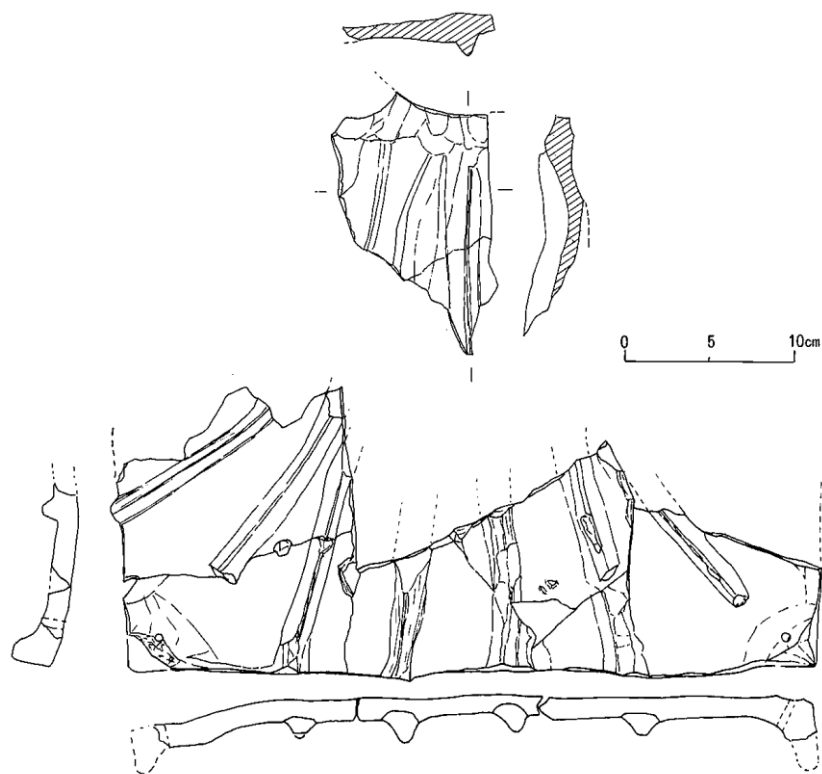


図 49 牛頸本堂遺跡出土の瓦塔

#### 般若寺跡（太宰府市朱雀）

筑前国御笠郡に位置する寺院跡である。白雉 5（654）年、筑紫大宰帥であった蘇我日向によって建立されたとされている。

瓦塔は、地元住民によって保管されていた。屋蓋部は八角形を呈し、復元径は八角稜部で 64 cm となる。裏面中央には直径約 22 cm、深さ 8 cm ほどの貫通しない円穴を設けている。隅棟に対応する箇所には二軒の垂木を表現している。裏面の垂木の中央と、軒先付近には線刻が施されている。厚さ約 5 cm の軒先部分の側面にも、線刻を 1 条施している。また、飛檐垂木の先端には、風鐸を吊るすための小孔が穿たれている。

正倉院の奈良三彩陶塔のように層塔であった可能性もあるが、屋蓋部が大きく、心柱孔がないことから、単層の八角形堂であったとも考えられる。

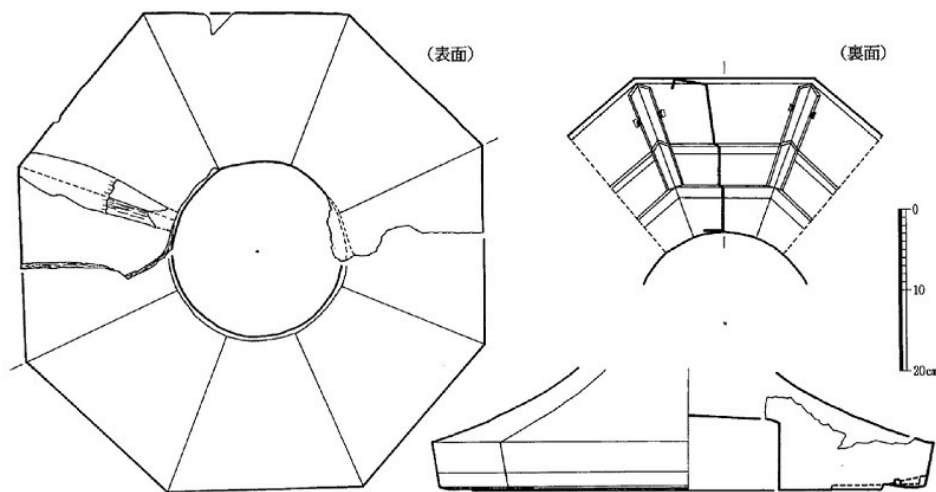


図 50 般若寺跡出土の瓦塔

#### 観世音寺裏（太宰府市観世音寺）

観世音寺は、筑前国御笠郡に位置する。天智天皇が、母である斉明天皇を追悼するために発願し、その後、聖武天皇の代に完成する。

瓦塔は、この観世音寺の裏から出土した。焼成はやや軟質で、色調は灰黄色である。復元すると径が 35 cm の六角形屋蓋部となる。隅棟は棒状粘土を貼り付けて表現し、軒先の厚さは約 5 cm である。裏面に垂木の表現はなく、中央に直径 22 cm、深さ 1 cm の円穴を設け、さらにその中心部に直径 6 cm、深さ 4 cm ほどの穴を設けた二段構造になっている。般若寺跡例と同様に心柱孔がないため、瓦堂であった可能性が高い。

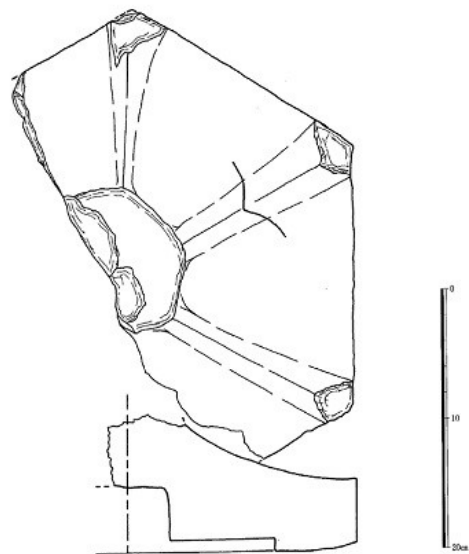


図 51 観世音寺裏出土の瓦塔

### 佐賀県

#### 上和泉遺跡（佐賀市久保泉町上和泉）

肥前国佐賀郡に属し、佐賀市北東部の脊振山系南麓南方に広がる洪積台地上に位置する弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。瓦塔が出土したのは 9 区の土坑で、その時期は 8 世紀後半～9 世紀前半である。この土坑からまとまって出土したが、廃棄されたというよりは、人為的に埋納

されたと思われる。

9 区の土坑からは、瓦塔の初層軸部片が多く出土し、ほぼ完形に復元されている。土師質で焼成は良好、色調は淡黄灰色である。尾垂木と持ち送りを一体化しており、壁面に貼り付けた粘土帯を凸形に切り出し、大斗が逆凸形に浮き出るように表現している。復元された初層軸部の底部の一边は 35 cm、高さは約 38 cm となる。四面に開口部を設けており、内部は空洞で表面には赤彩が残る。9 区からは、他にも屋蓋部片が少数出土しているが、復元された初層軸部とは組み合わないものも含まれており、最低でも 2 個体は存在していたと思われる。9 区に近い 6 区、7 区からも屋蓋部片が出土している。いずれも半截竹管状の工具で丸瓦のみを表現した屋蓋である。

9 区から出土した初層軸部は、東山遺跡（埼玉県児玉郡美里町甘粕）出土の瓦塔と近似している。東山遺跡例は内法長押が表現されていないため、上和泉遺跡例よりも規模が小さくなる<sup>(8)</sup>が、斗拱部の構成や、初層軸部全形に対する開口部の比率は類似している。

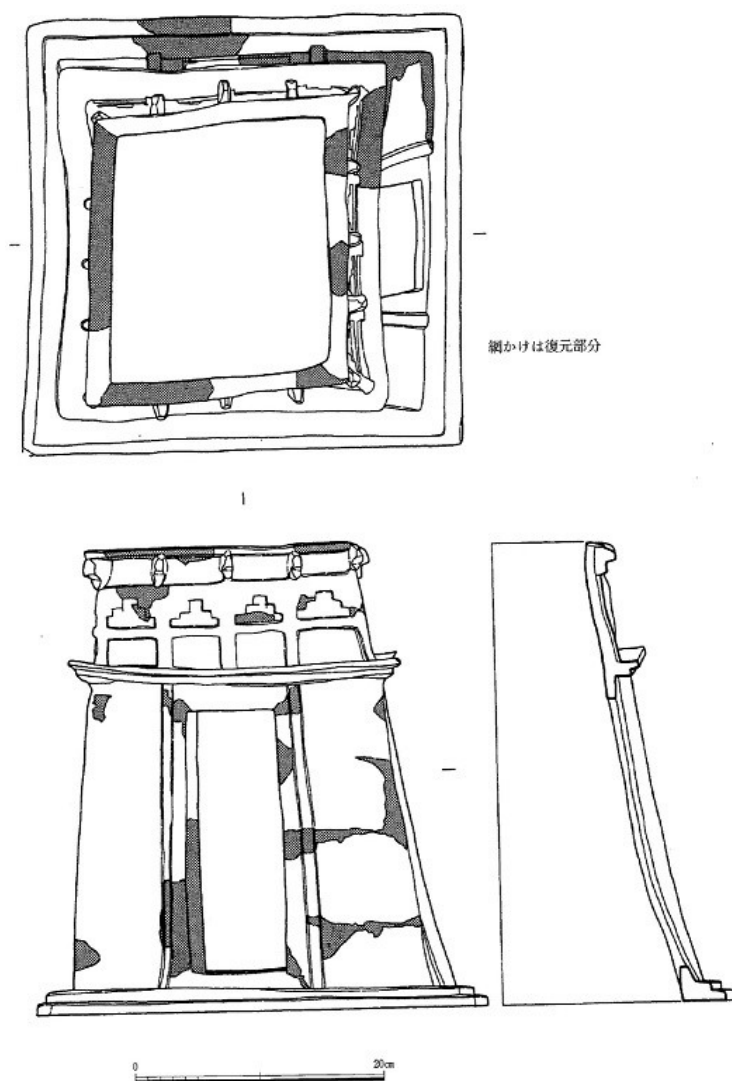


図 52 上和泉遺跡出土の瓦塔

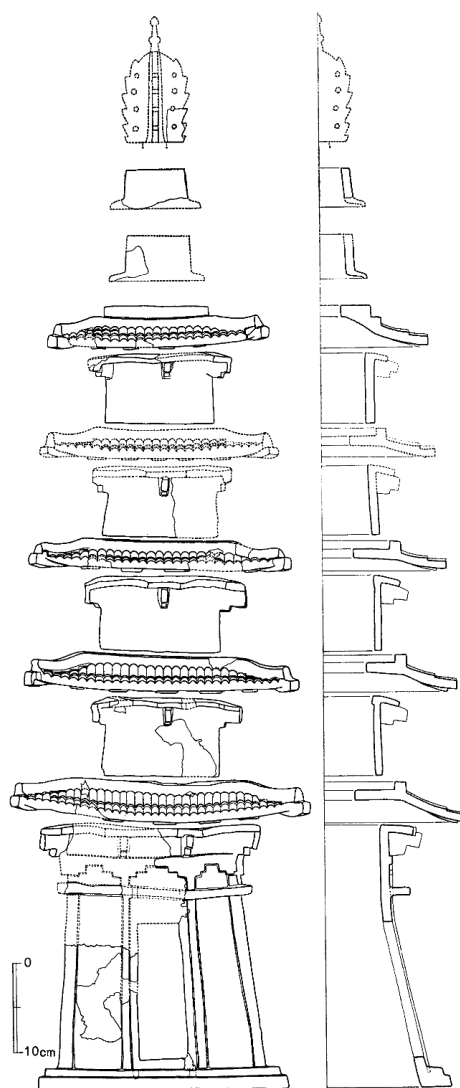


図 53 東山遺跡出土の瓦塔

# **徳永遺跡**（佐賀市久保泉町上和泉徳永）

上和泉遺跡のすぐ西側に近接する、古代から中世にかけての集落遺跡である。瓦塔が出土したのは徳永遺跡 15 区内で、古代の遺構は、掘立柱建物群、井戸、土坑、溝が検出された。瓦塔は、掘立柱建物跡に伴う溝から 1 点出土している。

出土した瓦塔は屋蓋部片で土師質、色調は赤褐色である。半截竹管状の工具で丸瓦のみを表現しており、規則的に沈線を施して瓦一枚一枚を表現している。裏面には垂木の表現があり、ヘラで削り出して一軒の垂木を表現している。

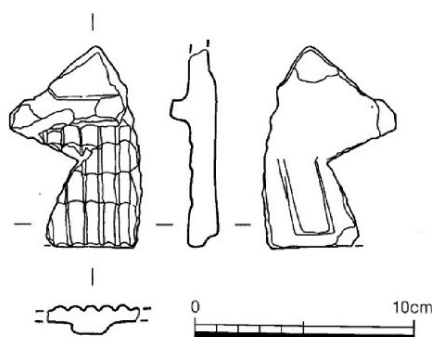


図 54 徳永遺跡出土の瓦塔

## 大分県

### 瓦塚遺跡（宇佐市石田）

豊前国宇佐郡に位置する。瓦塔のほかには円面硯、線刻土器、墨書土器、大宰府系の軒先瓦、銅製の銚帯<sup>かたい</sup>が出土しており、郡衙かその関連施設であった可能性が指摘されている。

瓦塔は 10 点出土しており、いずれも屋蓋部の破片である。胎土・焼成・調整が共通しており、同一個体かと思われる。想定されるのは平面方形の屋蓋部で、棒状粘土を放射状に貼り付けて丸瓦を表現している。丸瓦の断面は台形、もしくは隅丸三角形となる。中央には心柱を通すための円孔が開いており、その円孔の縁から約 1.5 cm のところにヘラで沈線が施されている。裏面に垂木の表現はない。

本例は、トギバ窯跡に代表される水晶山系窯跡群で生産された瓦塔と近似しており、そこから供給されたものと考えられる。

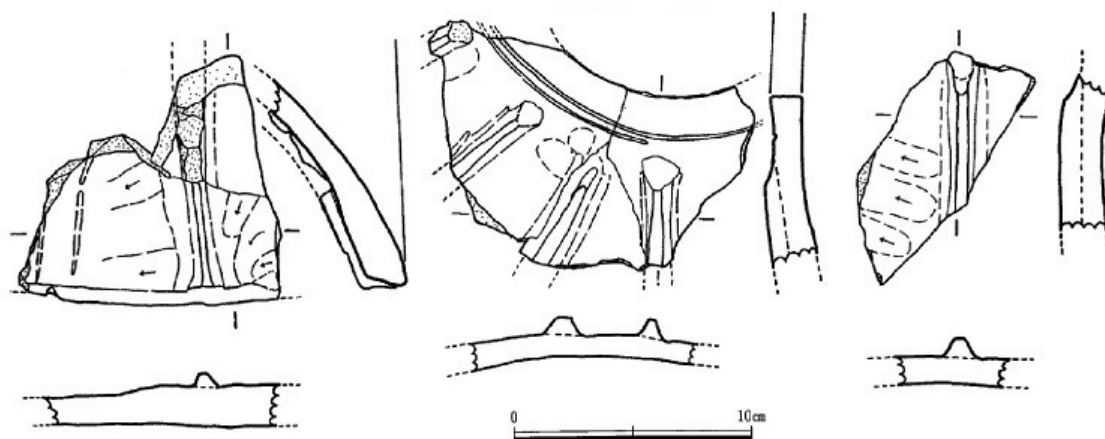


図 55 瓦塚遺跡出土の瓦塔

### 塔ノ熊遺跡（中津市三光西秣）

豊前国下毛郡に位置する。発掘調査により、土坑から瓦塔と平瓦が検出されている。また、隣接する溝からは、新羅系軒丸瓦や鬼瓦が出土している。

瓦塔は 8 世紀後半か、もしくはそれよりもややさかのぼる可能性がある。出土したのは屋蓋部が 1 点のみで、焼成は良好、色調は灰色である。厚さは 3.9 cm で、表面はナデ調整、裏面は不定方向にヘラケズリ調整されている。丸瓦はおそらく棒状粘土を貼り付けて表現したものと思われる。丸瓦と丸瓦の間隔が比較的狭いが、出土したのは破片が 1 点のみのため、全貌は明らかでない。

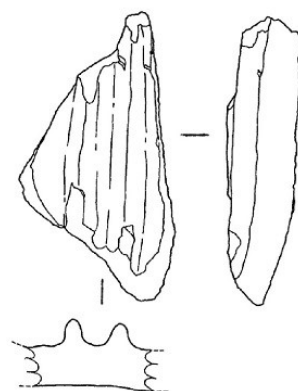


図 56 塔ノ熊廃寺出土の瓦塔



## 熊本県

### 陳内廃寺（熊本市南区城南町陣内）

肥後国益城郡に位置する、白鳳時代創建の寺院跡である。瓦塔は、講堂から西へのびる回廊付近から出土している。二次的に火をうけた痕跡がある。

復元された屋蓋部の一辺の長さは約 74 cm で、心柱を通すために開けられた中央の円孔は直径約 28 cm となる。四隅に棒状粘土を貼り付けて隅棟を表現しており、この隅棟以外には瓦の表現はみられない。小田富士雄氏は、この瓦塔の年代を 8 世紀後半に位置付けている。

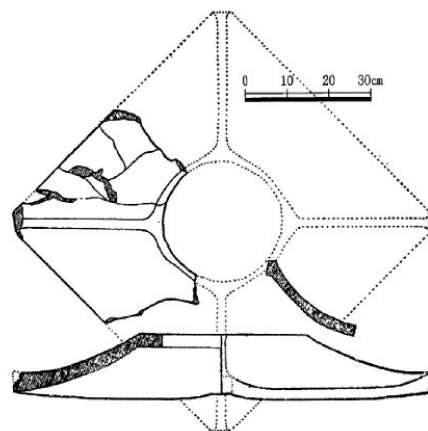


図 57 陳内廃寺出土の瓦塔

### 妙見中宮<sup>はざば</sup>壇場遺跡（八代市妙見町壇場）

妙見中宮跡は、永暦元（1160）年に二条天皇の勅願により、肥後守平貞が造営した社殿跡である。その妙見中宮跡のそばを流れる中宮川の対岸から、平安時代の瓦塔が出土している。屋蓋部数点と斗拱部が出土しているが、一部は現在所在が不明である。

屋蓋部は、半截竹管状の工具で丸瓦のみを表現している。この型式の瓦塔（石田 A タイプ）は、東日本で盛行するものの、西日本ではあまり見られない。裏面には、二軒の垂木表現がある。垂木間隔は狭く、ヘラで削り出して地垂木と飛檐垂木を表現している。屋根瓦表現は、池田分類の幅広工具押し引き A 手法を採用している。

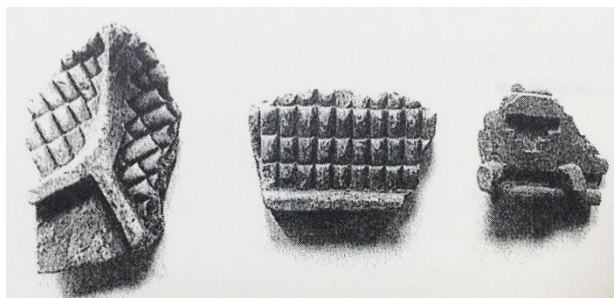


図 58 妙見中宮壇場遺跡出土の瓦塔

### 御手洗神社遺跡（上益城郡甲佐町）

御手洗神社境内と水田の境から、瓦塔の水煙部が採集された。色調は赤褐色で、高さ 14.0 cm ほどである。中央には、直径 1.8 cm の孔があけられている。羽は 4 方向に広がり、その先端には 7 つの尖部が表現されている。透かしは施されていない。

この地点からは、平安時代のもと思われる瓦も採集されており、その時期に何らかの仏教施設が存在していた可能性がある。

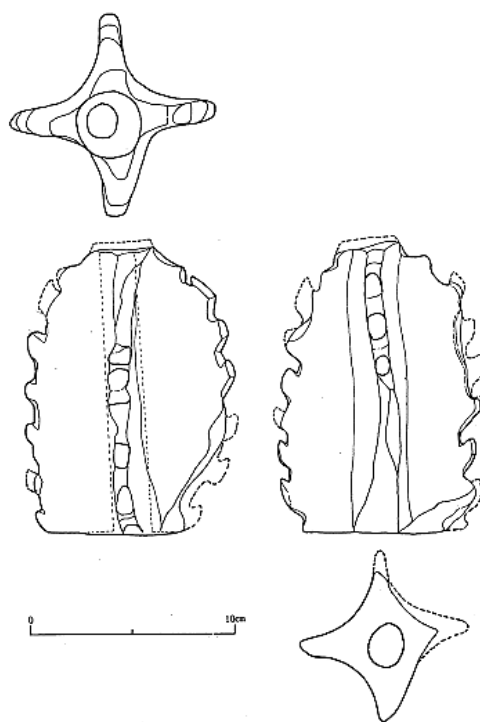


図 59 御手洗堂遺跡出土の瓦塔

#### <註>

- (1) 平城宮出土軒瓦編年第Ⅰ期は 708 年～721 年、第Ⅱ期は 721 年～745 年、平城宮出土土器Ⅱは 725 年、Ⅲは 750 年である。
- (2) 難波宮系の第四期種重圈文軒丸瓦で、平城宮、平城宮の諸寺跡、国衙、郡衙等から出土する。
- (3) 8 世紀からとされているが、それよりも少しさかのぼる時期の軒丸瓦も出土している。
- (4) 心柱が塔身に対して短いことや、屋蓋部の大きさが階層ごとに若干疎らなことから、複数の五重塔の部材を組み合わせて七重塔にした可能性がある。
- (5) 亀田修一氏は「軒先のラインと丸瓦列の延ばした部分の交わる角度を復元すると、軒先の角の部分の角度は約 164°で、そのまま屋根を復元すると二十二角形の建物になる。軒先部分の残りが約 1.2 cm しかないため当然不確実ではあるが、かなり角度が広いことは間違いなく、このような二十二角形の建物があるのかはわからないが、少なくとも多角形の建物と考えておく」と述べている（亀田 2002）。
- (6) 平安時代中期の鬼ノ城廃城後、この一帯は山岳仏教の拠点として利用されるようになる。
- (7) 東山遺跡出土瓦塔の初層軸部は、底部の一辺が 28 cm、高さが 30 cm である。

### 第3章 西日本の瓦塔の分析

東日本では、半截竹管状の工具で丸瓦のみを表現した屋蓋部（石田 A タイプ）が主流であるのに対し、西日本では、棒状粘土を貼り付けて丸瓦を表現し、丸瓦と丸瓦の間に平坦面を設けて平瓦とする屋蓋部（石田 B タイプ）がほとんどである。そして、その丸瓦・平瓦の表現方法や屋蓋部の平面形は多種多様で、定型化された東日本の瓦塔に比べて地域色が濃い。表 5 は、西日本で出土する瓦塔の屋蓋部表現を分類したものである<sup>(1)</sup>。

#### 第1節 平行丸瓦型について

瓦塔の屋蓋部において、四隅に棒状粘土を貼り付けて隅棟を表現し、丸瓦を中心から平行に配置する手法が一般的である。屋根瓦の表現方法は、石田 A タイプと石田 B タイプに大別されるが、各々細分化してみていく。

##### 〔1〕 石田 A タイプ

西日本では、先にも述べた通り、石田 A タイプの屋蓋部が出土することは少ない。確認されているのは、滋賀県大津市の衣川廃寺、佐賀県佐賀市の上和泉遺跡、徳永遺跡、熊本県八代市の妙見中宮<sup>はぎば</sup>櫓場遺跡の 4 例のみである。

衣川廃寺の瓦塔については、池田敏宏氏が屋根瓦表現を幅広工具押し引き A 手法、垂木表現をヘラ削り出し A 手法を採用した多武峯類型瓦塔<sup>(2)</sup>に類似していることを指摘している。多武峯類型瓦塔の時期は 8 世紀初頭～前葉に位置付けられており、7 世紀中葉～後葉と考えられる衣川廃寺例は多武峯類型瓦塔に先行するものであるとしている（池田 1999）。

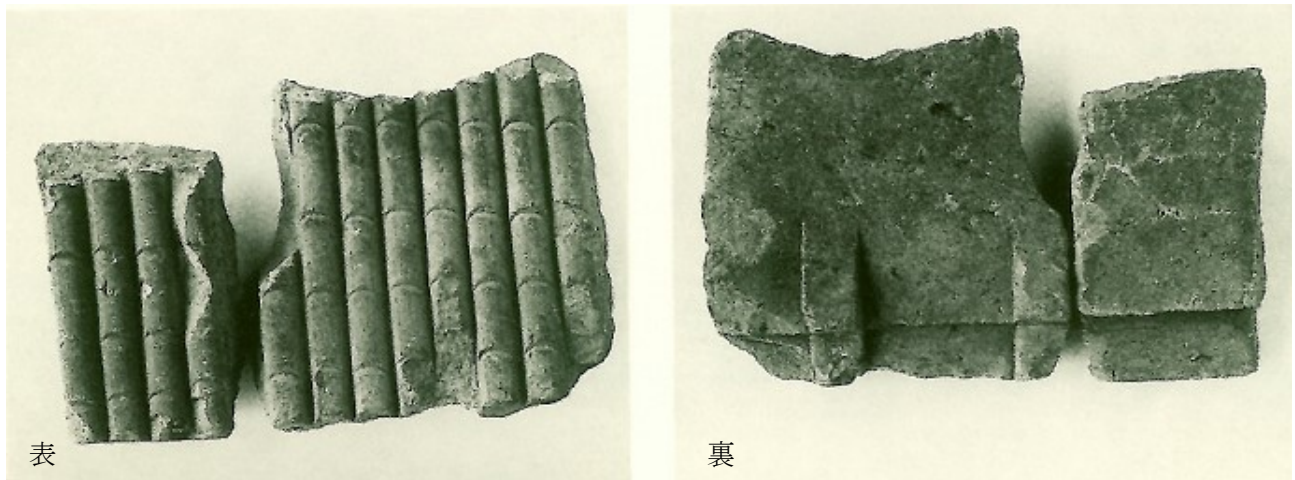


図 60 多武峯遺跡（埼玉県）出土の瓦塔

表 5 西日本出土瓦塔の屋蓋部の分類

平行丸瓦型	屋蓋部の平面形は方形で、丸瓦を中心から軒先に向かって平行に配置する。
・石田Aタイプ	半截竹管状の工具を用いて丸瓦のみを表現している。 例：衣川廃寺・上和泉遺跡・徳永遺跡・妙見中宮樋場遺跡
・石田Bタイプ	棒状粘土を貼り付けて丸瓦を表現し、丸瓦と丸瓦の間の平坦面を平瓦とする。 a 丸瓦にのみ瓦継ぎ目を施す。 例：岡山1号窯跡Ⅱ類・中ノ庄遺跡・岩戸4号窯・金心寺廃寺・広渡廃寺・賞田廃寺Ⅰ類 b 平瓦にのみ瓦継ぎ目を施す。 例：瀬後谷瓦窯 c 双方に瓦継ぎ目を施す。 例：賞田廃寺Ⅱ類※・鬼ノ城 d 双方とも瓦継ぎ目を施さない。 例：五十村廃寺・正法寺山遺跡・朝金天田遺跡・今岡廃寺・備中国分寺跡
放射状丸瓦型	棒状粘土を貼り付けて丸瓦を表現し、丸瓦と丸瓦の間の平坦面を平瓦とする。 丸瓦を中心から放射状に配置する。
・方形屋蓋	屋蓋部の平面形が方形である。 例：岡山1号窯跡Ⅰ類・トギバ3号窯跡（屋蓋部1）・御祖神社裏窯跡・洗子窯跡・山方里窯跡・牛頸本堂遺跡・瓦塚遺跡
・多角形（円形）屋蓋	屋蓋部の平面形が多角形もしくは円形である。 a 丸瓦のみに瓦継ぎ目を施す。 例：須恵廃寺・賞田廃寺Ⅲ類・ハガ遺跡Ⅰ類・関戸廃寺（屋蓋部1※※）・川谷遺跡 b 平瓦にのみ瓦継ぎ目を施す。 例：——— c 双方に瓦継ぎ目を施す。 例：吉井廃寺 d 双方とも瓦継ぎ目を施さない。 例：北山廃寺・千本屋廃寺・ハガ遺跡Ⅱ類・大田茶屋遺跡・トギバ3号窯跡（屋蓋部2）
※ 平瓦部に半月形のスタンプを押している。	
※※ 平瓦部に線刻を施している。	

上和泉遺跡からは、ほぼ完形の初層軸部が出土しているが、屋蓋部は小片のため判断ができない。徳永遺跡出土の瓦塔は、屋根瓦表現が幅広工具押し引き B 手法、垂木表現がへら削り出し C2 手法を採用している宮ノ前類型<sup>③</sup>に類似しており、その時期は 9 世紀前葉頃と考えられる。宮ノ前類型の標識資料は、山梨県の宮ノ前第 2 遺跡出土の瓦塔である。

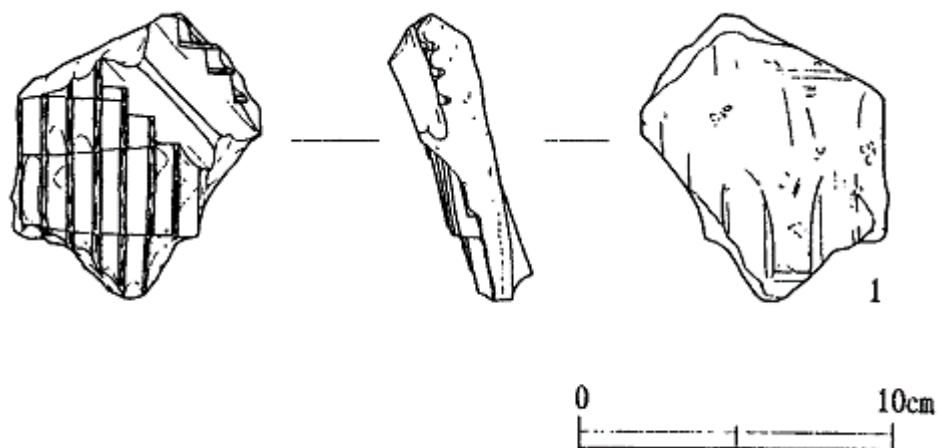


図 61 宮ノ前第 2 遺跡出土の瓦塔

妙見中宮櫓場遺跡出土の瓦塔は、幅広工具押し引き A 手法のものと幅広工具押し引き B 手法のもの 2 種類が確認できる。裏面の垂木表現はへら削り出し C2 手法に近いが一軒構成ではなく、地垂木と飛檐垂木を表現した二軒構成である。

## 〔2〕 石田 B タイプ

西日本で圧倒的に多いのが、棒状粘土を貼り付けて丸瓦を表現する石田 B タイプである。そのうち、丸瓦のみに沈線、あるいは段を設けて瓦継ぎ目を施したものを a 類、平瓦にのみ瓦継ぎ目を施したものを b 類、丸瓦・平瓦ともに瓦継ぎ目を施したものを c 類、丸瓦・平瓦ともに瓦継ぎ目を施さないものを d 類とした。

### a 類

a 類に分類されるものは、三重県松阪市中ノ庄遺跡出土の瓦塔、兵庫県氷上郡の岩戸 4 号窯跡、兵庫県三田市の金心寺廃寺出土の瓦塔、兵庫県小野市の広渡廃寺、岡山県岡山市の賞田廃寺出土の瓦塔（賞田廃寺 I・II 類）である。

中ノ庄遺跡例は、永井邦仁氏によって「猿投窯型瓦塔」に分類されている（永井 2006）。猿投窯型瓦塔は、愛知県の猿投窯跡を中心に東海地方で盛行した瓦塔の型式で、永井氏はこの型式が後に遠江や関東方面での瓦塔製作に影響を及ぼしたと考察している（永井 2016）。永井氏は猿投窯型瓦塔の特徴として、「空中粘土帯」に注目している。これは、粘土帯を軸部から離して一周させて、

ヘラによる線刻や切り込み、凸形スタンプによって三斗を表現したものである。空中粘土帯を採用している猿投窯型瓦塔の例として、愛知県日進市の折戸 80 号窯跡出土瓦塔と愛知県みよし市の黒笹 34 号窯跡出土瓦塔を挙げておく。また、中ノ庄遺跡出土瓦塔の裏面には木の葉の圧痕がみられるが、愛知県豊田市の水入遺跡出土瓦塔と愛知県西尾市古新田遺跡出土瓦塔にも、同じような木の葉の圧痕がみられる。これは、木の葉を下敷きとして使用したさいの痕跡であり、作業台との摩擦を軽減するために使用していたと考えられる。中ノ庄遺跡の瓦塔に関しては、猿投窯のものが持ち込まれたか、あるいは猿投窯の工人と交流があり、瓦塔の製作技法が伝授されたと考えられる。

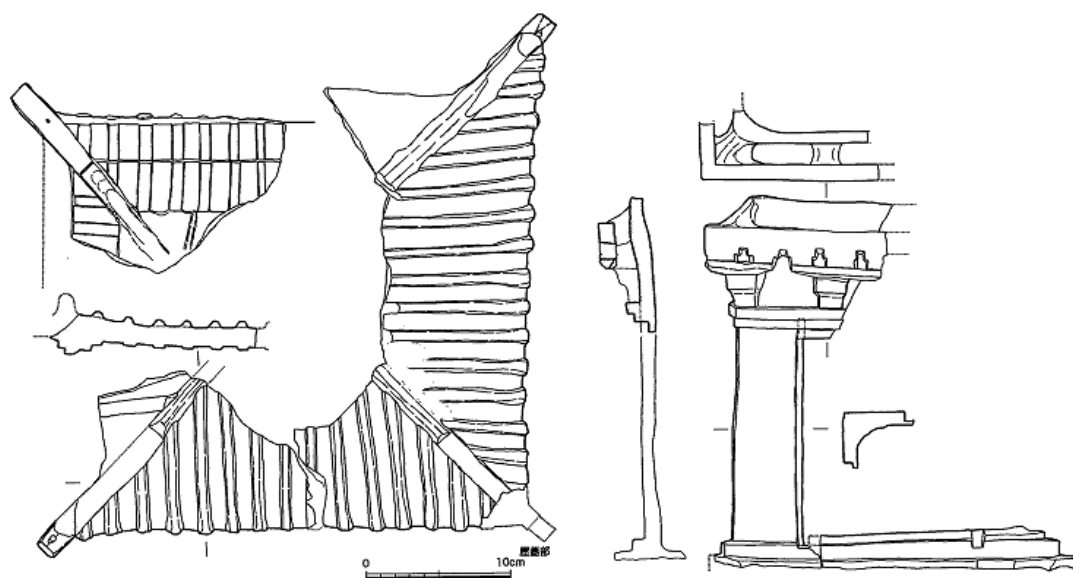


図 62 折戸 80 号窯跡出土の瓦塔

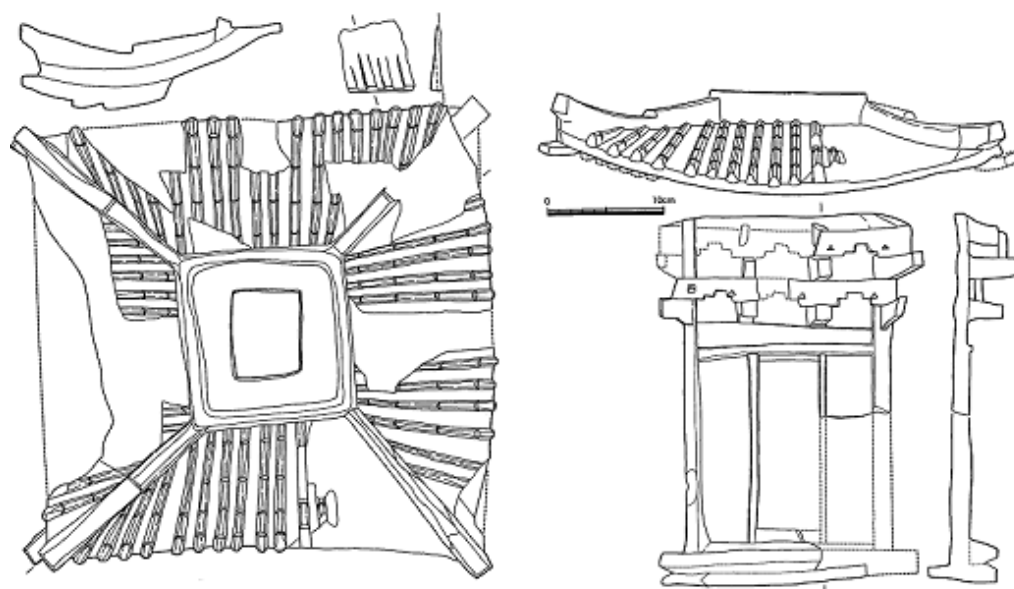


図 63 黒笹 34 号窯跡出土の瓦塔





図 64 屋蓋部裏面に木の葉の圧痕がある瓦塔（中ノ庄遺跡）

金心寺廃寺からは、屋蓋部・軸部ともに方形の瓦塔と、円筒形の軸部が出土している。円筒形軸部に組み合う屋蓋部は出土していないが、次項で述べる放射状丸瓦型の屋蓋部が組み合っていたと想定される。

賞田廃寺出土の瓦塔Ⅰ類は、同遺跡出土瓦塔Ⅱ類と丸瓦の表現は類似しているが、Ⅱ類は平瓦部に半月形のスタンプを連続的に押して平瓦を表現している。沈線を施して平瓦を一枚一枚表現する例は多く見られるが、賞田廃寺Ⅱ類のようにスタンプを用いるものは稀である。賞田廃寺Ⅳ類の屋蓋部も同様のスタンプで平瓦を表現しているが、Ⅳ類は丸瓦表現にもスタンプを用いているため、Ⅱ類とはまた別の型式としておく。

## b 類

b 類に分類されるものは、京都府木津川市の瀬後谷瓦窯出土の瓦塔である。池田氏は「棒状粘土を貼り付けて丸瓦を表現する点、丸瓦と丸瓦の間に平坦面を設けることで平瓦を表している点、平瓦部にへら状工具先端を用いた沈線を施し瓦継ぎ目を表現している点」に注目し、埼玉県坂戸市の勝呂廃寺出土の瓦塔に類似していることを指摘している。「丸瓦に瓦継ぎ目が施されない点、長方形粘土板を貼り付けて垂木を一軒のみ表現する点、垂木の内側に軒桁と思われる横架材状の方形粘土を貼る点、縁の下に高欄表現が見られる点、四天柱と軒裏の横架材状方形粘土の接する面に斗と尾垂木を組み合わせた斗拱表現が見られる点」が勝呂廃寺例とは異なるが、両瓦塔とも同様の時期（8世紀第2四半期頃）に位置付けている（池田 1999）。

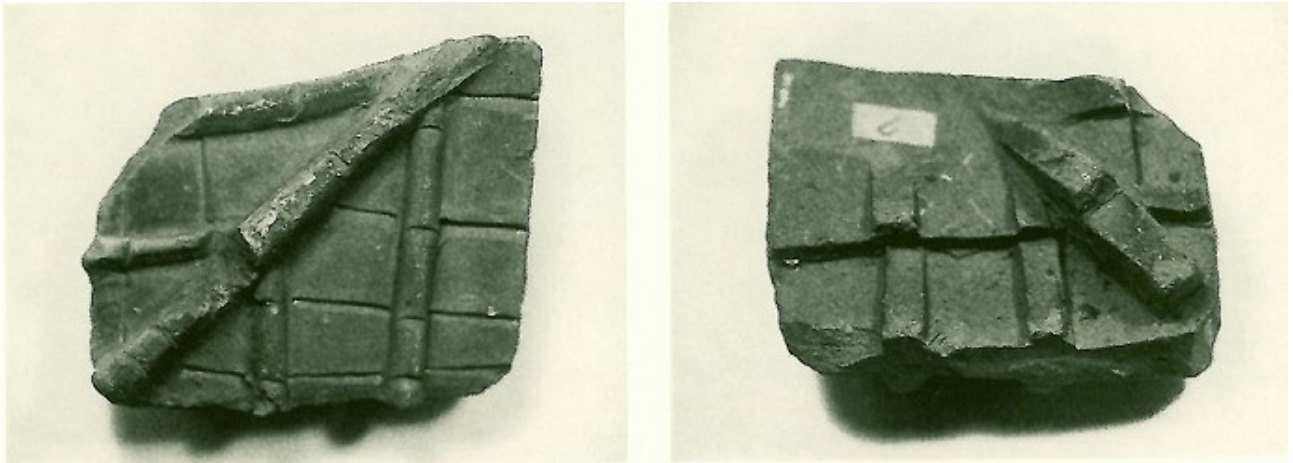


図 65 勝呂廃寺出土の瓦塔

### c 類

c 類に分類されるものは、岡山県総社市の鬼ノ城出土の瓦塔である。鬼ノ城例のように、厚手の屋蓋で平瓦の凹面を強調するような瓦塔はめずらしく、西日本で類似例はみられない。池田敏宏、亀田修一両氏は、鬼ノ城例が韓国の瓦塔に類似している点に注目している（池田 2001）。

賞田廃寺Ⅱ類も c 類に分類したが、本例は平瓦部に沈線や段を設けて瓦一枚一枚を表現するのではなく、半月形のスタンプを使用している。この手法は、賞田廃寺のⅠ類やⅣ類にもみられる。スタンプで瓦一枚一枚を表現する例は、島根県安来市のオノ神遺跡からも出土している。

### d 類

d 類に分類されるものは、大阪府柏原市の五十村廃寺、兵庫県三木市の正法寺山遺跡、鳥取県西伯郡の朝金天田遺跡、岡山県美作市の今岡廃寺、岡山県総社市の備中国分寺跡から出土している。

正法寺山遺跡からは仏像が型抜きされた内陣が出土しているが、これと同範の埴仏が富山県福岡町の石名田木舟遺跡<sup>(4)</sup>からも出土している（大脇 1995）。正法寺山遺跡出土の埴仏は、阿弥陀如来坐像を中尊とし、左脇侍に観音菩薩立像、右脇侍に勢至菩薩立像を表現したものである。埴仏を瓦塔内部に安置していた例は、長野県飯田市の前林廃寺、静岡県浜松市の宇志北大里遺跡、愛知県豊田市の黒笹 8 号窯跡、愛知県江南市の音楽寺遺跡などが知られている。石名田木舟遺跡出土の埴仏も、おそらく瓦塔内部に安置されていたと思われる。石名田木舟遺跡の瓦塔は 7 世紀後半～8 世紀初頭に位置付けられており、正法寺山遺跡の瓦塔もおそらく同時期と考えられる。同範の埴仏が出土したことから、この時期に播磨と越中の方に交流があったことがうかがえる。





図 66 同範の埴仏（左：正法寺山遺跡出土、右：石名田木舟遺跡出土）

## 第 2 節 放射状丸瓦型について

### 〔1〕 方形屋蓋

丸瓦を放射状に配置する平面方形の屋蓋部をもつ瓦塔の例は、三重県四日市市の岡山 1 号窯跡、福岡県北九州市のトギバ 3 号窯跡、御祖神社裏窯跡、洗子窯跡、山方里窯跡、福岡県大野城市の牛頭本堂遺跡、大分県宇佐市の瓦塚遺跡から出土している。そのうち、トギバ 3 号窯跡、御祖神社裏窯跡、洗子窯跡、山方里窯跡は同じ水晶山系窯跡群であり、瓦塚遺跡出土の瓦塔もこれら水晶山系窯跡群のいずれかの窯から供給されたものである。

放射状丸瓦型・平面方形屋蓋部の瓦塔は、北部九州で盛行し、比較的限定された地域内で流通していた型式なのだろう。それが、都を越えてはるか東の伊勢国の岡山古窯へどのように伝わったのかは不明であるが、おそらく、放射状丸瓦型・平面方形の瓦塔製作の技術をもった工人の移動があったか、その製作技術が何らかの方法で伝えられたのであろう。瓦塔が出土する水晶山系窯跡群の操業時期は 8 世紀後半であるが、岡山 1 号窯の操業時期は 7 世紀末～8 世紀後半である。どちらが先行するかは不明であるが、北部九州でまとまって出土している事実から、この放射状丸瓦型・方形屋蓋の瓦塔を「北部九州型瓦塔」とする。

### 〔2〕 多角形（円形）屋蓋

丸瓦を放射状に配置し、屋蓋部の平面形が多角形もしくは円形になる例は、播磨・吉備に集中する傾向が見受けられる。便宜上、丸瓦・平瓦の瓦継ぎ目の有無で a～d 類に分類したが、丸瓦・平瓦と

もに瓦継ぎ目を施す b 類は西日本では確認されなかったため、a 類、c 類、d 類について考察していく。

#### a 類

a 類に分類されるものは、岡山県瀬戸内市の須恵廃寺、岡山県岡山市の賞田廃寺Ⅲ類、ハガ遺跡Ⅰ類、岡山県笠岡市の関戸廃寺(1)、広島県福山市の川谷遺跡の瓦塔である。このうち、賞田廃寺Ⅲ類、ハガ遺跡Ⅰ類、川谷遺跡例には、円筒形の軸部が組み合う。

また、ハガ遺跡Ⅰ類は、d 類に分類されているハガ遺跡Ⅱ類に先行する型式である可能性がある。池田敏宏氏は、時代が下るにつれて瓦塔の細部の表現が簡略・省略されることを指摘しており(池田 1999)、この説が西日本の瓦塔にも適用されるのであれば、ハガ遺跡Ⅰ類はⅡ類よりも古い型式であるといえる。これについては、報告書(岡山市教育委員会 2004)の第Ⅳ章で考察されている。

#### c 類

c 類に分類されるものは、岡山県岡山市の吉井廃寺出土の瓦塔のみであった。丸瓦には半截竹管状の工具で沈線を施し、平瓦にはへら状工具で線刻を施して瓦一枚一枚を表現している。中心部分でこれらの屋根瓦の様相を保ったまま立ち上がっており、そのまま軸部の壁面としている。屋蓋部はおそらく平面円形で、軸部は円筒形である。

また、軒先には丸瓦・平瓦部ともに蓮華文を模したと思われるスタンプが押されている。吉備から出土する瓦塔には、軒先にスタンプ、あるいはへら描きで文様を施すものが多く見られ、この地域の瓦塔の特徴のひとつといえるだろう。

#### d 類

d 類に分類されるものは、和歌山県紀の川市の北山廃寺、兵庫県宍粟市の千本屋廃寺、岡山県岡山市のハガ遺跡Ⅱ類・岡山県津山市の大田茶屋遺跡、福岡県北九州市のトギバ 3 号窯跡(屋蓋部 2)の瓦塔である。千本屋廃寺、ハガ遺跡からは軸部も出土しており、いずれも壁面に複数の透かしが施されている。本来ならば、初層軸部に大きく開口部を設けて入口とするのが一般的であるが、播磨・吉備地域では縦長の透かしを複数設けたものが目立つ。

丸瓦が放射状に配置されていても、軒先の部分が出土しない限り屋蓋部の平面形を判断することはできないので、多角形もしくは円形と分類しているもののなかには、平面方形のものも含まれている可能性がある。しかし、いずれにせよ放射状丸瓦型は西日本に集中しており、東日本ではほとんどみられない。北部九州、吉備・播磨地域特有の型式である。

また、これら放射状丸瓦型の屋蓋部に組み合う軸部のほとんどは円筒形である。北部九州に集中している水晶山系窯跡群からは、瓦塔軸部は出土していないが、屋蓋部の中心部には心柱を通すための円孔が穿たれており、その周縁を円形に調整していることから、屋蓋部には円筒形軸部が組み合うと想定される。岡山 1 号窯跡出土の瓦塔Ⅰ類も、中心部は円形に調整されている。吉備・播磨からは実

際に円筒形の軸部が出土しており、そのなかでも千本屋廃寺、賞田廃寺Ⅳ類、ハガ遺跡Ⅱ類、川谷遺跡、来住廃寺例は、屋蓋部と円筒形軸部が一体に成形されており、軸部には複数の透かしが施されたものもある。千本屋廃寺例は多層塔ではなく単層の可能性があるので、瓦塔というよりも瓦堂と表現すべきかもしれないが、このように放射状に丸瓦を配置し、円筒形の軸部を屋蓋部と一体にして成形する手法が播磨・吉備の瓦塔の特徴であろう。

### 第3節 中世以降の瓦塔について

瓦塔はおもに奈良・平安時代のものが中心ではあるが、中世以降もその製作はわずかではあるが続く。第2章では、西日本から出土した古代の瓦塔に限定したが、ここで中世以降に製作された瓦塔について紹介する。

池田敏宏氏が指摘しているように、古代の瓦塔は時代が下るにつれて表現が簡略化される傾向にあるが、中世に入ってもその性質は引き継がれ、細部が省略されて総高が1mに満たないものが作られるようになる。その一方で、実際の塔建築を模して非常に写実的な構造をもつ瓦塔も作られるようになる。後者は大型のものが多く、屋蓋部もかなり厚手に作っている。

#### 観音沖遺跡（三重県亀山市関町新所観音沖）

瓦塔の屋蓋部が2点出土しており、全体的に灰黒色である。2点は同一個体と思われる。棒状粘土を貼り付けて丸瓦を表現しており、丸瓦・平瓦ともに沈線を施して瓦一枚一枚を表現している。平瓦に施された沈線の間隔は、軒先に向かうにつれて徐々に狭くなる。軒先の瓦当面には竹管文が施されている。

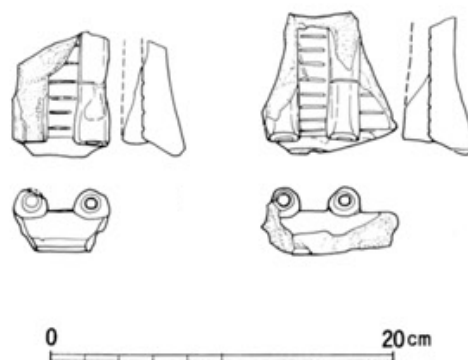


図 67 観音沖遺跡出土の瓦塔

#### 専修寺境内遺跡<sup>(5)</sup>（三重県津市一身田町）

真宗高田派の本山で、その創建は1474年～1487年である。屋蓋部が1点、基壇部が3点出土している。いずれも瓦質で、重厚感がある。丸瓦には3cmごとに沈線を施し、平瓦は板状工具で瓦一枚一枚を作り出している。軒丸瓦の上部には小さく丸めた粘土を貼り付けており、瓦釘もしくは釘隠しを表現している。瓦当面には、八葉の蓮華文スタンプが押されている。屋蓋部の裏面は剥離しており、垂木表現は確認できない。基壇部は一辺約70cmで、各辺の中央に5段の階段を設けている。基壇側面全体に刺突文を施しており、基壇上部中央には直径約8cmの心柱孔が開けられている。

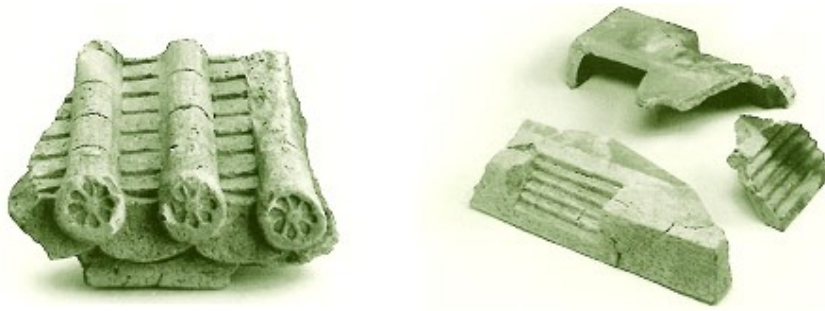


図 68 専修寺境内遺跡出土の瓦塔

### 福泉寺（三重県津市大里山室町）

かつては真言宗に属し、七堂伽藍を有する古刹であったが、天正・永禄の兵火で寺堂は焼失してしまった。本尊である千手観音立像だけが炎を免れ、後に小堂が建てられてそこに安置された。明治初年に廃寺となったが、近年、小堂は同地に全面改築され、瓦塔は仏像と共に堂内に祀られている。瓦塔が置かれたのは16世紀以降である。

瓦塔は五重塔を模しており、その高さは82.8 cmである。全体のパーツに対して相輪が太くて大きい。初層軸部と第五層目の屋蓋部以外は、屋蓋部とその直上の軸部が一体になっている。上層へいくにつれ徐々に屋蓋部が小さくなる。丸瓦・平瓦ともへら状工具による刻み目で瓦一枚一枚を表現しており、裏面には垂木表現がある。屋蓋部の四隅に風鐸を吊るすための円孔が穿たれており、軸部には各面に2つつつ小さな窓が設けられている。

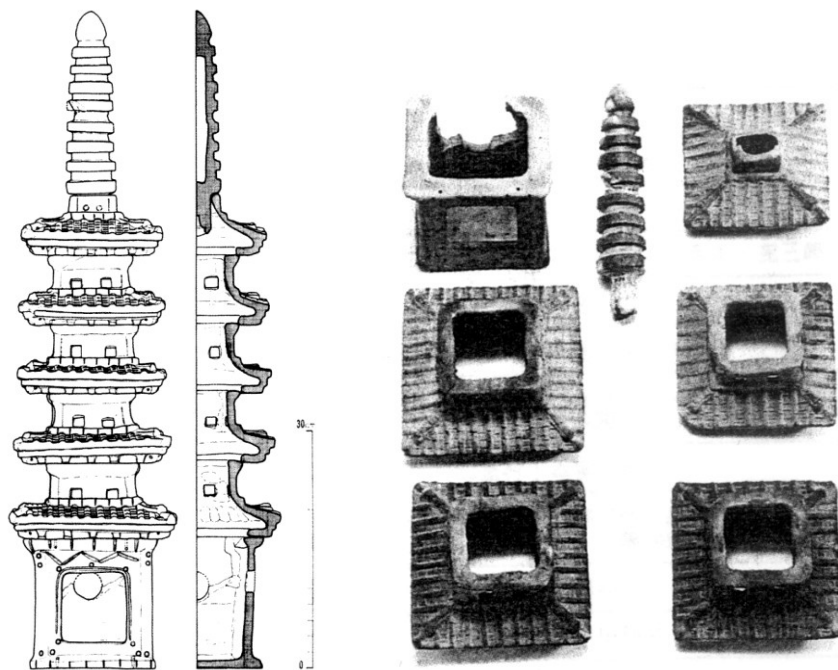


図 69 福泉寺の瓦塔

### 多聞城跡（奈良県奈良市法蓮町）

多聞城は永禄 3（1560）年築城であるが、多聞城跡から出土する遺物のなかには、多聞城築城以前からこの地に存在した眉間寺や西方寺、常德寺、善鐘寺などの寺院に関係するものも含まれている。瓦塔は屋蓋部の軒下部分が 2 点出土しているが、その出土状況は不明である。しかし、軒下に透かし彫りの本墓股を表現しており、その建築様式から中世のものと考えられる。本墓股自体は平安時代末期からみられる部材であるが、その内部の彫刻に装飾性が求められるようになるのは更に時代が下ってからである。



図 70 多聞城跡出土の瓦塔

### 黒山廃寺（大阪府堺市美原区黒山）

黒山廃寺は奈良時代前期に創建され、末期に焼失、その後鎌倉時代に再建された。瓦塔片が 2 点出土しているが、詳しい出土状況は報告されていないようである。

出土した 2 点の瓦塔片はいずれも屋蓋部で、表面の色調は黒色、断面が灰色の瓦質のため、鎌倉期の所産という見解が示されている。丸瓦にはヘラで浅く刻み目を付け、平瓦にはヘラ状工具を用いて段を付けて瓦一枚一枚を作り出している。裏面に垂木表現はなく、また、屋蓋部上端には幅約 1.5 cm の立ち上がりが設けられている。屋蓋部は、軸部に対して屋蓋部は 55° の角度をもっており、屋根の傾斜が急な印象を受ける。



図 71 黒山廃寺出土の瓦塔



### 金剛峯寺遺跡（和歌山県伊都郡高野町高野山）

金剛峯寺は弘仁 7（816）年、空海によって開山された。建設工事の難航や資金不足により、最終的に伽藍が完成したのは 9 世紀後半とされている。

丸瓦には規則的な沈線を付けて瓦一枚一枚を表現している。平瓦もヘラ状工具で刻み目を施し、瓦一枚一枚が表現している。軒先の丸瓦の上部に刺突文（瓦釘の表現か？）があり、瓦当面には○形のスタンプが押されている。裏面には、ヘラで削り出した一軒の垂木が表現されている。共伴する遺物は中・近世のものがほとんどで、瓦塔も鎌倉時代のもものとされている。

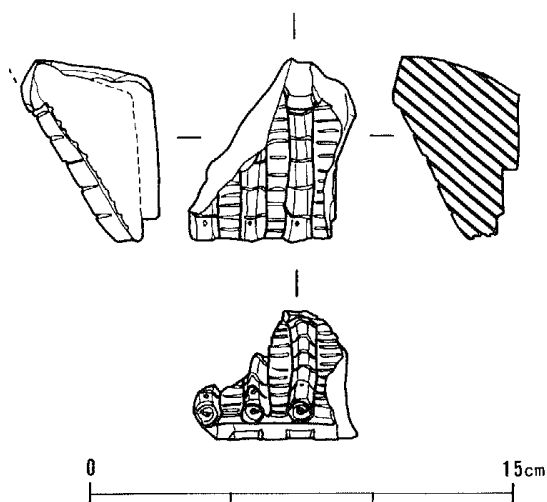


図 72 金剛峯寺遺跡出土の瓦塔

### 宝満山遺跡（福岡県筑紫野市）

上宮地区から、鎌倉時代以降のもものとされる瓦塔が 1 点採集されている。屋蓋部の軒先の部分で、胎土はやや粗く焼成は堅固、色調は灰褐色である。丸瓦のみを表現しており、瓦当面には巴文を施している。裏面には垂木が表現されている。

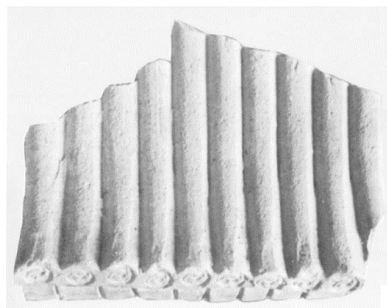
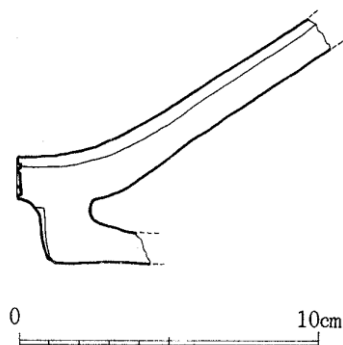


図 73 宝満山遺跡出土の瓦塔

### 太宰府条坊跡（福岡県太宰府市五条二丁目）

第 157 次調査時に、緑釉を施した瓦塔の屋蓋部が出土している。素地は土師質で、胎土は精良、焼成も良好である。丸瓦のみを表現しており、瓦幅は約 0.9 cm である。12 世紀後半～13 世紀後半頃のものと思われる。

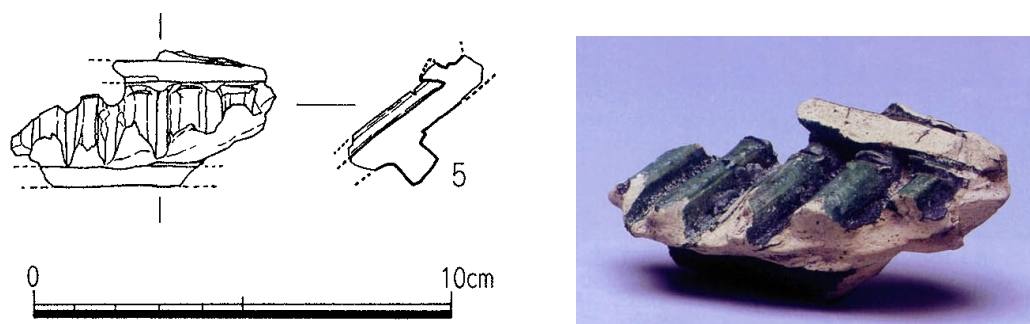


図 74 大宰府条坊跡出土の瓦塔

<註>

- (1) 屋蓋部が出土していても、小片で判別がつかないものは表 5 に含まないものとする。
- (2) 池田敏宏氏は、関東地方の瓦塔の屋蓋部を分析し、瓦表現と垂木表現の手法から以下の表 6 のように分類している（池田 1999）。

表 6 池田氏による瓦塔屋蓋部の類型

類型名称	標識資料	瓦表現手法	垂木表現手法
姥田類型	姥田窯跡瓦塔（埼玉県）	幅広棒状粘土貼り付け手法	棒状粘土貼り付け手法
勝呂類型	勝呂廃寺瓦塔（埼玉県）	幅狭棒状粘土貼り付け手法	へら削り出し A 手法
多武峯類型	多武峯遺跡瓦塔（埼玉県）	幅広工具押し引き A 手法	へら削り出し A 手法
萩ノ原類型	萩ノ原遺跡瓦塔（千葉県）	幅広工具押し引き B 手法	へら削り出し A 手法
大仏類型	大仏廃寺瓦塔（埼玉県）	幅広工具押し引き B 手法	へら削り出し B 手法
宮ノ前類型	宮ノ前第 2 遺跡瓦塔（山梨県）	幅広工具押し引き B 手法	へら削り出し C2 手法
東山類型	東山遺跡瓦塔（埼玉県）	幅狭工具押し引き A 手法	へら削り出し C1 手法
上西原類型	上西原遺跡瓦塔（群馬県）	幅狭工具押し引き A 手法	へら削り出し C2 手法
柳原類型	柳原 A 遺跡瓦塔（埼玉県）	幅狭工具押し引き B 手法	へら削り出し C2 手法
東郷台類型	東郷台遺跡瓦塔（千葉県）	幅狭工具押し引き C 手法	へら削り出し C2 手法

- (3) 註(2)。
- (4) 石名田木舟遺跡からは、瓦塔の一部と考えられる𦵏崩し高欄が出土している。高欄をもつ瓦塔は、長野県塩尻市の菖蒲沢窯跡、愛知県名古屋市の NN286 号窯跡、奈良県奈良市の薬師寺から出土しているが、𦵏崩し高欄をもつものは唯一石名田木舟遺跡のみである（松本 1995）。
- (5) 筆者は、卒業論文で専修寺境内遺跡出土の瓦塔を古代の瓦塔として紹介したが、現時点で中世以降の瓦塔である可能性が高いという結論に至った。また、本遺跡出土の瓦塔については、現在熱ルミネッセンス測定による分析を行っている。測定の結果については別稿を期したい。

## 結語

西日本の瓦塔は、型式化された東日本の瓦塔に比べて各々個性があるので、類型化することは困難である。しかし、地域ごとに分析していくと、それぞれの特徴を見出すことができる。畿内では、屋蓋部と軸部を一体にして成形する手法が比較的多く採用されており、播磨・吉備地域の瓦塔は、多角形ないし円形の屋蓋部を有し、丸瓦を放射状に配置する例が多い。それに組み合う軸部は円筒形のものが多く、軸部には複数の透かしが施されている。平面方形の屋蓋部で、丸瓦を放射状に配置する北部九州型瓦塔は、おもに福岡県北九州市の水晶山系窯跡群に集中しており、この型式の屋蓋部に組み合う軸部も円筒形であると思われる。

また、関東地方で瓦塔が最盛期を迎えるのは8世紀末～9世紀中葉であるが、西日本の瓦塔は8世紀後半代に位置付けられるものが多い。衣川廃寺例や、瀬後谷瓦窯例にみられるように、関東地方で隆盛する瓦塔型式に先行するものが西日本から出土しており、瓦塔製作の文化が西から東へ伝播していった様子がうかがえる。

そして、古代に比べると数は少ないが、西日本では中世以降も瓦塔製作が続く。古代瓦塔は、時代が下るにつれて省略化・簡略化される傾向にあるが、さらに時代が下って中世に入るとその様相は一変し、非常に写実的な瓦塔が作られるようになる。

## 謝辞

この修士論文を作成するにあたり、指導教員である小澤毅先生、山中章先生には丁寧かつ熱心なご指導をいただきました。また、資料実見においては、三重県埋蔵文化財センターの泉雄二氏、西村美幸氏、古代吉備文化財センターの宇垣匡雅氏、尾上元規氏、岡山市埋蔵文化財センターの長谷川一英氏に貴重なお時間を割いていただき、大変お世話になりました。そして、専修寺境内遺跡出土瓦塔の実見に同行していただいた近畿大学教授の網伸也先生、柏原市教育委員会の石田成年氏、近畿大学名誉教授の大脇潔氏、愛知県埋蔵文化財センターの永井邦仁氏、京都府立大学教授の菱田哲郎先生、鈴鹿市考古学博物館の吉田真由美氏には多数の有益なご教示を賜りました。資料の理化学分析には、皇學館大学の近藤玲介先生にご協力いただき、津市教育委員会の熊崎司氏には試料採取に快諾していただきました。ここに感謝の意を表します。



図6 西日本の瓦塔一覧

都道府県名	遺跡名	部位	種別	住所	時期	特徴	参考文献
三重県	岡山1号窯跡	屋蓋部・基壇部	窯跡	三重県四日市市上海老町	8C後半	方形屋蓋・放射状丸瓦型	四日市市教育委員会1966
	観音沖遺跡	屋蓋部	瓦窯か	亀山市関町新所	近世		三重県埋蔵文化財センター2000
	専修寺境内遺跡	屋蓋部・基壇部		津市一身田町	中世以降		中村2001
	福泉寺	全形		津市大里山室町	近世		中村2001
	中ノ庄遺跡	屋蓋部・斗拱部		松阪市中ノ庄町		猿投窯型瓦塔	三重県教育委員会1972
奈良県	多聞城跡	屋蓋部		奈良県奈良市法蓮町	中世	本墓股の表現	奈良市埋蔵文化財センター2015
	法華寺			法華寺町			
	薬師寺	高欄部・基壇部	寺院跡	西ノ京町		二彩	杉山1991
	唐招提寺			五条町			
滋賀県	衣川廃寺	屋蓋部	寺院跡	滋賀県大津市堅田衣川町西羅	7C代	一部に赤彩	小笠原1989、滋賀県教育委員会1975
京都府	瀬後谷遺跡	屋蓋部破片ほか多数	窯跡	京都府木津川市市坂	8C前半か	一部に緑釉	石井1996、1999
大阪府	勝部遺跡	屋蓋部		大阪府豊中市勝部		屋蓋部が小型、軸部一体型	石田1997
	神感寺跡	屋蓋部？		東大阪市四条町			石田1997
	五十村廃寺	初層軸部	寺院跡	柏原市旭ヶ丘		軸部一体型？	大阪府柏原市教育委員会1984、石田1997
	黒山廃寺	屋蓋部	寺院跡	堺市美原区黒山	中世以降		石田1997
	鶴田池東遺跡	屋蓋部		菱木		屋蓋部が小型	大阪府教育委員会1980
和歌山県	北山廃寺	屋蓋部	寺院跡	和歌山県紀の川市貴志川町北山		八角形屋蓋	和歌山県文化財センター1996b
	金剛峯寺遺跡	屋蓋部	寺院跡	伊都郡高野町高野山	鎌倉時代		和歌山県文化財センター1996a
兵庫県	岩戸4号窯跡	屋蓋部	窯跡	兵庫県丹波市市島町岩戸	8C中葉	鴨庄古窯跡群に属する	兵庫県水上郡市島町1981
	金心寺廃寺	屋蓋部・軸部・初層軸部	寺院跡	三田市屋敷町	8C前葉～中葉	軸部は方柱形と円筒形の2種類	永井2009
	広渡寺廃寺	九輪・屋蓋部・初層軸部	寺院跡	小野市広渡町		軸部に透かし孔	兵庫県小野市教育委員会1977、2005
	正法寺山遺跡	屋蓋部・内陣		三木市和田町		内陣に仏像表現	松本修自1995
	下太田廃寺			姫路市下太田			
	千本屋廃寺	屋蓋部・軸部	寺院跡	宍粟市山崎町千本屋		円形屋蓋・放射状丸瓦型、 軸部一体型、軸部に透かし孔	兵庫県宍粟郡山崎町教育委員会1982
鳥取県	大原廃寺	屋蓋部もしくは軸部	寺院跡	鳥取県倉吉市大原			倉吉市教育委員会1999
	金田堂ノ脇遺跡	屋蓋部		西伯郡会見町金田宇大見堂			鳥取県教育文化財団1998
	朝金天田遺跡	屋蓋部		天萬	8C代		会見町教育委員会1996
	殿河内ウルミ谷遺跡	基壇部？		大山町			鳥取県埋蔵文化財センター2014
	泉中峰遺跡	屋蓋部と軸部の接合部か		米子市泉			鳥取県教育文化財団1994
島根県	才ノ神遺跡	屋蓋部		島根県安来市黒井田町		円形屋蓋	大庭ほか1995
岡山県	須恵廃寺	屋蓋部・軸部		岡山県瀬戸内市長船町西須恵		八角形屋蓋？	宇垣1985
	吉井廃寺	屋蓋部		岡山市東区吉井		多角形もしくは円形屋蓋	大橋2013、亀田2002
	賞田廃寺	水煙・屋蓋部・軸部・初層軸部		中区賞田			高橋ほか2005

都道府県名	遺跡名	部位	種別	住所	時期	特徴	参考文献
岡山県	ハガ遺跡	水煙・屋蓋部・軸部		岡山県岡山市中区国府市場			岡山市教育委員会2004
	神力寺廃寺	屋蓋部	寺院跡	北区一宮		瓦塔の他、二彩磁塔	
	釈塔遺跡	屋蓋部		倉敷市福田町広江			亀田2002、福本1996、間壁1996
	今岡廃寺	屋蓋部	寺院跡	美作市今岡			佐藤2002
	江見廃寺	屋蓋部・初重軸部	寺院跡	江見		一部に赤彩	大橋2013、亀田2002
	大田茶屋遺跡	屋蓋部・基壇部		津山市大田			岡山県教育委員会1998
	備中国分寺跡	屋蓋部・軸部	官衙施設跡	総社市上林			亀田2002
	鬼ノ城	屋蓋部	山城跡	奥坂			岡山県教育委員会2013
	関戸廃寺	屋蓋部・軸部・初層軸部	寺院跡	笠岡市関戸			笠岡市教育委員会1997
広島県	川谷遺跡	屋蓋部		広島県福山市神辺町上竹田	共存軒先瓦は8C後半～10C	採集品	亀田2002
	ホリノ河内遺跡(備後国府跡)	部位不明	国府関連施設跡	府中市元町	平安時代前期か?		亀田2002
	寺戸廃寺	初層入口部?・小型鴟尾	寺院跡	三次市三次町寺戸			亀田2002
愛媛県	来住廃寺	屋蓋部	寺院跡	愛媛県松山市来住町		軸部一休型、円筒形軸部	松山市教育委員会2009
徳島県	石井廃寺	屋蓋部・初層軸部	寺院跡	徳島県名西郡石井町城ノ内		円筒形軸部か	徳島県教育委員会1962
福岡県	トギバ3号窯跡	屋蓋部	窯跡	北九州市小倉南区	8C後半～末頃	水晶山系窯跡群に属する	小田ほか2007
	粉ノ粉池窯跡群	屋蓋部	窯跡	〃	9C初頭		小田ほか2007
	御祖窯跡群	屋蓋部	窯跡	〃	8C後半	水晶山系窯跡群に属する	小田ほか2007
	山方里窯跡群	水煙・屋蓋部・心柱円筒部	窯跡	〃	8C後半	水晶山系窯跡群に属する	小田ほか2007
	洗子窯跡	水煙・九輪・屋蓋・風鐸・心柱円筒部	窯跡	〃	8C後半～末	水晶山系窯跡群に属する	小田ほか2007
	牛頭本堂遺跡	屋蓋部	窯跡	福岡県大野城市上大利	8C後半?		大野城市教育委員会2004、小田ほか2007
	宝満山遺跡	屋蓋部		筑紫野市	中世以降		小田1982
	般若寺跡	屋蓋部	寺院跡	大宰府市朱雀			小田ほか2007
	観世音寺裏	屋蓋部		観世音寺		六角形屋蓋、瓦堂か	小田ほか2007
	大宰府条坊跡	屋蓋部	条坊街区	五条二丁目	12C後半～13C後半	全体的に緑釉	太宰府市教育委員会2002
佐賀県	上和泉遺跡	屋蓋部・初重軸部	土坑群・集落跡	佐賀県佐賀市久保泉町上和泉	8C末～9C前半	初層軸部の一部に赤彩	小田ほか2007
	徳永遺跡	屋蓋部	集落跡	徳永	8C後半		佐賀市教育委員会2004
大分県	瓦塚遺跡	屋蓋部	郡衙かその関連施設	大分県宇佐市大字石田	8C後半		宇佐市教育委員会2006
	塔ノ熊廃寺	屋蓋部		中津市三光西秣	8C中頃～後半		小田ほか2007
熊本県	陳内廃寺	屋蓋部	寺院跡	熊本県熊本市南區城南町陳内	8C後半		小田ほか2007
	妙見中宮榎場遺跡	屋蓋部・斗栱部	寺院跡?	八代市妙見町榎場	平安時代?		江上1990、小田ほか2007
	御手洗堂神社遺跡	水煙部		上益城郡甲佐町安平			田嶋1983

<参考文献>

- 会見町教育委員会 1996 『朝金天田遺跡発掘調査報告書』
- 石井清司 1996 「瀬後谷瓦窯出土の土製塔」『京都府埋蔵文化財論集』第3集 京都府埋蔵文化財調査研究センター  
1999 「瀬後谷瓦窯」『京都府遺跡調査報告書』第27冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 石田成年 1997 「摂河泉の瓦塔」『河内古文化研究論集』 柏原市古文化研究会
- 石村喜英 1971 「瓦塔と泥塔」『新版考古学講座』8 雄山閣
- 池田敏宏 1995 「瓦塔屋蓋部表現手法の検討—埼玉県児玉町堂平遺跡採集瓦塔をめぐって—」『土曜考古』第19号 土曜考古学研究会  
1996 「瓦塔屋蓋部編年試論—北武蔵6～8類瓦塔、類似資料を中心として—」『土曜考古』第20号 土曜考古学研究会  
1998 「瓦塔屋蓋部編年試論Ⅱ—北武蔵1～5類瓦塔、類似資料を中心として—」『土曜考古』第22号 土曜考古学研究会  
1999 「関東地方瓦塔編年と他地域瓦塔編年の比較・検討—関東地方瓦塔屋蓋部編年の検証作業を中心に—」『研究紀要』第7号 栃木県文化振興事業団 埋蔵文化財センター  
2000 「陶製仏殿についての若干の考察—編年・系譜、概念定義の検討—」『研究紀要』第10号 とちぎ生涯学習文化財団 埋蔵文化財センター  
2001 「初現期瓦塔の系譜—日韓出土瓦塔の比較・検討—」 土曜考古学研究会レジュメ
- 出河裕典 1995 「信濃の瓦塔再考—近年の出土例を中心として—」『信濃』第47巻 第4号 信濃史学会  
1996 「瓦塔の生産—塩尻市菖蒲沢窯跡の資料の検討を通して—」『長野県の考古学』 長野県埋蔵文化財センター
- 上田 睦 1991 「寺を建てた氏族たち—摂・河・泉—」『古代の寺を考える—年代・氏族・交流—』 帝塚山考古学研究所
- 宇垣匡雅 1985 「須恵廃寺採集の瓦」『西谷遺跡』 長船町教育委員会
- 宇佐市教育委員会 2006 『瓦塚遺跡』
- 江上敏勝 1990 「熊本県八代市妙見中宮跡出土の瓦塔及び塔心礎等について」『乙益重隆先生古稀記念論文集 九州上代文化論集』 乙益重盛先生古稀記念論文集刊行会
- 大阪府教育委員会 1980 『西浦橋・鶴田池東遺跡発掘調査概要』
- 大野城市教育委員会 2004 『牛頸本堂遺跡群Ⅱ』
- 大橋雅也 2013 「第6節 出土瓦塔について」『史跡 鬼城山2「甦る!古代吉備の国～謎の鬼ノ城」城内確認調査』 岡山県教育委員会
- 大原町教育委員会 2002 『今岡廃寺—大原町今岡地区圃場整備事業に伴う発掘調査—』
- 大脇 潔 1995 「瓦塔にまつられた仏像」『富山県福岡町石名田木舟遺跡発掘調査報告書』 福岡町教育委員会
- 小笠原好彦 1989 「衣川廃寺」『近江の古代寺院』 近江の古代寺院刊行会
- 岡山県教育委員会 1998 『大田茶屋遺跡2・大田障子遺跡・大田松山久保遺跡・大田大正開遺跡・大田西奥田遺跡』 岡山県教育委員会  
2013 『史跡 鬼ノ城2「甦る!古代吉備の国～謎の鬼ノ城」城内確認調査』

- 岡山市教育委員会 2004 『ハガ遺跡—備前国府関連遺跡の発掘調査報告—』
- 2005 『史跡賞田廃寺跡—史跡環境整備事業に伴う発掘調査報告—』
- 小田富士雄 1982 『宝満山の地宝—宝満山の遺跡と遺物—』 大宰府顕彰会
- 小田富士雄ほか 2007 『豊前・トギバ窯跡の調査—古代須恵器・瓦塔に関する研究—』 福岡大学人文学部考古学研究室
- 柏原市教育委員会 1984 「五十村廃寺」『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 1983 年度』
- 亀田修一 2002 「吉備の瓦塔」『環瀬戸内海の考古学—平井勝氏追悼論文集—』下巻 古代吉備研究会
- 倉吉市教育委員会 1999 『史跡大原廃寺発掘調査報告書』
- 佐賀市教育委員会 2004 『徳永遺跡群XIV 徳永遺跡 15・18 区』
- 笹岡市教育委員会 1997 『関戸廃寺』
- 滋賀県教育委員会 1975 『衣川廃寺発掘調査報告』
- 柴田常恵 1931 「瓦塔」『埼玉史談』第 2 巻 第 4 号 埼玉郷土会
- 島根県教育委員会 1995 「第 3 章 オノ神遺跡」『オノ神遺跡・普請場遺跡・島田黒谷 I 遺跡』
- 杉山 洋 1991 「薬師寺出土の二彩陶塔」『奈良国立文化財研究所年報』 奈良国立文化財研究所
- 善端 直 1994 「北陸の古代瓦塔」『文化財学論集』 奈良大学
- 高崎光司 1989 「瓦塔小考」『考古学雑誌』第 74 巻 第 3 号 日本考古学会
- 1990 「瓦塔瞥見」『研究紀要』第 7 号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 太宰府市教育委員会 2002 『大宰府条坊跡 21』
- 田嶋 守 1983 「肥後における瓦塔の一例」『肥後考古』第 4 号 肥後考古学会
- 伊達宗泰 1955 「室町時代の瓦製塔について」『古代学研究』第 12 号 古代学研究会
- 谷川磐雄 1927 「二三の土製多重塔に就いて」『考古学雑誌』第 17 巻 第 2 号 考古学会
- 津市埋蔵文化財センター 1997 『埋文センターニュース』第 6 号
- 徳島県教育委員会 1962 『石井』
- 鳥取県教育文化財団 1994 『鳥取県米子市 泉中峰・泉前田遺跡』
- 1998 「第 3 章 金田堂ノ脇遺跡の調査」『御内谷遺跡群』
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2014 『鳥取県西伯郡大山町 殿河内ウルミ谷遺跡』
- 永井邦仁 2006 「東海地方の古代瓦塔研究ノオト」『研究紀要』第 7 号 愛知県埋蔵文化財センター
- 2008 「猿投窯型瓦塔の展開(1)」『研究紀要』第 9 号 愛知県埋蔵文化財センター
- 2009 「猿投窯型瓦塔の展開(2)」『研究紀要』第 10 号 愛知県埋蔵文化財センター
- 2012 「江南市音楽寺遺跡出土の美濃須衛窯型瓦塔」『研究紀要』第 13 号 愛知県埋蔵文化財センター
- 2016 「続・東海地方の古代瓦塔研究ノオト」『研究紀要』第 17 号 愛知県埋蔵文化財センター
- 中村光司 2001 「小仏塔と瓦職人—近世瓦塔の存在とその地域的背景—」『津市民文化』第 28 号 津市教育委員会
- 奈良市埋蔵文化財センター 2015 『平成 27 年度秋季特別展 近世奈良の開幕—多聞城と郡山城—』
- 奈良国立文化財研究所 1984 『小建築の世界—埴輪から瓦塔まで—』
- 橋本正春 1995 「石名田木舟遺跡出土の宗教遺物について」『富山県福岡町石名田木舟遺跡発掘調査報告書』 福岡町教育委員会

- 橋本雄一ほか 2010 『史跡久米官衙遺跡群調査報告書 4』 松山市教育委員会
- 兵庫県小野市教育委員会 1977 『播磨広渡寺廃寺跡発掘調査報告』
- 2005 『国史跡広渡寺跡発掘調査報告書』
- 兵庫県宍粟郡山崎町教育委員会 1982 『播磨千本屋廃寺跡』
- 兵庫県氷上郡市島町 1981 「第二部 鴨庄古窯跡群」『丹波三ツ塚遺跡Ⅲ』
- 福岡町教育委員会 1995 『富山県福岡町石名田木舟遺跡発掘調査報告書』
- 福本 明 1996 「付章 主な遺跡 95 釈迦遺跡」『新修 倉敷市史 第1巻 考古』 倉敷市
- 舟山良一 2008 『牛頭窯跡群—総括報告書Ⅰ—』 大野城市教育委員会
- 間壁忠彦 1996 「第八章 奈良時代以降の遺跡 第一節 仏教遺跡」『新修 倉敷市史 第1巻 考古』 倉敷市
- 間壁忠彦・間壁菫子 1970 『岡山の遺跡めぐり 岡山文庫 31』 日本文教出版
- 松本修自 1983 「小さな建築—瓦塔の一考察—」『文化財論叢』 奈良国立文化財研究所
- 1995 「石名田木舟遺跡出土の瓦塔について」『富山県福岡町石名田木舟遺跡発掘調査報告書』 福岡町教育委員会
- 松山市教育委員会 2009 『来住廃寺 36 次調査現地説明会資料』
- 三重県教育委員会 1972 『中ノ庄遺跡発掘調査報告』
- 三重県埋蔵文化財センター 2000 『観音沖遺跡発掘調査報告』
- 美原町教育委員会 1980 『黒山廃寺発掘調査概要』
- 四日市市教育委員会 1966 『四日市市埋蔵文化財調査報告書 第1集』
- 和歌山県文化財センター 1996 『北山廃寺発掘調査報告書』
- 1996 『金剛峯寺遺跡—尼僧研修道場建設に伴う発掘調査報告書—』

<挿図出典>(いずれも一部改変引用)

- |                                  |                             |
|----------------------------------|-----------------------------|
| 図 2 高崎 1989 より                   | 図 14 兵庫県氷上郡市島町 1981 より      |
| 図 3 左は池田 1995 より、右は筆者撮影          | 図 15 永井 2009 より             |
| 図 4 1～3 は筆者実測                    | 図 16 兵庫県小野市教育委員会 1977 より    |
| 4 は四日市市教育委員会 1966 掲載のものをトレース     | 図 17 福岡町教育委員会 1995 より       |
| 図 5 1 は四日市市教育委員会 1966 掲載のものをトレース | 図 18 兵庫県宍粟郡山崎町教育委員会 1982 より |
| 2 は筆者実測                          | 図 19 倉吉市教育委員会 1999 より       |
| 図 6 三重県教育委員会 1972 より             | 図 20 鳥取県教育文化財団 1998 より      |
| 図 7 滋賀県教育委員会 1975 より             | 図 21 会見町教育委員会 1996 より       |
| 図 8 杉山 1991 より                   | 図 22 島根県教育委員会 1995 より       |
| 図 9 石井 1999 より                   | 図 23 宇垣 1985 より             |
| 図 10 石田 1997 より                  | 図 24 大橋 2013 より             |
| 図 11 柏原市教育委員会 1984 より            | 図 25～28 岡山市教育委員会 2005 より    |
| 図 12 大阪府教育委員会 1980 より            | 図 29～31 岡山市教育委員会 2004 より    |
| 図 13 和歌山県文化財センター1996 より          | 図 32 間壁ほか 1970 より           |

図 33 小田ほか 2007  
図 34 福本 1996 より  
図 35 亀田 2002 より  
図 36 大橋 2013 より  
図 37 岡山県教育委員会 1998 より  
図 38 亀田 2002 より  
図 39 岡山県教育委員会 2013 より  
図 40 笹岡市教育委員会 1997 より  
図 41・42 亀田 2002 より  
図 43 徳島県教育委員会 1962 より  
図 44～52 小田ほか 2007 より  
図 53 高崎 1989 より  
図 54 佐賀市教育委員会 2004 より  
図 55～58 小田ほか 2007

図 59 田嶋 1983 より  
図 60・61 池田 1995  
図 62・63 永井 2016 より  
図 64 筆者撮影  
図 65 池田 1995 より  
図 66 福岡町教育委員会 1995 より  
図 67 三重県埋蔵文化財センター2000 より  
図 68 津市埋蔵文化財センター1997 より  
図 69 中村光司 2001 より  
図 70 奈良市埋蔵文化財センター2015 より  
図 71 美原町教育委員会 1980 より  
図 72 和歌山県文化財センター1996  
図 73 小田富士雄 1982 より  
図 74 太宰府市教育委員会 2002 より